

長崎県文化財調査報告書 第81集

上原遺跡

1986

長崎県教育委員会

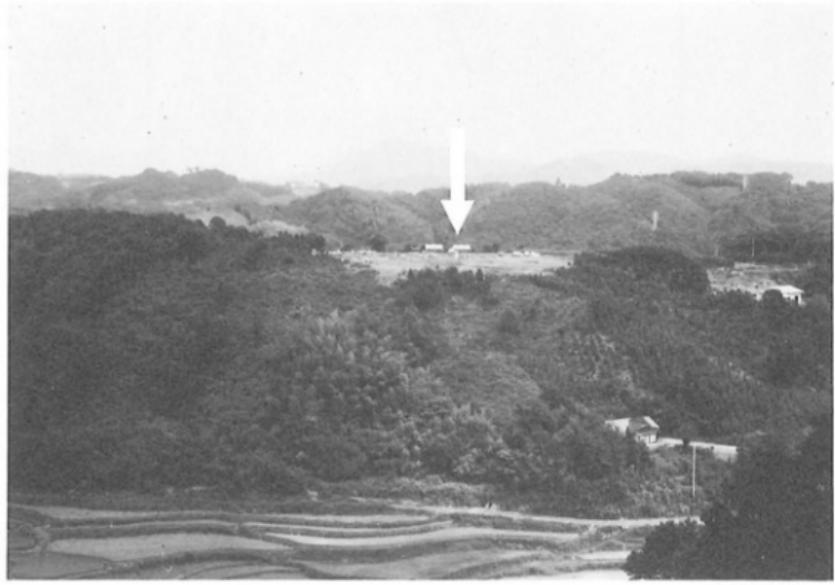
題字は浦川春実氏による



上原遺跡



Fig. 1 遺跡位置図



遺跡遠景

序 文

このたび、上原遺跡の調査報告書を公刊することとなりました。

この報告書は、佐世保一武雄間のバイパス建設工事に伴い、事業主体である日本道路公団より、長崎県教育委員会が委託を受けて事前に発掘調査を実施し、内容を取りまとめたものであります。

発掘調査は、昭和59年4月より同年11月まで行い、その結果、旧石器時代～縄文時代の石器、土器など総数3万点を超える遺物や遺構群を検出しました。

それらの調査により、本県の貴重な歴史資料の数々に新たな資料を加えることになりました。

本調査の実施にあたり、真摯に御協力をいただいた関係者の皆様に感謝申し上げますと共に本書が学術、教育、文化財保護の資料として広く一般の活用に供することができれば望外の幸せであります。

昭和61年3月31日

長崎県教育長 伊藤昭六

例　　言

1. 本報告は、昭和59年4月16日から昭和59年11月30日まで実施した佐世保市早岐地区に所在する国道35号線バイパス関係の埋蔵文化財調査報告である。
2. 調査は、長崎県教育庁文化課が行い、高野晋司（主任文化財保護主事）・福田一志（文化財調査員）・草野誠司（同）が担当した。
3. 本報告は、分担執筆し、各項執筆者は文末に記した。
4. 本報告の遺物の科学分析の内、土壤の花粉分析結果については、バリノサー・ヴェイ藤より巻末に附した報告を受けた。
5. 本報告の関係遺物は、現在長崎県教育庁文化課が保管の任にあたっている。
6. 本報告の編集責任は草野による。

また、発掘現場において、多くの方々の御協力があった。芳名を記して感謝申し上げたい。
久村貞男、山口正人、山田鐵也、高瀬美智子
山鹿敏紀
(敬称略)

本 文 目 次

I 序説	
一、調査に至るまで	1
二、調査経過	1
三、遺跡の地理的歴史的環境	5
II 遺跡の調査	
一、層位	11
二、遺構	19
1号土壙	19
2号土壙	21
3号土壙	22
4号土壙	23
5号土壙	24
6号土壙	26
7号土壙	26
8号土壙	27
9号土壙	28
10号土壙	29
11号土壙	32
12号土壙	32
III 出土遺物	
一、近世磁器	34
近世陶器	34
窯道具	34
明染付	34
二、縄文土器	37
三、縄文時代の石器	40
四、旧石器時代の遺物	58
遺跡周辺表面採集の石器	60
A地点表土出土の石器	60
A地点出土の石器	60

B地点出土の石器	70
A地点ナイフ形石器遺存状態	79
B地点の遺物遺存状態	83
IV 上原遺跡試料花粉分析結果報告	86

挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡位置図	
Fig. 2 上原台地付近断面図	2
Fig. 3 調査区配置図	3
Fig. 4 調査区区分図	4
Fig. 5 金ヶ崎城図	8
Fig. 6 井手平城図	8
Fig. 7 局辺遺跡図 ($\frac{1}{5000}$)	9
Fig. 8 掘載土層位置図	11
Fig. 9 遺跡周辺表層地質図	12
Fig. 10 A地点10列東壁土層図 ($\frac{1}{80}$)	13
Fig. 11 A地点C列北壁土層図 ($\frac{1}{80}$)	15
Fig. 12 A地点G列北壁土層図 ($\frac{1}{80}$)	15
Fig. 13 B地点28列東壁土層図 ($\frac{1}{80}$)	17
Fig. 14 B地点I列北壁土層図 ($\frac{1}{80}$)	18
Fig. 15 土壌位置図	19
Fig. 16 1号土壤図 ($\frac{1}{30}$)	20
Fig. 17 2号土壤図 ($\frac{1}{30}$)	21
Fig. 18 3号土壤図 ($\frac{1}{60}$)	22
Fig. 19 4号土壤図 ($\frac{1}{30}$)	24
Fig. 20 5号土壤図 ($\frac{1}{30}$)	25
Fig. 21 6号土壤図 ($\frac{1}{60}$)	26
Fig. 22 7号土壤図 ($\frac{1}{30}$)	27
Fig. 23 8号土壤図 ($\frac{1}{30}$)	28
Fig. 24 9号土壤図 ($\frac{1}{30}$)	29
Fig. 25 10号土壤図 ($\frac{1}{40}$)	30

Fig. 26 11号土壤図 (1/30)	32
Fig. 27 12号土壤図 (1/30)	32
Fig. 28 陶磁器	35
Fig. 29 土器出土状況図	37
Fig. 30 石器出土状況図	40
Fig. 31 石鍶出土状況図	41
Fig. 32 石鍶(1)	42
Fig. 33 石鍶(2)	43
Fig. 34 石鍶(3)	44
Fig. 35 石鍶(4)	45
Fig. 36 石鍶(5)	46
Fig. 37 石材別遺存度	47
Fig. 38 長さ・厚さ・幅の三角グラフ	47
Fig. 39 先端角度グラフ	47
Fig. 40 尖頭器・石匙	48
Fig. 41 スクレイバー・グレーバー	49
Fig. 42 使用痕ある剝片・剥片	50
Fig. 43 剥片	51
Fig. 44 石核	52
Fig. 45 砥石	53
Fig. 46 遺跡周辺表面採集の石器	59
Fig. 47 A地点表土出土の石器(1)	61
Fig. 48 A地点表土出土の石器(2)	62
Fig. 49 A地点出土の石器(1)	63
Fig. 50 A地点出土の石器(2)	64
Fig. 51 A地点出土の石核(1)	66
Fig. 52 A地点出土の石核(2)	67
Fig. 53 A地点出土の石器(3)	68
Fig. 54 A地点出土の石器(4)	69
Fig. 55 B地点出土の石器(1)	71
Fig. 56 B地点出土の石核	72
Fig. 57 B地点出土の石器(2)	73
Fig. 58 B地点出土の石器(3)	74
Fig. 59 B地点出土の石器(4)	75

Fig. 60	B地点出土の石器(5)	76
Fig. 61	その他の石器	77
Fig. 62	B地点表土出土の石器	78
Fig. 63	A地点ナイフ形石器平面分布図	80
Fig. 64	B地点深度別遺物出土	81
Fig. 65	B地点遺物遺存状況図(灰青色黒曜石)	84
Fig. 66	B地点遺物遺存状況図(漆黒色黒曜石)	85

図 版 目 次

- PL. 1 空中写真
- PL. 2 遺跡遠景
- PL. 3 A地点10列東壁土層(E・F・G区)
- PL. 4 A地点C列北壁土層(C-7・C-11・G-10区)
- PL. 5 B地点28列東壁土層
- PL. 6 B地点I列北壁土層
- PL. 7 1号土壤
- PL. 8 4号土壤
- PL. 9 9号土壤
- PL. 10 10号集石土壤・遺物出土状況
- PL. 11 11号土壤
- PL. 12 C-8区出土繩文土器
- PL. 13 G-12区・F-12区出土繩文土器
- PL. 14 石核出土状況
- PL. 15 石核出土状況
- PL. 16 ナイフ形石器出土状況
- PL. 17 ナイフ形石器出土状況
- PL. 18 明染付・近世磁器
- PL. 19 近世磁器
- PL. 20 陶器(表)
- PL. 21 陶器(裏)
- PL. 22 石錠(表)
- PL. 23 石錠(裏)

- PL. 24 石鎌（表）
PL. 25 石鎌（裏）
PL. 26 石鎌（表）
PL. 27 石鎌（裏）
PL. 28 石鎌（表）
PL. 29 石鎌（裏）
PL. 30 石鎌・尖頭器・石匙（表）
PL. 31 石鎌・尖頭器・石匙（裏）
PL. 32 スクレイパー（表）
PL. 33 スクレイパー（裏）
PL. 34 使用痕ある剥片（表）
PL. 35 使用痕ある剥片（裏）
PL. 36 剥片（表）
PL. 37 剥片（裏）
PL. 38 砥石・石核（表）
PL. 39 砥石・石核（裏）
PL. 40 遺跡周辺表面採集の石器（表）
PL. 41 遺跡周辺表面採集の石器（裏）
PL. 42 A 地点表土出土の石器(1)（表）
PL. 43 A 地点表土出土の石器(1)（裏）
PL. 44 A 地点表土出土の石器(2)（表）
PL. 45 A 地点表土出土の石器(2)（裏）
PL. 46 A 地点出土の石器(1)（表）
PL. 47 A 地点出土の石器(1)（裏）
PL. 48 A 地点出土の石器（表）
PL. 49 A 地点出土の石器（裏）
PL. 50 A 地点出土の石核(1)（表）
PL. 51 A 地点出土の石核(1)（裏）
PL. 52 A 地点出土の石核(2)（表）
PL. 53 A 地点出土の石核(2)（裏）
PL. 54 A 地点出土の石器(3)（表）
PL. 55 A 地点出土の石器(3)（裏）
PL. 56 A 地点出土の石器(4)（表）
PL. 57 A 地点出土の石器(4)（裏）

- PL. 58 B 地点出土の石器(1) (表)
 PL. 59 B 地点出土の石器(1) (裏)
 PL. 60 B 地点出土の石器 (表)
 PL. 61 B 地点出土の石器 (裏)
 PL. 62 B 地点出土の石器 (表)
 PL. 63 B 地点出土の石器 (裏)
 PL. 64 B 地点出土の石器 (表)
 PL. 65 B 地点出土の石器 (裏)
 PL. 66 B 地点出土の石器 (表)
 PL. 67 B 地点出土の石器 (裏)
 PL. 68 B 地点出土の石器 (表)
 PL. 69 B 地点出土の石器 (裏)
 PL. 70 B 地点出土の石器 (表)
 B 地点出土の石器 (裏)
 PL. 71 調査参加者

表 目 次

Tab. 1	周辺遺跡地名表	6~7
Tab. 2	上原遺跡出土石器破損部位別一覧表	36
Tab. 3	石器計測表	44~46
Tab. 4	尖頭器・石匙計測表	46
Tab. 5	スクレイパー計測表	47
Tab. 6	使用痕ある剝片・剝片・石核計測表	47
Tab. 7	試料表	76
Tab. 8	上原遺跡の花粉分析試料と土質	77
Tab. 9	上原遺跡試料花粉分析結果	78
Tab. 10	上原遺跡試料花粉分析結果	79
Tab. 11	検出花粉胞子化石名一覧表	80~84

I 序 説

一、調査に至るまで

国道35号線は、長崎県佐世保市と佐賀県武雄市とを結ぶ長崎県北部の主要幹線道路であるが、幅員も狭く、加えて近年の交通事情による渋滞もひどくなった事から幹線道路としての機能の低下が指摘されていた。

この為、これに代る高規格の自動車専用道路の再整備が急務となり、九州横断道と連絡するバイパス「武雄佐世保線道路」が計画されることとなった。

計画によると道路は有料とし、佐世保—武雄間の総延長22kmの内、長崎県側が17km、佐賀県側が5kmの準高速道となる予定である。

計画の概要が示されたのは昭和50年で、まず県土木部長から文化課長あての関連公共事業調査依頼が契機であった。

その後の調査・協議経過を順を追って説明すると下記のようになる。

1. 第1次現地踏査（分布調査） 昭和51年5月19日～6月2日。対象地区、佐世保市、長さ11.8km、巾400m。
2. 第2次現地踏査（分布調査） 昭和55年4月14日～4月17日。対象地区、佐世保市～東彼杵郡波佐見町。長さ5.3km、巾400m。
3. 上記、1、2次分布調査の結果、巾400mの道路予定路線の中に15ヶ所の遺跡が含まれる事を確認。その旨日本道路公団に対して文書により回答。
4. 道路公団はこの回答を参考として、巾を200mに狭めて道路設計を行い再協議を提出。
なお、この再協議設計図には先に示した15ヶ所の遺跡の内14ヶ所については現状保存の方針で示される。
5. 文化課はこの後、昭和56年11月9日～10日、及び昭和57年12月15日～16日の2回にわたり、再協議があった路線を再度踏査したが、新たな遺跡の発見無し。

如上の経過をもって、最終的には保存不可能な遺跡（上原遺跡）1ヶ所についてのみ事前に緊急発掘を実施する事になった。

(高野)

二、調査経過

分布調査の結果、上原遺跡そのものの範囲は全体で約3万m²にも上るものと思われたが（Fig. 2）、遺物の散布状況の密度からみると、その中にも幾つかの集中地点が認められた。道路建設によって消滅する部分はこの中で、北側遺物集中地点に当る。面積は約1万m²程度である。

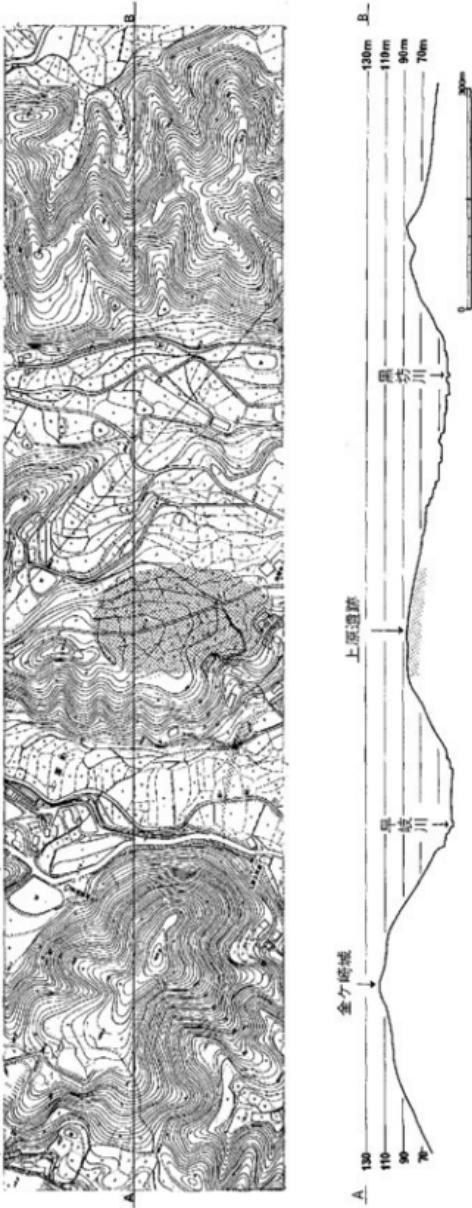


Fig. 2 上原台地付近断面図

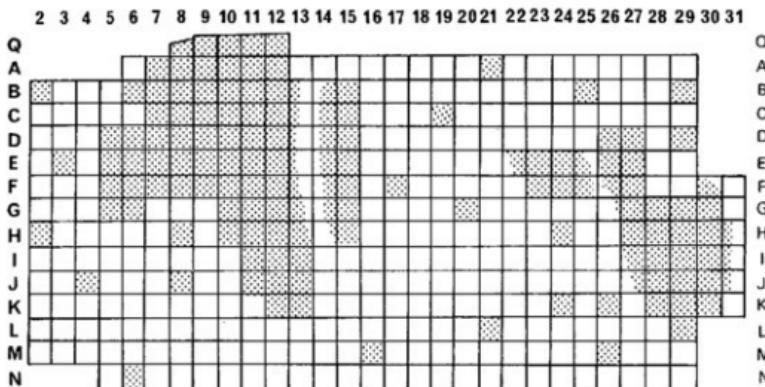


Fig. 3 調査区配図

①調査方法

東西に走る道路中心杭の延長線を調査基軸線とし、これから南北に直角に振って10m間隔に杭を打ち、調査対象区内全域にわたって10mの方眼を設定した。実際的な調査はこの方眼を更に1辺5mの小グリッドに分割して掘り進めた。なお出土遺物はドットマップ法をとった。

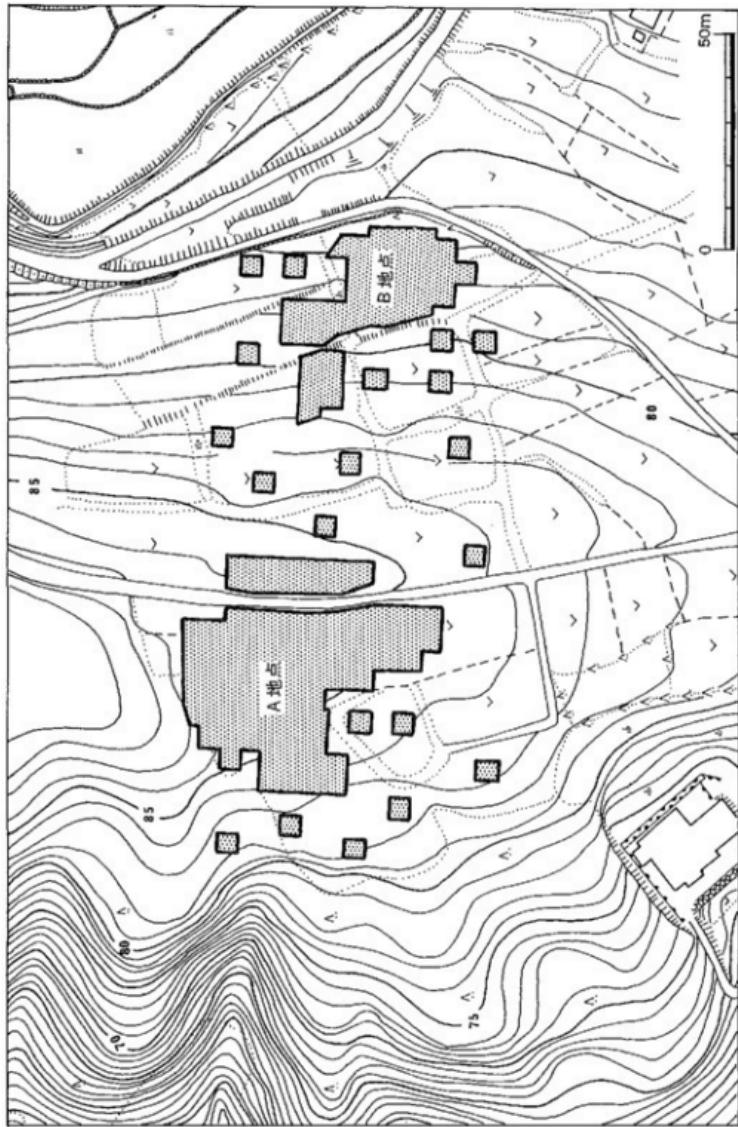
②調査経過

調査区設定段階では、遺物の表面採集資料のみで内容が全て不明であった。この為、調査は当初当該区全域を対象として任意のグリッドを掘り進めることによって、まず遺跡の範囲を確認することとした。この結果、すでに開墾等による遺跡消滅部分もあったが、標高84m～87mの台地平坦部分（以下A地点と呼ぶ）と、その東側標高77m～82mに位置する傾斜地（以下B地点と呼ぶ）になお良好な遺物包含層が残存している事が判った。内容的には旧石器時代～縄文時代、更に一部近世遺構と遺物の資料を含むもので、その面積はA地点で約1900m²、B地点で約1400m²の計3300m²程度であった。

以上の成果をもとに調査地点を上記2地点に絞り本格的な調査に入ることとなった。(Fig. 3, Fig. 4)

(高野)

Fig. 4 調査区区分図



文 献

1. 文化庁 「全国遺跡地図—長崎県—」 1976年, 及び1981年長崎県文化課による分布調査結果による。
2. 佐世保市教育委員会 「三川内古窯跡群緊急確認調査報告」 1978年3月
3. 佐世保市教育委員会 「中世山城分布調査報告」 佐世保市埋蔵文化財調査報告書 昭和56年度
4. 久村貞男 「三島山経塚報告」 佐世保市文化科学館文化財報告1 1971年
5. 下川達彌 「長崎県三川内、久賀島、野母崎の文化—特定地域の基礎文化調査報告書一」 長崎県立美術博物館 1981年3月
6. 久村貞男 「泉福寺洞穴と周辺の開拓遺跡」 考古学ジャーナルNo.172, 所収 1980年
7. 佐世保市教育委員会 「三川内古窯跡群緊急確認調査報告—木原地蔵平窯跡の発掘調査一」 1978年3月

三、遺跡の地理的歴史的環境

長崎県北東部に位置し、国見山を最高所とする一連の山並、すなわち北より烏帽子岳(597m)、国見山(776m)、八天岳(707m)、^{ひづる}隠居岳(670m)の山々は南北にはば10キロ程直線で連なるが、同時にその山脈は長崎と佐賀の県境を成している。傾斜は東側佐賀県側に急で西側長崎県側に緩傾斜である。

これらの最南端を占める隠居岳から派生する幾つかの小丘陵はゆるやかな勾配を持って東西に放射状に拡がるが、その中の1つ、丘陵先端部に近い上原台地上に遺跡は位置する。標高は77~86m間に在り台地上平坦部分から緩傾斜面にかけての拡がりを持つ。台地の東西両側端直下には二筋の小河川が流れる。(Fig. 2)

附近の遺跡の概観を行ってみたい。

現在、上原遺跡の周辺には、62ヶ所の諸遺跡が知られているが(Fig. 5)、その主な時期的内訳は、旧石器~縄文2ヶ所、縄文~弥生16ヶ所、平安1ヶ所、中世16ヶ所、近世27ヶ所である。(Tab. 1)

個々にみていくと、旧石器時代に属する遺跡としては②の皆瀬遺跡と本書で報告する上原遺跡がある。皆瀬遺跡は標高20m小森川下流の南面する河岸段丘上に位置し、且つ舟底型細石核^{註1}10数点がまとめて出土したことで知られる。只、当該地の土層確認の試掘の結果では明瞭な包含層はすでに消失しているらしい。^{註2}

Tab. 1 周辺遺跡地名表

番号	名 称	種 別	時 代	所 在 地	文 献
1	椿ヶ丘遺跡	散布地	繩 文	佐世保市黒髪町椿ヶ丘	1
2	蘇原窯	窯 跡	近 世	" " 6706・6707・6710	2
3	北町遺跡	散布地	繩 文	針尾北町	1
4	牛ノ岳砦	山 城	中 世	江上町	3
5	城	"	"	指方町	3
6	宮ノ浦遺跡	散布地	繩 文	針尾北町宮ノ浦	1
7	平松神社遺跡	"	中 世	江上町平松神社	1
8	江上支所裏(大刀洗)遺跡	"	中世・近世	指方町江上支所裏	1
9	大刀洗城	山 城	中 世	" " 小田職業訓練校裏	3
10	貴船神社遺跡	塚	"	" " "	3
11	指方城	平山城	"	" " "	3
12	三日月島遺跡	散布地	中世・近世	" " "	3
13	三島山遺跡	古墳・経塚	古墳・平安	広田町三島	4
14	早岐城	山 城	中 世		3
15	稗田窯	窯 跡	近 世	早苗町稗田	2
16	広田下窯	"	近世・明治	広田町760・758の第1大手	2
17	上村城	山 城	中 世	江上町	3
18	広田城	"	"	広田町	3
19	峰ノ前遺跡	散布地	繩 文	樺常寺町峰ノ前	5
20	千人塚古墳前遺跡	"	"	" "	5
21	千人塚	墓 地	中 世	" "	1
22	梶ノ川A遺跡	散布地	繩 文	" " 梶ノ川	1
23	梶ノ川B遺跡	"	"	" "	1
24	皆瀬遺跡	"	旧石器～繩	" "	6
25	金ヶ崎城	山 城	中 世	上原町	3
26	上原遺跡(A)	散布地	旧石器～繩	" "	本書
27	上原C遺跡	"	繩 文	" "	1
28	鷹ノ巣城	山 城	中 世	塩浸町	3
29	塩浸城	"	"	" "	3
30	井手平城	"	中 世	新替町	3
31	新替遺跡(A)	散布地	繩 文	" "	5
32	塩浸鉄橋遺跡	"	"	塩浸町	5
33	観音寺前遺跡	"	繩 文	" "	5
34	観音寺遺跡	"	"	" "	5
35	塩浸遺跡	"	繩 文	" " 383	5
36	三川内入口遺跡	"	"	" "	5
37	長葉山窯(たら窯)	窯 跡	近 世	二川内町217・又217・218長葉山	2
38	吉ノ田奥窯	"	"	" " 634・637・638	2
39	三川内下窯(新)	"	"	" " 693—1~10	2
40	神林窯	"	"	" " 122・123神林	2

番号	名 称	種 別	時 代	所 在 地	文 献
41	小 谷 窯	窯 跡	近世・明治	佐世保市三川内町1099 第1-1101-1~3・1104~1108小谷	2
42	杉 林 窯	η	近 世	η η 1011-1~3・1018杉林	2
43	潜 石 窯	η	η	η η 794付近潜石	2
44	三 川 内 東 窯	η	η	η η 1561-1~20又1561金剛社板谷	2
45	山 の 神 窯	η	η	η η 1550金剛土板谷	2
46	三 川 内 西 窯	η	η	η η 912-1~15中通	2
47	上 両 千 西 窯	η	明 治	η η 又1309上両千	2
48	上 両 千 東 窯	η	η	η η 1362・1363・1364-2上両千	2
49	新 行 江 A 遺 蹤	散 布 地	繩 文	η 新行江町	5
50	新 行 江 遺 蹤	η	縄・中世・近世	η η 1357	5
51	江 永 西 窯	窯 跡		η 江永町610-1~22, 611・612江永口	2
52	江 永 古 窯	η	近 世	η η 895 第1-2-888~900-909-908横谷	2
53	江 永 東 窯	η	η	η η 640・644・又644出口谷	2
54	牛 石 窯	η	η	η 新行江町862-863-828-559-第3下牛石	2
55	地 藏 平 西 窯	η	η	η 木原町2002・2006~2008	7
56	木 原 西 窯	η	η	η η 1782	2
57	谷 窯	η	η	η 三川内町1761・1774~1781釜の谷	2
58	木 原 東 窯	η	η	η 木屋町1725~1-2, 1727~1733観音平	2
59	木 原 下 窯		近世・明治	η η 1803~1807釜の谷	2
60	處 の 横 窯	窯 跡	近 世	η η 2005・2006地藏平	2
61	處 の 前 窯	η	η	η η 1926・1928皿山	2
62	地 藏 平 東 窯	η	η	η η 1941~1944・1955~2001地藏平駒谷	7

繩文～弥生時代に比定される遺跡としては一応16ヶ所が周知されているが、何れも表掲資料による判断であり、土器についても一部で少量の弥生土器が出土したという記録のみで、内容解明には程遠いのが現状である。今後の調査に負う所が大といえる。

古墳時代の明確な遺跡は当該地附近では只13の1ヶ所を除いて知られていない。早岐瀬戸を中心とする一帯は、現地形でこそ平坦部を離所にみる事が出来るが、それらは早岐新田（慶安二年、1651年）、宮崎新田（同年）、大手原新田（宝永二年、1705年）、小田新田（文化元年1804年）等、何れも江戸初期以降始まった干拓の結果によっている。つまり古墳時代にあっては、未だ平地が少なく生産の為の十分な後背地に乏しかった地形的な要因によるものかとも思えるが確証は無い。

平安時代以降の遺跡としては、13、三島山遺跡が知られている。往時は名の如く針尾瀬戸に浮かぶ小島であるが、砂岩地山を切り込んだ小ビット内より滑石製絆筒と共に胡州鏡、合子等が出土している。時期としては平安末頃～鎌倉時代に比定されている。

中世末、戦国期から近世初頭にかけては、各所に山城が築かれた時期である。当該地周辺が松浦氏、大村氏、そして佐賀の諸氏などとの勢力分岐点に当ることからそれぞれの有力な橋頭

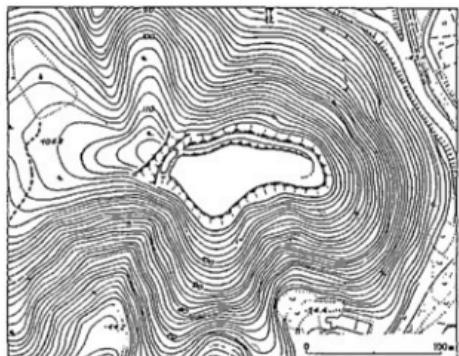


Fig. 5 金ヶ崎城図（文献3より転載）



Fig. 6 井手平城図（文献3より転載）

様になり得る地勢を備えていた事による。

これらを物語る史実として30の井手平城合戦がある。(Fig. 6)

天正14年（1586年）城を守る松浦氏と所領奪還を計る大村・有馬・波多氏連合軍の間に壮絶な戦いが繰り広げられ、結果守備兵300名全員討死落城という戦国悲話が残されている。

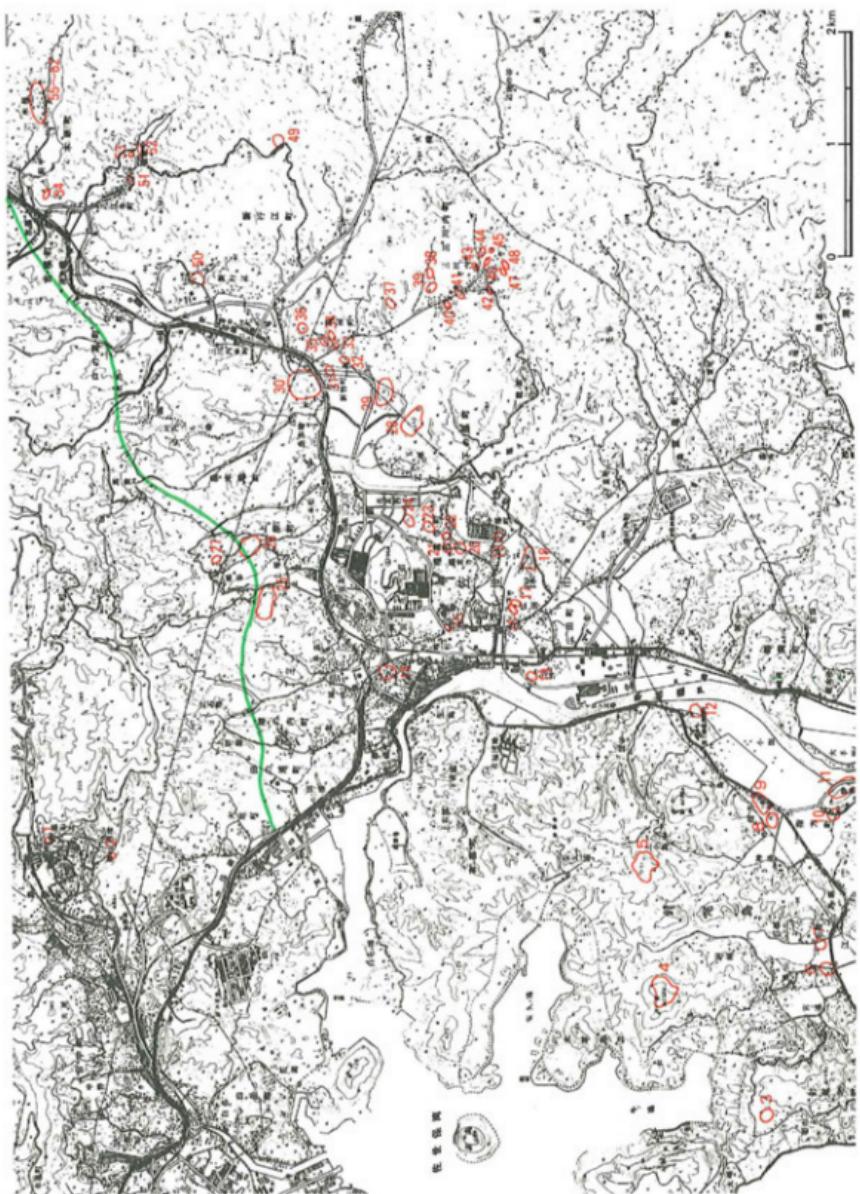
現在佐世保市を代表する特産品として三川内地区の陶磁器生産があげられるが、その前身は江戸初期までさか上る。

元々佐賀県唐津、あるいは隣接町の有田の強い影響の下に発達したものであるが、以後江戸中期、後期、明治、大正。そして今日まで連継としてその伝統は保持されている。

窯跡そのものは三川内地区のみで29基残存している模様であるが、調査の結果によると、地域的に3群に分かれているという。すなわち木原地区（54～62）、江永地区（51～53）、そして三川内地区（37～48）がそれである。それら各々の特徴については文献2、7に詳しいのでここでは触れない。

（高野）

Fig. 7 周辺地図 (1/5000)



- 註1 文献6 26頁
- 2 久村貞男氏教示
- 3 文献5所収、「東彼杵郡折尾瀬村誌」の第3節古文書古器物の中に記載されているという。
- 4 文献4、追記の中に古墳時代と思われる石棺が出土した旨記述してある。
- 5 吉富一「佐世保近郊の地形と人生」183頁昭和47年只、早岐瀬戸そのものが元々針尾島と本土とを隔てる狭い水道であった事は疑い無く、それが原因で起る潮の干満時の激しさを肥前風土記では「速来門」として説明している。
- 6 文献4
- 7 松浦家文書「印山記」に井手平合戦の事として記載されている。山口文庫蔵

II 遺跡の調査

一、層位 (Fig. 8 ~Fig. 14)

図示する土層図は、A地点ではC列北壁、G列北壁及び10列の東壁、B地点ではI列北壁と28列の東壁である。(Fig. 10~14)

基本的にはA地点、B地点共同様な色調と堆積状況を示すが、B地点の方がA地点に比して礫が少なく又整然としている。

当該地の表層地質図 (Fig. 9) をみると、上原の台地は遺跡中央を南北に走る道路を境として、西側 (A地点) は洪積世の段丘堆積層である砂礫・粘土が中心であるのに対して、東側 (B地点) は杵島 (西彼杵) 層群に属する波多津貞岩層とされ、泥岩・砂岩薄互層が表層を覆っている。調査の結果では、A地点はII・III層共に特に風化礫が多いのに比してB地点ではIII層に到るまで殆ど礫をみない区域がある。

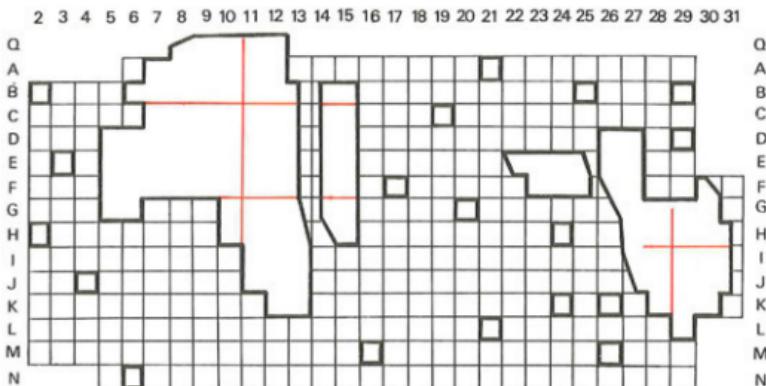


Fig. 8 掘戻土層位置図

各層位の説明をしておきたい。

A地点……I層表土耕作土。(暗褐色土)、II層赤褐色粘質土で遺物包含層。10~40cm程の厚みを有するが、大小の礫を多く含み、部分的に乱れた堆積状況を示す。更に細分が可能な地点もあるが、基本的に同じ土層として認識している。出土遺物はナイフ形石器から縄文時代の資料が混在するが、土器片は殆ど碎片であり、時期を特

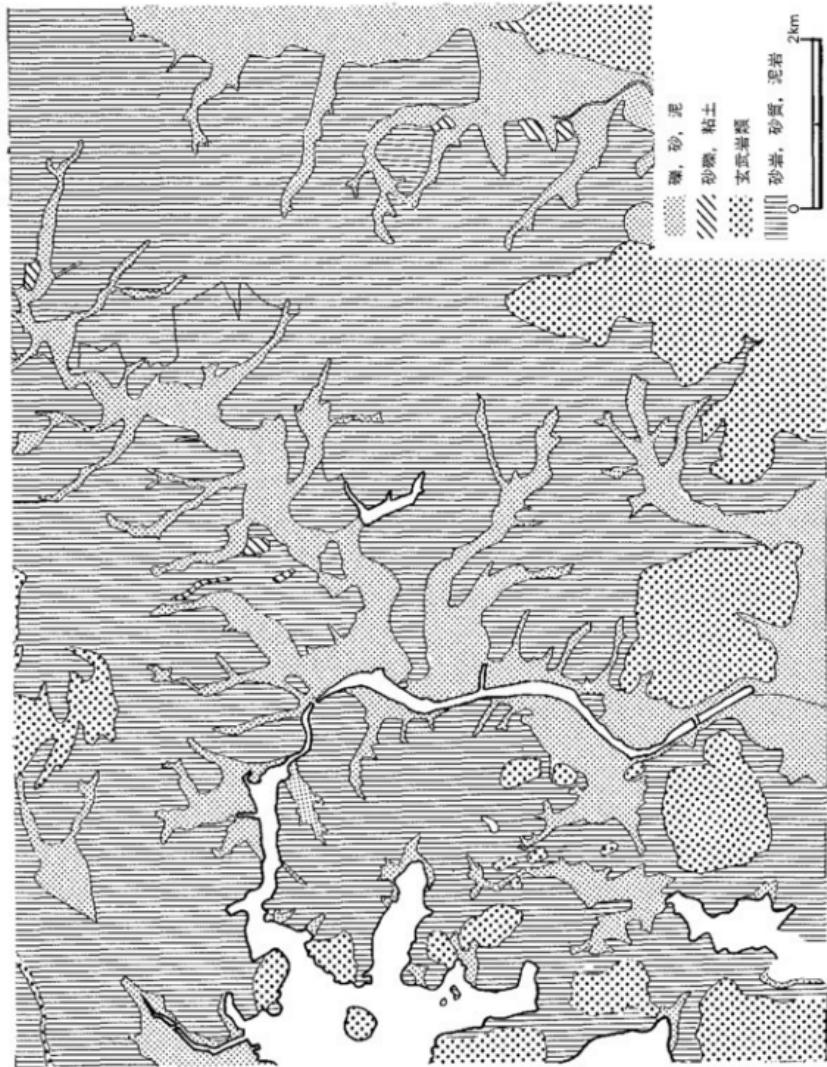


Fig. 9 遺跡周辺表層地質図
(長崎県土地分類基本調査図(早岐)より転載)

定し得る例が少ない。III層^{註2}黄褐色粘質土。所謂地山で大小の風化礫を多く含む。無遺物層・III層以下は、更に風化礫が大部分を占める赤味の強い土質に変化する。

B地点……I層表土耕作土（暗褐色土）、II層赤褐色粘質土。遺物包含層で整然としており層に殆ど乱れがない。只、同じB地点でも、E-24, 25, 27区あたりを中心とする北側部分と、H, I, J区の28, 29, 30地点あたりを中心とする南側部分では若干様相が異なる。すなわち前者にはII層中にやはり多くの小礫を含むが、後者には殆ど含まないという相違である。層の厚さも前者は20~30cm程と薄いのに対して、後者は40~60cm程と厚くしかも一定している。出土遺物に時期的な差異は見い出せないが、遺物の出土密度からみると、B地点は更にブロック別に分けられよう。III層^{註3}黄褐色粘質土。粘性が強く厚さ40cm程堆積する。遺物は全く含まない。部分的な試掘によると、この層の下には色調はあまり変わらないが風化礫を含む層が現われる。IV層としたが無論無遺物層である。
(高野)

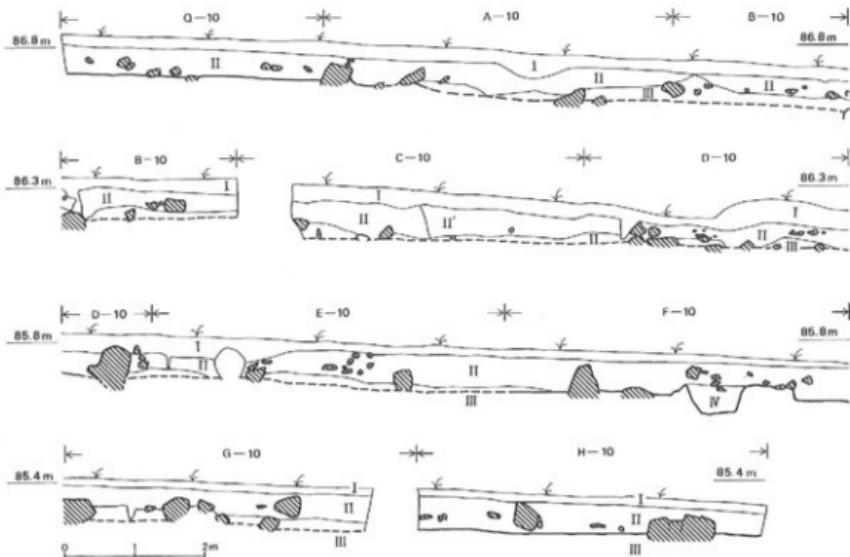


Fig. 10 A 地点10列東壁土層図 (1/80)

PL. 3



E-10 区 東壁



F-10 区 東壁



G-10 区 東壁

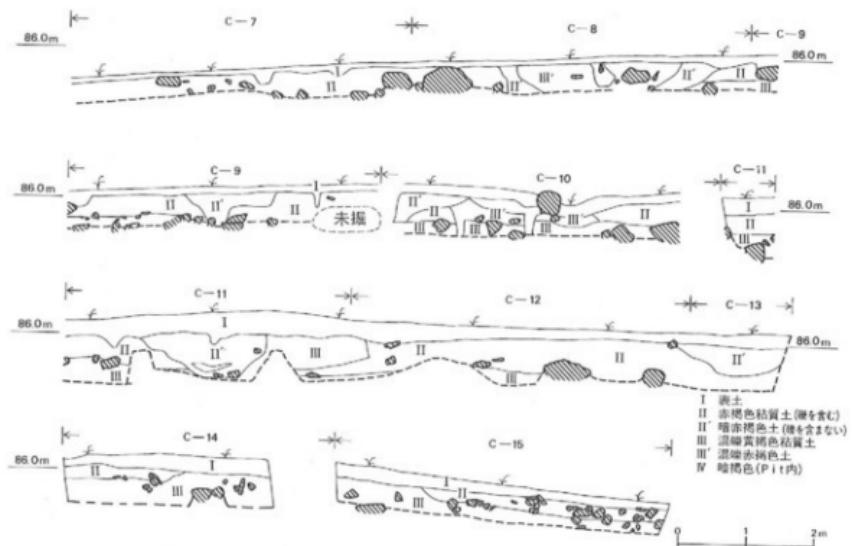


Fig. 11 A地点C列北壁土層図 (1/80)

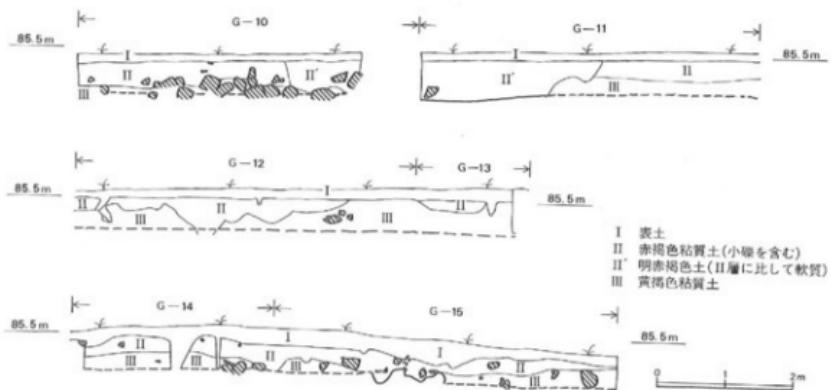


Fig. 12 A地点G列北壁土層図 (1/80)

PL. 4



C-7 北壁



C-11 北壁



G-10 区北壁

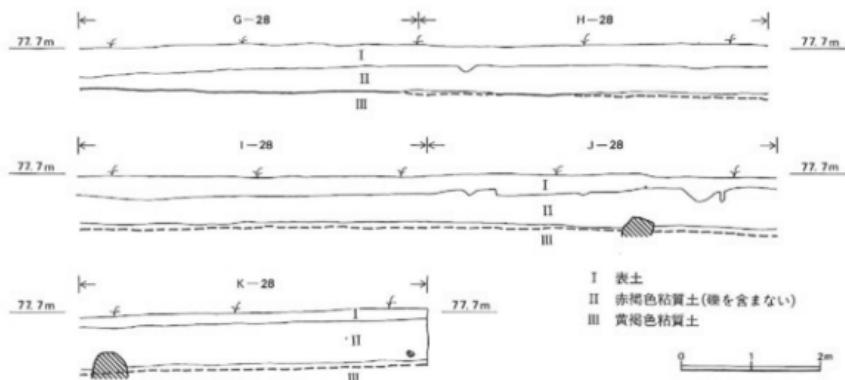
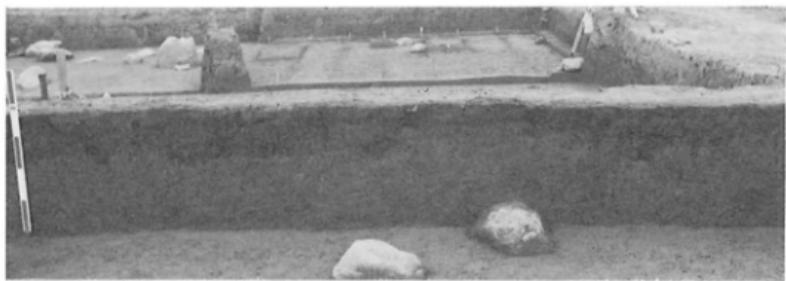


Fig. 13 B 地点28列東壁土層図 (1/80)

PL. 5



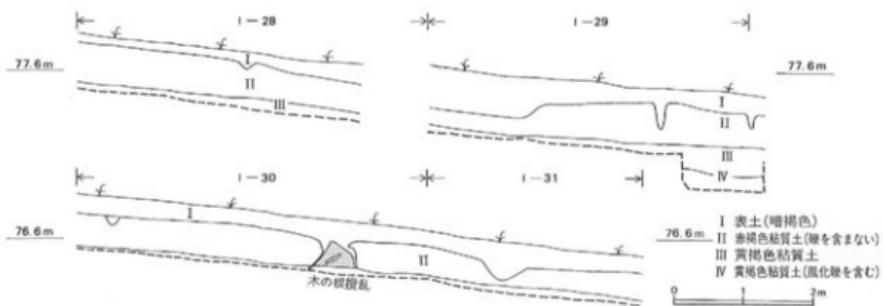
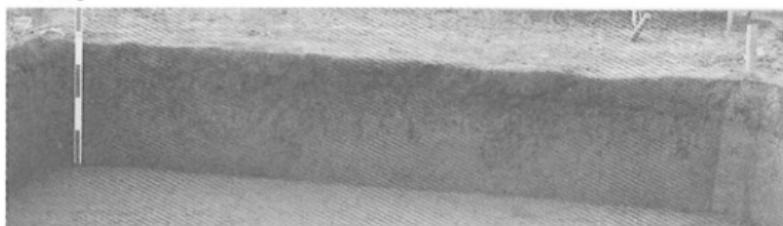
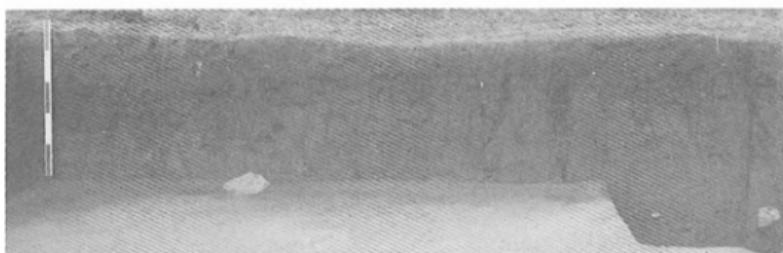


Fig. 14 B地点Ⅰ列北壁土層図 (1/80)

PL. 6



I-28 北壁



I-29 北壁

註1 長崎県土地分類基本調査「早岐」 長崎県 昭和51年

2 出土炭化物の¹⁴C測定を依頼中であるが、結果が出るのが昭和61年3月末であり本書刊行に間に合わない。いづれ何らかの形で報告したい。

3 H-28西壁の土壌をサンプリングして花粉分析を依頼した。結果については第V章に掲載する。

二、遺構

前章で述べた如く、調査区全般にわたって様々な遺構が検出された (Fig. 15)。その大部分は、近年の耕作による大小不規則なピットであり、相互の脈絡が不明瞭な点が多くあった。結果的に性格不明のピットが大部分ということになった。

以下特徴的な遺構について説明を行いたい。

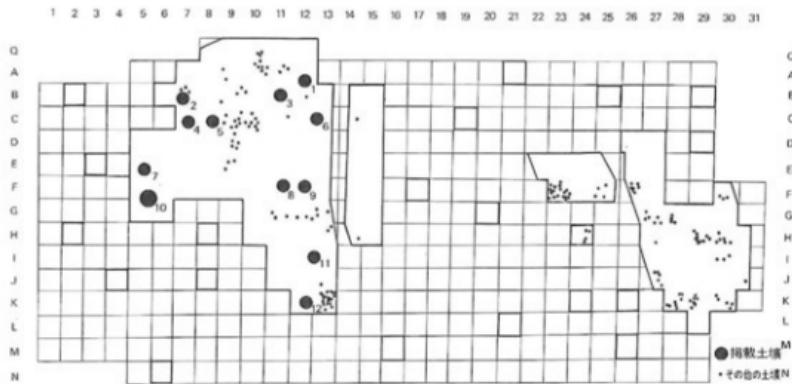


Fig. 15 土壌位置図

1号土壤 (Fig. 16, PL. 7)

A—12・13区にまたがる遺構で長軸 2 m 50cm, 短軸 1 m 80cm, 深さ70cmを測り、東西に長い不定形を呈する。土壤内からは、2点の黒曜石片と、土壤中央部付近に上部から下部まで炭化物が集中し、特に下部の方により多く集中する傾向が強い。又、内部充填土をふるいにかけたところ、炭化物片とともに微細チップが多量に出土するなど、他の土壤とは様相を異にし、その充填土もかなり安定したものを持っているため、旧石器あるいは縄文期における遺構として捉えられるものと考える。このように安定した遺構は、6号土壤においても認められ、近接するこの2つの遺構がなんらかの時間的同時性を持つ可能性もある。

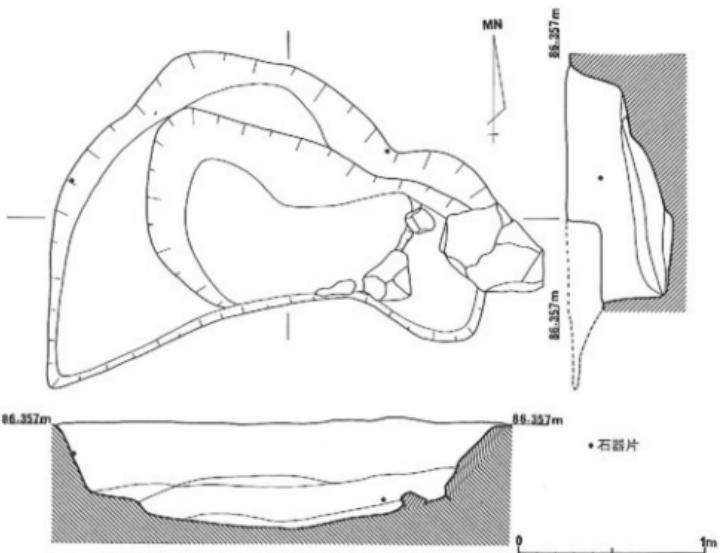


Fig. 16 1号土壤图 (1/30)

PL. 7



2号土壤 (Fig. 17)

2号については、3つの土壌を一括して取り扱ったが、これら3つの土壌は近接し、その性格も同様なものと思われるため一括して扱った。3つの土壌は、プラン検出の際、上部に小さな角礫が散乱し、プラン上部にのるような形で出土し、内部はフカフカの灰白色土が充填しており、2つのものについては内部に20~40cm大の安山岩礫を含んでいた。西側の土壌は、2段構造となり、深度40cm余を測るもので、周間に40cm大の礫、内部にも20cm大の礫が入り込んでいた。他の2つの土壌は深度30~40cmでプランは50cm×50cm、もう一方は80cm×50cmとほぼ同様な形状をしており、一つの方には安山岩礫を含んでいた。この3つの時期についてはその充填土の在り方から、後世における所産として考えられ、特に10号の溝状遺構などとの結びつきが強いものと思われる。

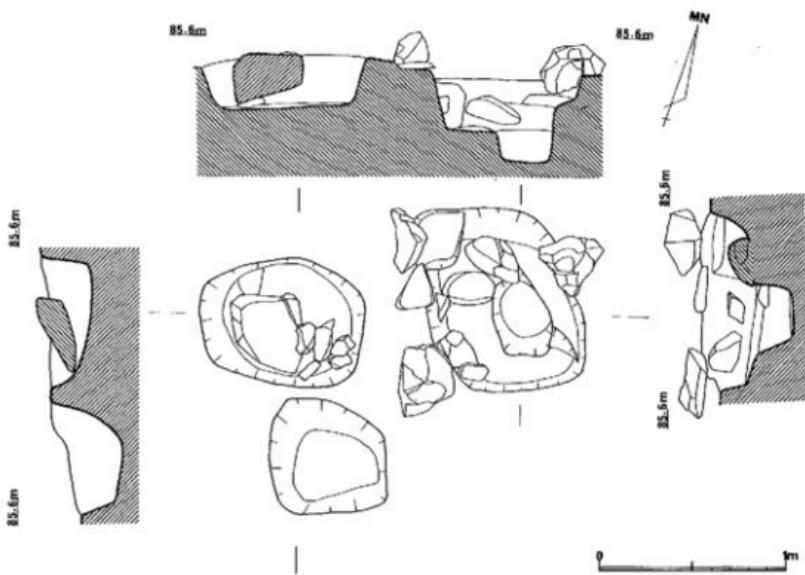


Fig. 17 2号土壤図 (1/30)

3号土壤 (Fig. 18)

II層上面より20cmのところで確認されたもので、主軸を北西—南東に取り、灰白色度が充填していた。長軸8m余、短軸5mを測り、不定形を呈するもので、中程で2段構造となる。深度は、各々の段が10cmを測るが、南西側の土壇は、深さ1mで袋状になり、充填土も灰黒色を呈する点、この土壇が、全体の遺構に付属するものなのか、あるいは単独で、別の時期に形成されたものか判然としない。この遺構内からの遺物の出土はなく、性格及び所属時期についても不明である。

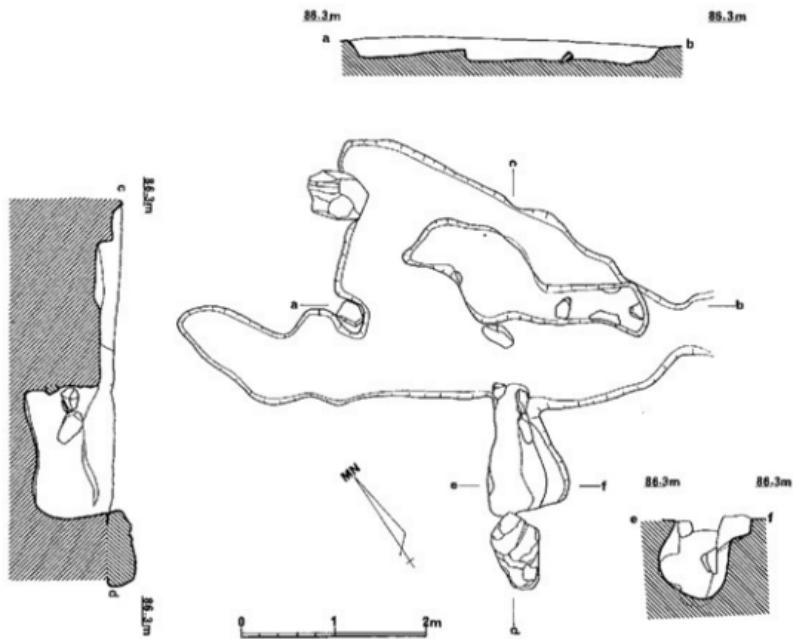


Fig. 18 3号土壤図 (1/60)

4号土壤 (Fig. 19, PL. 8)

長軸を東西にもつもので、長さ3m、幅1m50cm、深度30cmを測る。II層下10cmのところで確認し、土壤内は灰白色の充填土と、小礫が認められ、小礫はすべて安山岩の角礫で構成される。遺構西側に舌状に突きでた部分には、炭化物、焼土が集中し、火を使用した床面と思われる部分が見られる。遺構全体においては、炭化物、焼土などは確認されず、この部分を焼き口とする施設ではないかと思われる。内部充填土はフカフカしており、角礫も後に投げこまれたと見え、礫自体浮いた状態で出土している。北側の小土壤も同様な状態であり、この小土壤は、礫を投げ込むために設けられたものであろう。

PL. 8



C-7

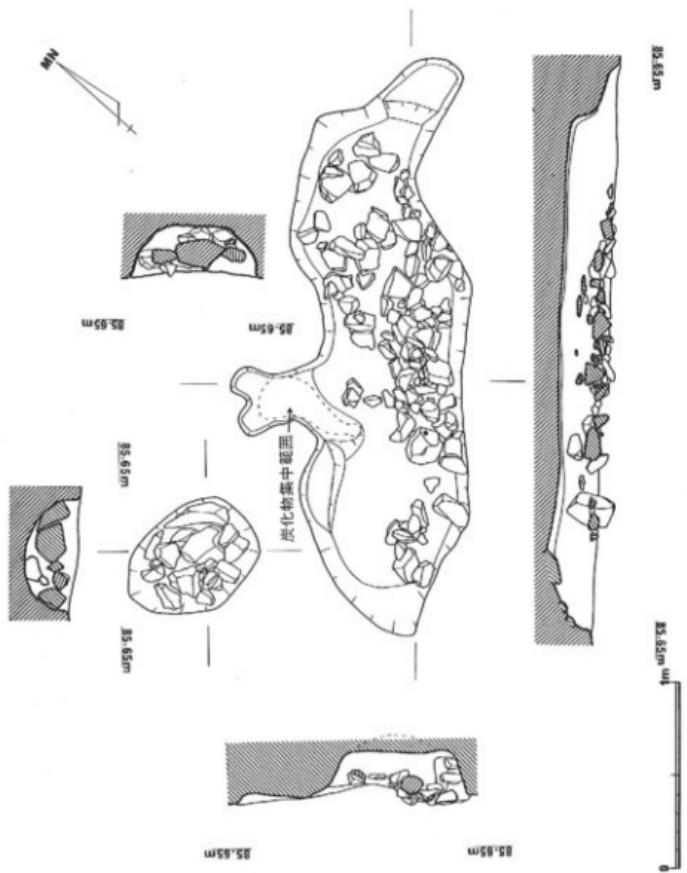
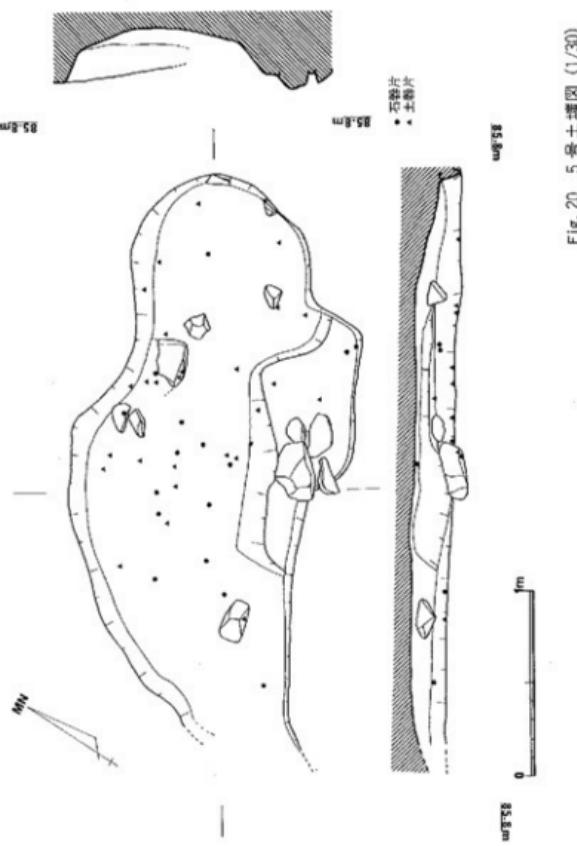


Fig. 19 4号土壤図 (1/30)

5号土壤 (Fig. 20)

長軸を北東—南西にもち、長楕円形状のプランを呈し、南西側は途中で切れた状態にある。内部からは黒曜石片、土器片が出土したもの時代の決め手となる資料に欠き、遺構の充填土も、不明瞭な灰黒色土である。内部には安山岩礫が入り込み、南側では2段構造となるもの、遺構の床面は判然としない点があり、後世の擾乱を受けたことも考えられる。遺構の状況は、

3号土壠と類似し、遺構の性格についても不明確である。平面プラン形状は、長軸3m50cm、短軸1m80cm、深度20~40cmを測る。



6号土壤 (Fig. 21)

A地点北東側隅II層下20cmのところで確認されたもので、灰黒色土が充填。プランはしみ状を呈して、東西を軸とし、内部からは、多量のチップ片が出土した。炭化物の出土はなかったものの、1号土壤と性格的には類似しており、内部充填土の状態などは、かなりしまりをもち、内部の遺物の出土状況などからも、2、4、7、12号土壤とは、その所産の相違が伺える。しかし、土壤内からは、Tool及び土器の出土はないため、旧石器時代に属するのか、縄文時代に属するのかは判然としない。土壤の状況としては、1号土壤に通ずるものがあり、その時期的判別は別として、古い時期の土壤として捉えられよう。長軸3m50cm、短軸1m、深度30cmを測る。

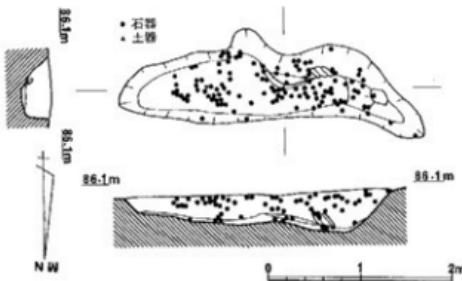
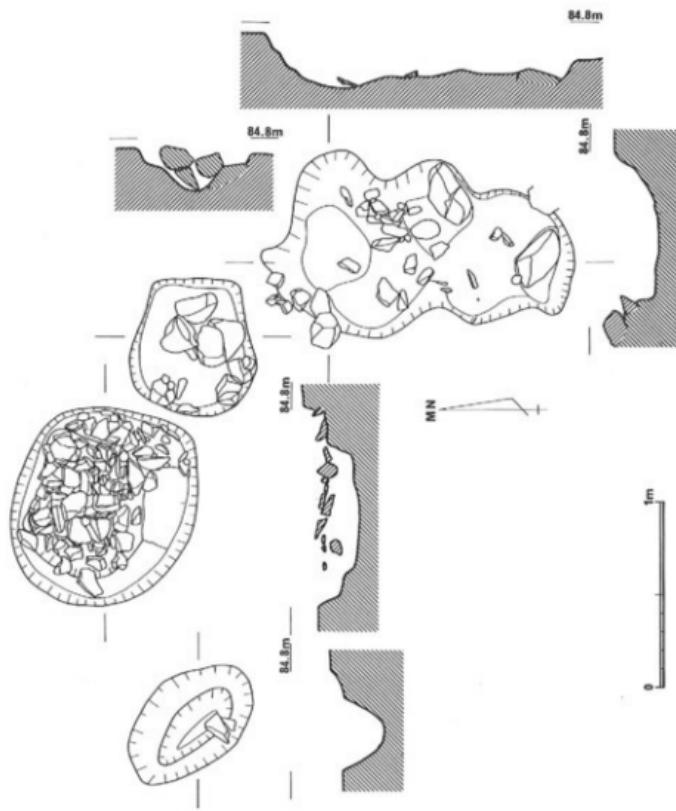


Fig. 21 6号遺構 (1/60)

7号土壤 (Fig. 22)

4つの土壤を一連のものとして括したもので、4つの土壤は半弧状に並んで形成され、各々安山岩角礫を含んでいる。特に西側から2番目の土壤は、10cm~20cmの角礫を土壤内全体に投げ込んでおり、上部は詰まった状態にあるが、下部はフカフカの土が詰まり、後に投げ込まれた状態を呈する。南側の土壤は他のものに比べ、不定形を呈し、底部床面も凹凸が激しく、充填土も灰白色のしまりのない土であったため、後世の所産であろうと思われる。これら4つの土壤内から遺物の出土はなかったものの周辺からは江戸期の磁器類が出土しており、10号の集石遺構との関連の中から江戸期のものとして捉えられよう。またその性格としては、畑などを耕作する際の石などを集めるための施設と考えられる。

Fig. 22 7号土壤図 (1/30)



8号土壤 (Fig. 23)

長さ2m80cm, 最大巾1m, 深さ0.2~0.4mの不定形を成す。西側と南北の立ち上りは急で東側はゆるやかとなる。

表土下30cm, II層中からの切込みである。ピット内は更に2, 3の段がつくが, 地山にいくつ込む自然礫も含まれる。

覆土内より十数点の黒曜石の石器片が出土しているが何れもフレークとチップであり定形石器はない。

その他、焼土、炭化物共に見当らずその性格は不明である。

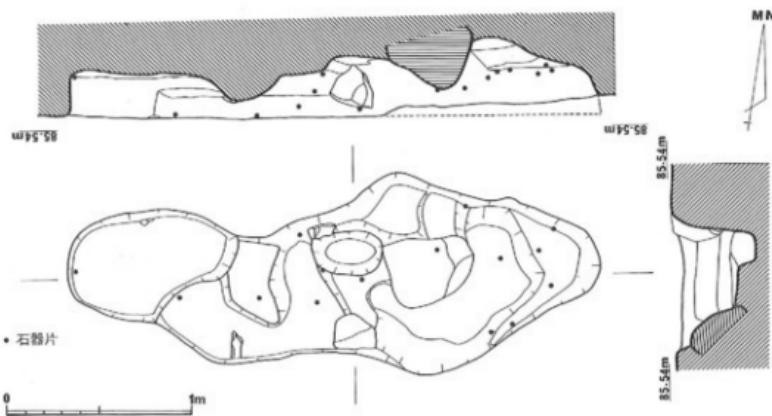


Fig. 23 8号土壤図 (1/30)

9号土壤 (Fig. 24, PL. 9)



F-12区のはば中心に位置する。長さ約2.5m、最大巾0.7m、深さは0.15~0.2mの浅い半馬蹄形を成す。地山のⅢ層を切込んで作られる。ピット内覆土より数点の石器片と土器片が出土している。只土器片は無文の細片であり縄文土器である事のみしか判らない。又石器片も黒曜石のチップという特徴のみで明確な時期は比定できない。

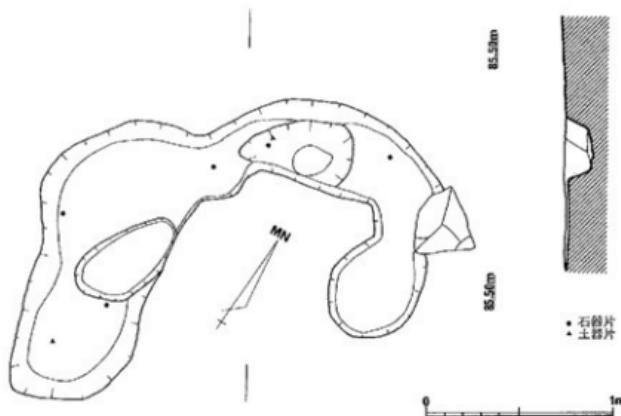
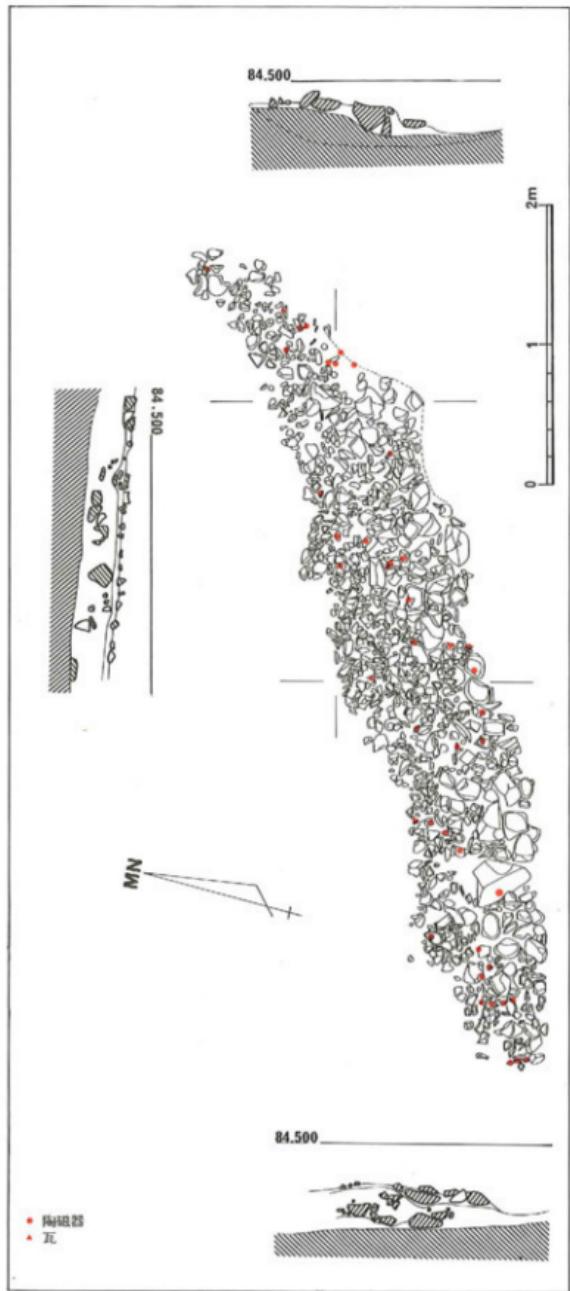


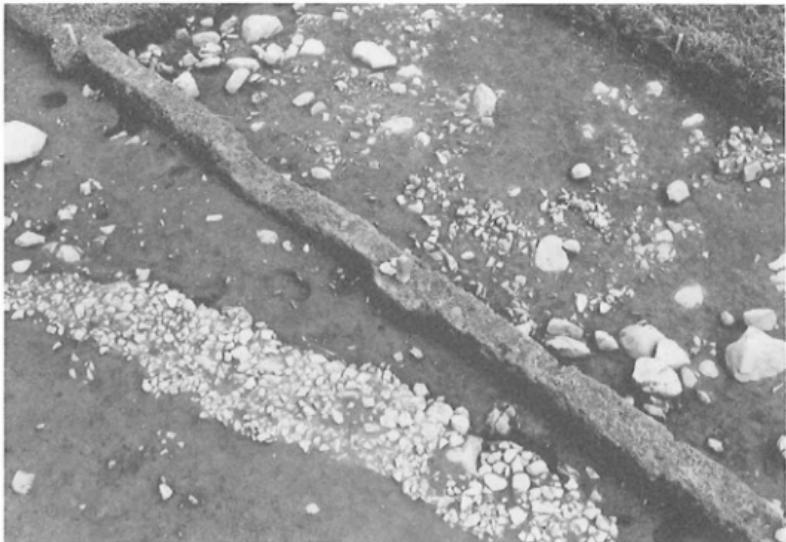
Fig. 24 9号土壤図 (1/30)

10号土壤 (Fig. 25, PL. 10)

G-5・6区にわたって位置する。最初G-5区東端において、溝状に凹んだ部分に、大小の角礫がかたまつた遺構が検出された。その集石は、G-6区の南端まで東西6m、南北1.2m、深さ30cmを測る。内に含まれる遺物は、黒曜石の剥片、瓦、近世陶磁器などさまざまな時期のものを含み、この遺構の性格としては、前述の7号遺構と同様に、畑などを耕作する際に、石などを集めて投げ込んだものと考えられる。しかも、この集石遺構は、掘り方の不明な点、断面における角礫の在り方などからして、溝を人為的に掘り込んだのではなく、自然に出来ている溝を利用している可能性が大きい。なおこの集石遺構の時期としては、7号遺構とほぼ同一時期として考える。

Fig. 25 10号砾石土壤图 (1/40)





10号集石土壤



遗物出土状况

11号土壤 (Fig. 26)

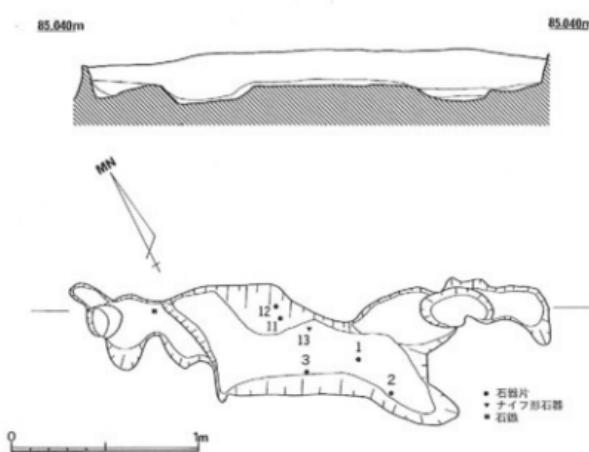
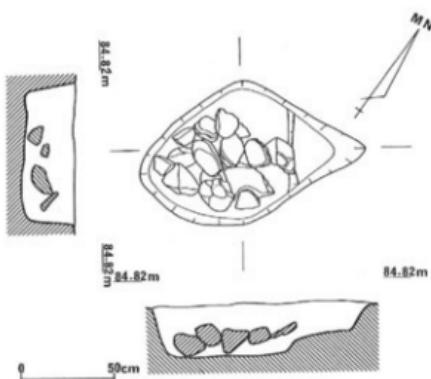


Fig. 26 11号土壤図 (1/30) 塚の性格は、明確でない。

12号土壤 (Fig. 27, PL. 11)

北東—南西に長軸をとり長楕円形を呈する遺構で、 $1\text{ m} \times 0.8\text{ m} \times 0.4\text{ m}$ を測る。北東側に段



を有して、内部には安山岩礫を投げ込んだ状態にあり、性格的には2, 4, 7号遺構と同様なものと思われる。後世において礫を投げ入れるために作られたものと解される。内部から遺物の出土はなかったため、その形成時期については不明であるが、2, 4, 7号遺構については10号の集石遺構との関連の中から、江戸期のものとして捉えられるため、12号土壤についても同様な時期を考えた。

Fig. 27 12号土壤図 (1/30)

小型ナイフと石鉋が1点ずつ出土。しかし、土壤内の土が、茶褐色を呈し、さらにこの土壤自体がいくつかの小ピットで構成された可能性が強く、土壤の時期幅にかなりのひらきがあると考える。したがって、この土壤

PL. 11



I - 12 • 13

III 出 土 遺 物

一、近世磁器（4～7）

4は $\frac{3}{4}$ に残存する小碗で、口径8.1cm、器高3.7cm、高台高0.6cm、高台径3.4cmを測る。腰部でふくらみを持ち、胴部はほぼ直線に伸び、口唇部は丸く仕上げる。胴部外面には草花文が描かれる。小さな気泡が多い青灰色の釉が、疊付を除き全体にかかる。疊付には砂が付着している。5は $\frac{3}{4}$ 残存する小碗で、口径9.2cm、器高4.7cm、高台高0.3cm、高台径3.6cmを測る。胴は丸みを持って立ちあがり、口唇部は丸く仕上げる。胴部外面には唐子文が描かれ、口縁部内外面にはリンボウが描かれる。高台外面には2条の、内面には1条の囲線が巡る。釉は疊付を除き全体に掛けている。見込にはあばた状の凹凸が点在する。この凹凸は1と同じく、焼成の際、降灰によってできたものであろう。疊付には一部砂が付着する。唐子は、流れるような筆使いで、遊ぶ姿が伸び伸びと描かれている。6は $\frac{3}{4}$ ほど残存する小皿で、口径10.2cm、器高2.2cm、高台高0.5cm、高台径6.4cmを測る。胴は緩やかに丸味を持って立ち上がり、口唇部は丸く仕上げる。胴部には内外面ともに、2条の囲線の間に梅文が描かれ、高台の外面には2条の、内面には1条の囲線が巡る。見込には「□日村」の文字が縦書きで書かれている。釉は青味を帯びたガラス質で、疊付を除き全体に掛かる。見込の「□日村」の文字であるが、村の文字が行書で書かれてあるのに対して、日は一辺一画の、計五画で書かれており、村と比べ一回り大きい事から、日は文字ではなく文様であろう。見込には「□村」という文字が書かれていたと思われる。

7は坯部の一部と脚部を残す仏飯碗で、脚部高3.0cm、脚部径3.8cmである。脚端部と脚内底部はヘラ削りされ、脚端部は斜めに立ちあがり、内底部はわずかに窪んだ高台状を呈し露胎である。脚据部中位に山形の隆起を有する。坯部外面と脚部上端に、それぞれ1条の染付囲線があり、釉は白濁色である。底部には砂が付着する。

近世陶器（8、9）

8は碗で、高台高0.7cm、高台径3.7cmを計る。キメの細かい胎土で青灰色を呈する。外面は、細い線で鉄絵が描かれた上から白濁釉が厚く掛かり、内面は釉が薄く掛かり貫入が入る。疊付が露胎である。

9は焼き縮めの捏ね体で底径6.1cmを測る。胎土は赤褐色で、白色粒子、黒色粒子をまばらに含む。内面に3条の重ね焼きの痕が残る。底部には右回転の回転糸切り痕を残し、中央に深さ0.6cmの凹みがあり、緑色の釉がつけてある。これは、底部にあたる部分に石か固い粘土塊があり、切り離しの際に生じた傷跡であり、水もれを防ぐために釉を付けたものであろう。ま

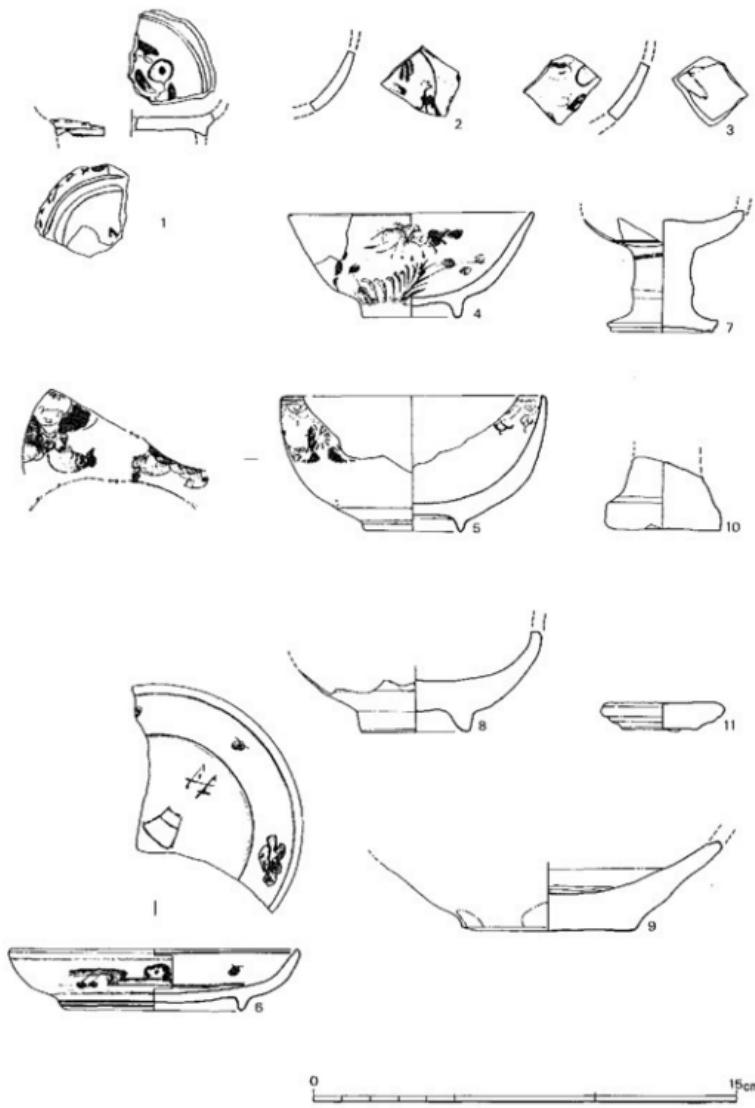


Fig. 28 陶 磁 器

た。胴部下端には糸切り後ロクロ上から成品を持ちあげた指痕が明瞭に残る。

窯道具（10, 11）

10は磁器質のトチンで、底径4.1cmを測る。茶色の釉が掛かる。11は磁器質のハマで、上径4.4cm、下径2.7cm、高1.0cmを測る。磨減をしているが茶色の釉が部分的に認められる。

明染付（1～3）

1は $\frac{1}{4}$ ほど残存する碗底部である。わずかに残る胴部外面には梵字文と思われる文様が描かれる。高台外面には2条、内面には1条の園線が巡る。また、高台内面には字款と思われるものが書いてあるが明確でない。見込には2条の園線が巡り、花弁文と思われる文様が描かれる。外面は光沢を持ち滑らかであるが、見込にはあばた状の凹凸が残っている。この凹凸は焼成の際に、灰が掛かりできたものであろう。2は碗胴部の小片である。外面には唐草文、内面には花文と思われる文様が描かれる。釉には小さな気泡が多く入る。

参考文献

- 本田三郎 「三川内の歴史」 平戸藩窯三川内のやきもの所収 三川内陶榮会編 （1978）
倉田芳郎 「長崎、松浦皿山窯址」 松浦市教育委員会 （1982）
小野正敏 「15, 16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」 貿易陶磁研究所収 日本貿易陶磁研究会
（1982）
「波佐見古陶磁文様集」 長崎県産業試験場 （1982）
長崎県教育委員会 「今福遺跡 II」 長崎県文化財調査報告書 第77集 （1985）

二、縄文土器 (Fig. 29, PL. 12, 13)

縄文土器片は全部で132点出土しているが、その殆どが細片でありしかも風化が著しい。従って図示出来る個体が無いに等しいのであるが僅かにその特徴で時期を判別し得る資料が2, 3みられる。

土器の出土状況は大きく3群に分かれる。B, C-8区附近, F, G-12区附近, そしてH-29区を中心とする地点である。しかもこの内H-29区出土の土器は攪乱気味のピット内からの出土である為プライマリーな状態とは言えない。又、H-29区を除く2地点についても、土器集中地点とはいってもその絶対量は限られており、土器の胎土・色調からも同一個体の可能性も強い。

時期的にみると、B, C-8区附近の土器には山形押型文の破片が含まれ、他の破片も色調が似ているところから同じ時期のものと思われる。一応縄文早期に比定されよう。F, G-12区を中心とする土器の中には、明らかに縄文晚期後半に比定される浅鉢が含まれ、又他の破片も色調・胎土が似るところから同時期に比定して差しつかえあるまい。H-29区中心の土器は全てが無文の碎片であり時期は特定できない。

こうしてみると、縄文時代における上原台地の利用は、早期に始まり、後断絶があって又晩期に到ることが判る。但し、上述した如く、土器の絶対量から推定すると、どの地点もある一時期において短期間使用されたものと考える方が妥当であろう。

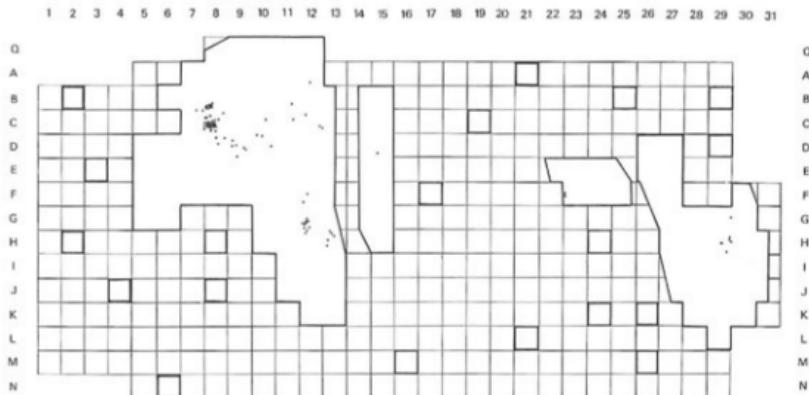
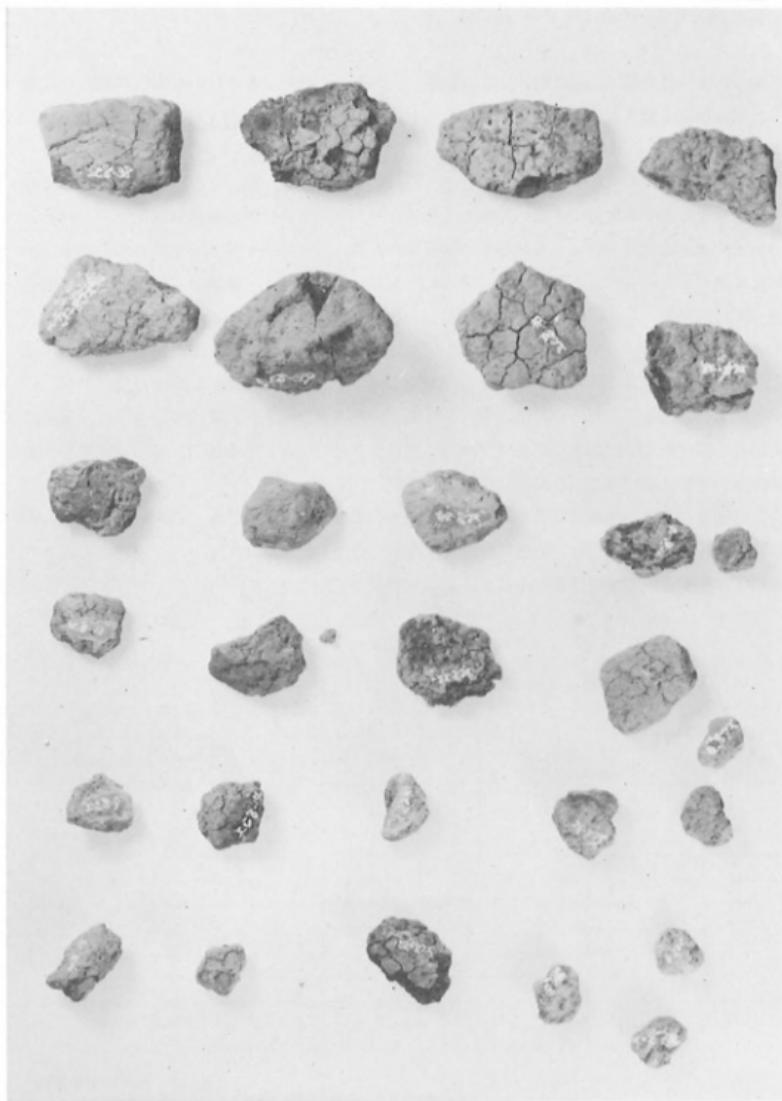
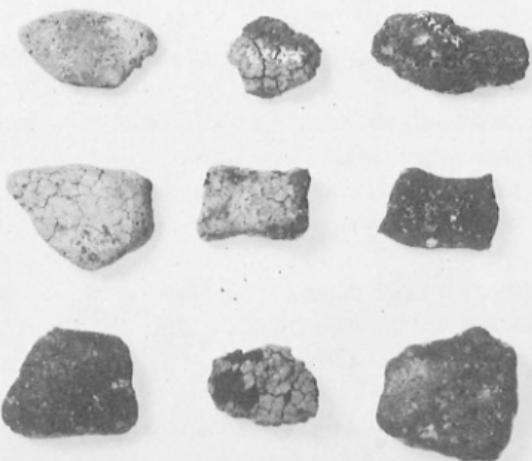


Fig. 29 土器出土状況図



C-8区出土绳文土器



G-12区



F-12区

绳文土器

三、縄文時代の石器

石鎚 (Fig. 32~36, PL. 22~31)

上原遺跡で出土した石鎚は、総計111点である。表土及び表面採集の出土が71点、層位中より出土のものが40点である。

本遺跡において、石鎚の分類を試みてみた。先ず、完形品と破損している部位により、A～Fに分け、次に基部の形状により、平基式もしくは平基式に近いものをI類 (1～13)、凹基式をII類として大別した。本遺跡における石鎚は、完形品が少ない為 (Tab. 2) に分類を挟りの長幅比によって分類した。さらに、局部磨製鎚 (86～89)、剥片鎚 (90～94) に分類した。

特にII類を長幅比が1:1をIIa類 (14～20), 1: $\frac{3}{2}$ をIIb類 (21～54), 1: $\frac{3}{2}$ IIc類 (55～64), 1: $\frac{3}{2}$ をIId類 (65～74), 1: $\frac{3}{2}$ IIe類 (77～85)とした。

その他、未製品、脚部片 (95～99) を最後に図示した。

I類 (1～13)

Ia類 1・2は、明確に基部を形成しないもので、最大幅はほぼ基部にあり、平基無茎鎚と呼ばれるものである。特に、2は、先端部の両側面より抉りが施されている。

Ib類 3～13は、Ia類と同形式を示しながらも基部の面がわずかに内側し、脚部を形成しつ

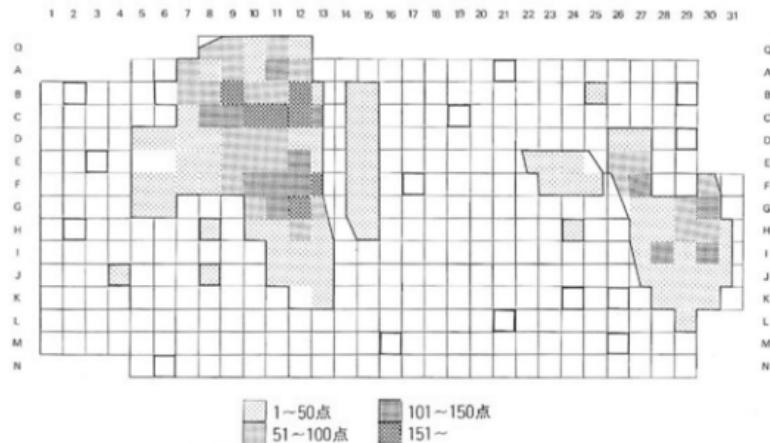


Fig. 30 石器出土状況図

つあるもので、門基無基盤に近い形式を取るものである。9・10などは両脚のつくりが明確になりつつあるものとして抑えられる。12は、二次加工が粗雑である。

II類 (14~85)

IIa類 基部が意識的に抉られ、抉り部分の長幅比が同じものをIIa類とした。長幅比では同じ値を示すが、石鎌の長さと幅との比較では、長さが長いものが多い。特に、15・16は二等辺三角形を呈し、長さに比べて、抉りの深度が、非常に浅いものもある。17は、1と同様に先端部に両側より抉りが施されている。雁股状に使用された可能性もあると考えられる。

IIb類 基部の抉りがIIa類に比べ比較的浅いものをIIb類とした。IIb類もIIa類と同様に長さが幅より長いものが多く、しかも二次加工が丁寧である。また、特に目立つのが脚部の欠損品が多くそのことからも、縱長の石鎌であるがゆえであろうことは、明確であることが理解できる。45・46は、いわゆる鉢形鎌である。

IIc類 抜りの長幅比が1:3%のものをIIc類とした。この類の中の石鎌は、2~3cmのやや小型の石鎌ばかりであり、やはり脚部の欠損品が多くみられる。

IID類 抜りの長幅比が1:3%のものをIID類とした。大きさは、IIc類より小さめで、2cm台の石鎌が多い。先端角度でみると65・66などのように銳利な石鎌や、69・70のように、鈍角の石鎌などさまざまな形式を呈する。

IIe類 抜りの長幅比が1:3%のものをIIe類とした。77・78などは、左右が非対称で、片方の脚が短くなっている。いずれも黒曜石製である。

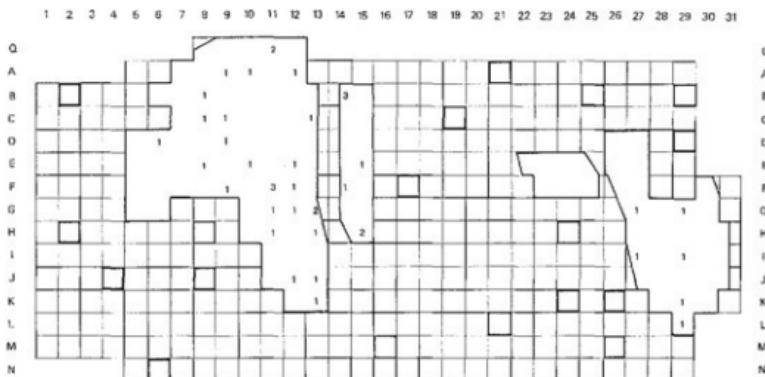


Fig. 31 石鎌出土状況図

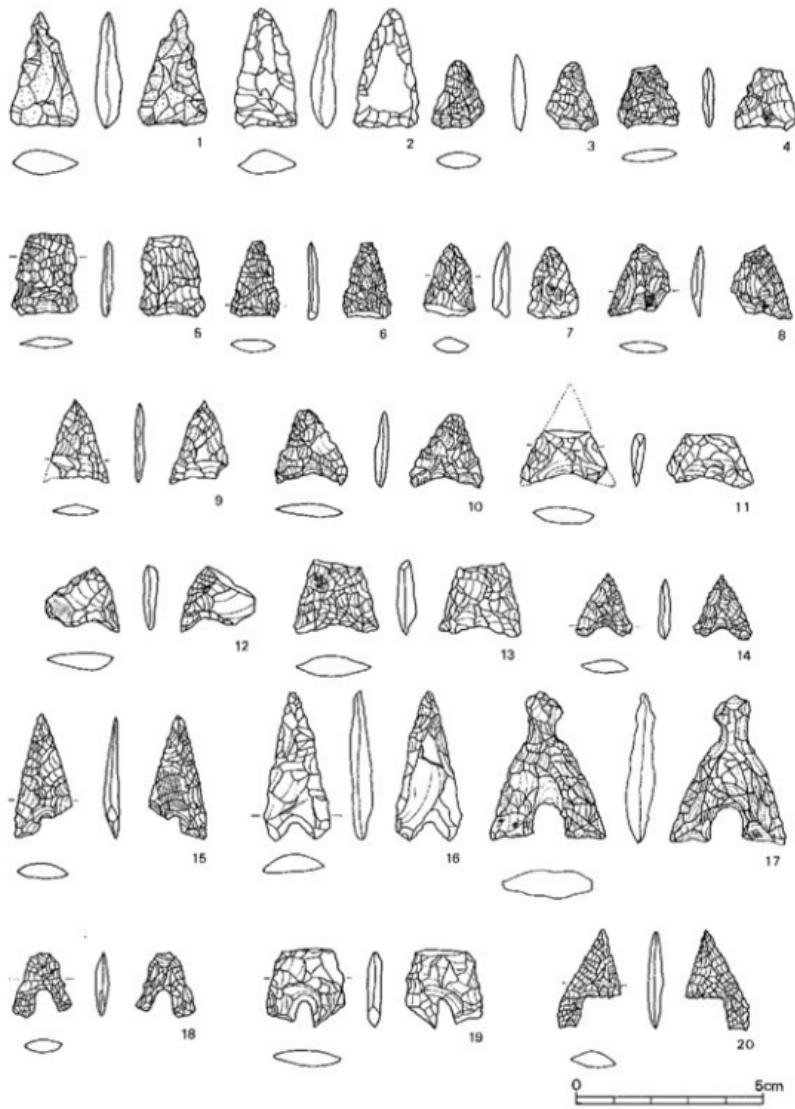


Fig. 32 石 鑿 (1)

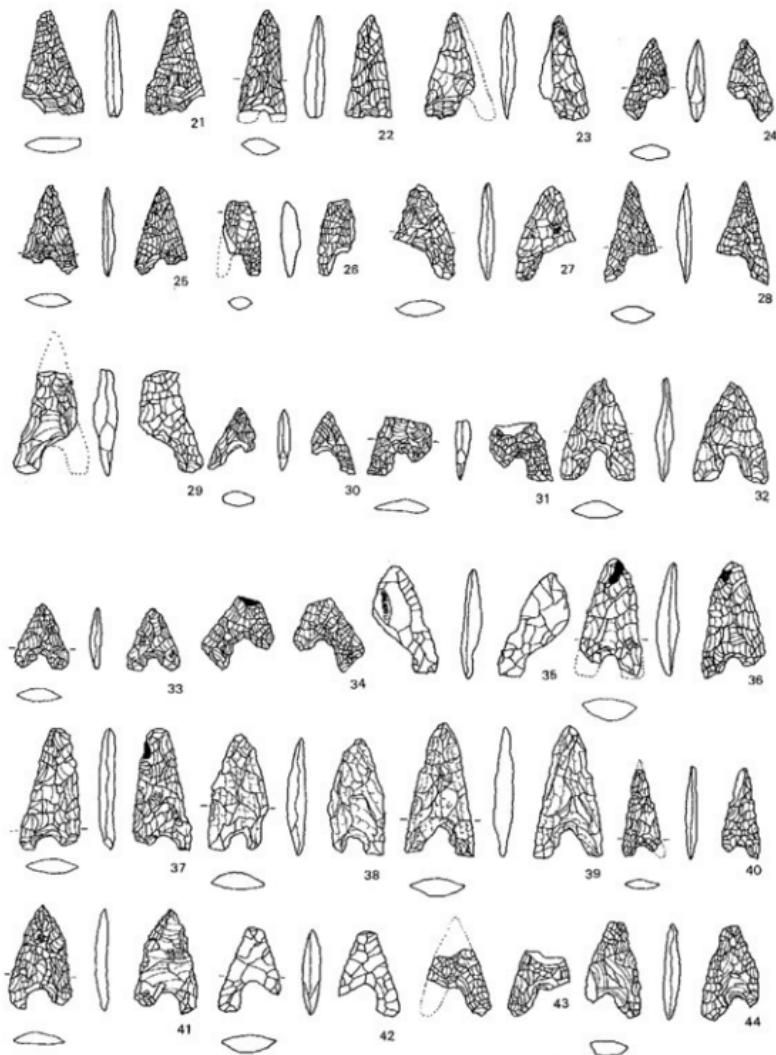


Fig. 33 石器 (2)

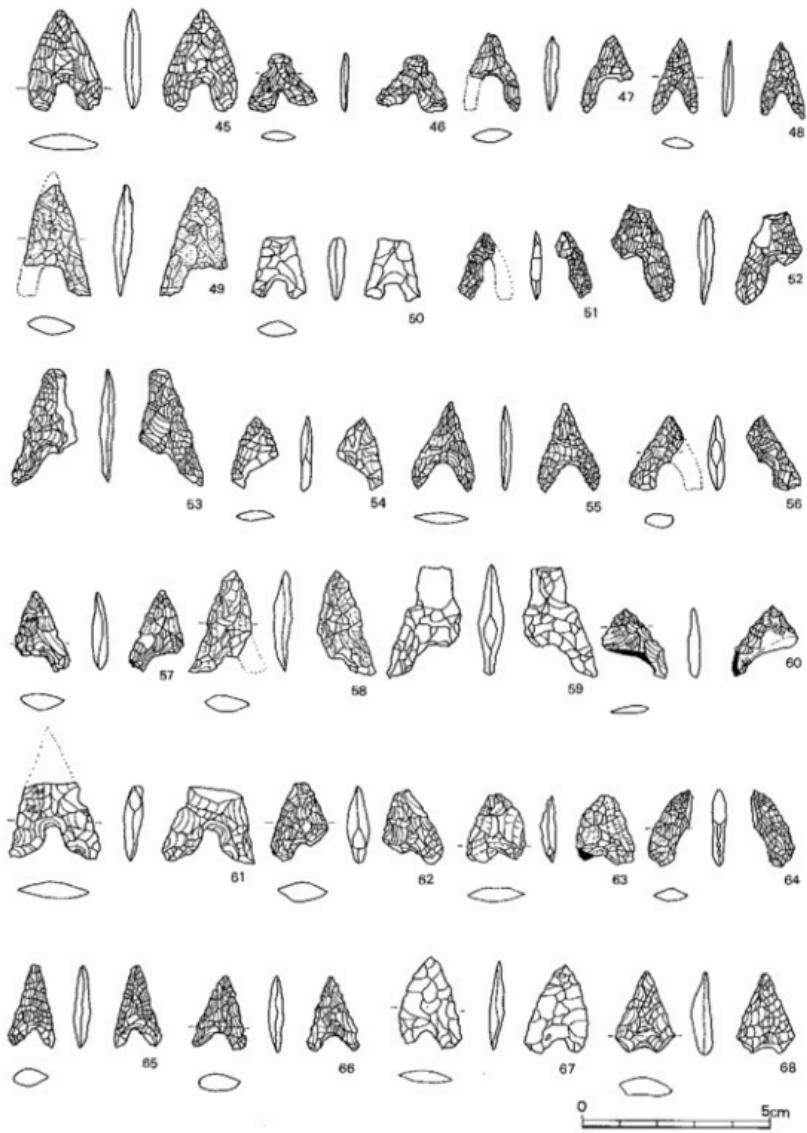


Fig. 34 石 錄 (3)

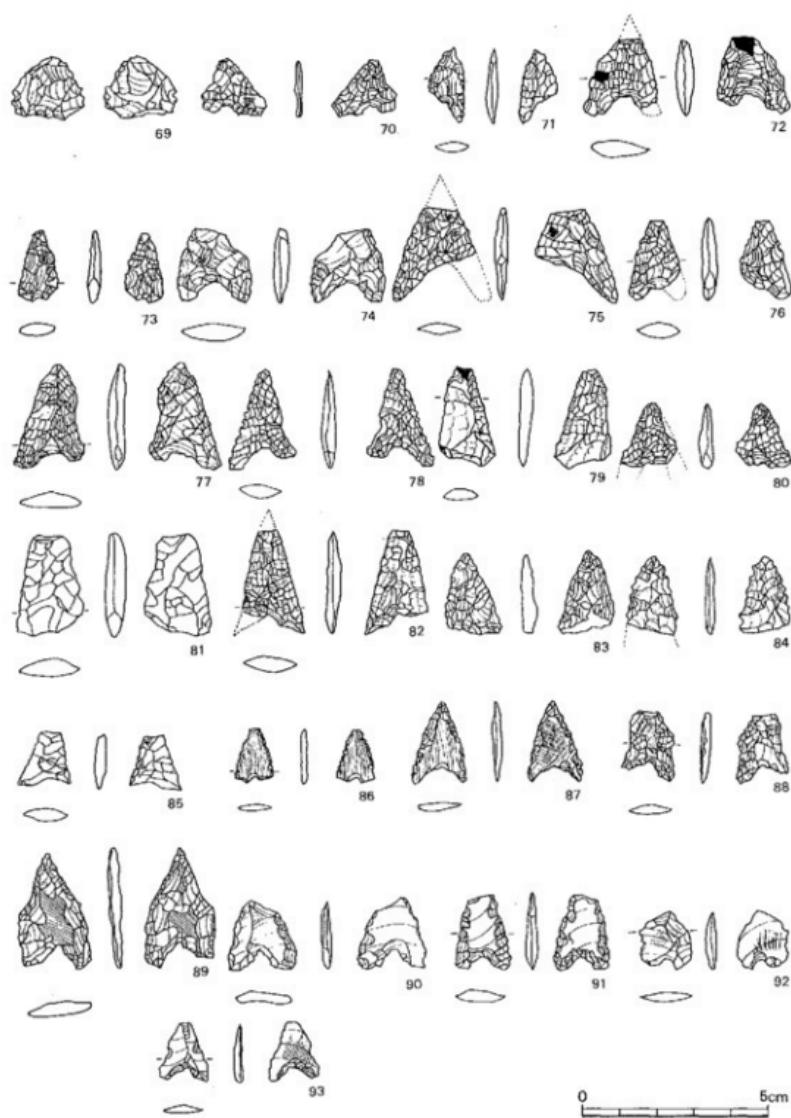


Fig. 35 石 錄 (4)

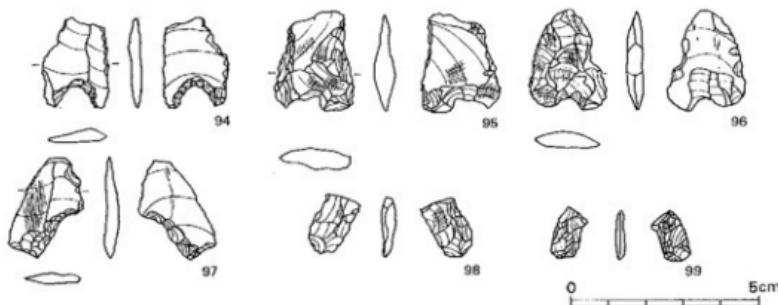


Fig. 36 石鎌 (5)

III類 局部磨製鎌

4点の出土、86・87は両面に研磨の跡がみられるが、88・89は片面の一部、両面の一部に研磨の跡があり、五角形を呈している。

IV類 刺片鎌

5点の出土、1~2cm台の小形で、いずれも縦長剥片を使用している。抉りの部分も比較的、丁寧に加工されている。

上原遺跡出土の石鎌を全体的にみると、石材別依存度 (Fig. 37) では全体の88%を黒曜石が

Tab. 2 上原遺跡出土石鎌破損部位別一覧表

記号	破損部位	黒曜石	安山岩	その他	計
完	完形品	17	4		21
A	先端部破損	17	2		19
B	両脚破損	5			5
C	片脚破損	26	2		28
D	先端部 片脚 破損	19	2		21
E	先端部 両脚 破損	4			4
F	脚部のみ	11			11
		99	10		109

占める。黒曜石は色調により、漆黒色、灰青色、灰白色の3つに分類した。さらに安山岩と4つに分類する。また、長さ、幅、重量を集計した三角グラフ (Fig. 38) によれば（長さ、幅、重量を100としてそれぞれの値をパーセントで表わしたもの）厚さがほぼ一定値でおさまっているのに対し、長さと幅にややひらきがあることがわかる。重量は完形品が少ないので数値による表現は一覧表によることとした。先端角度 (Fig. 39) は25°~40°前後をピークとしているが、60°以下にすべてがおさまっている。先述したように、縦長の石鎌が本遺跡に多いのが先端角度に反映しているのだろうと考えられる。

黒曜石			
安山岩	12%	漆 黑 色 74%	灰青色 7% 灰白色 7%

Fig. 37 石材別依存度

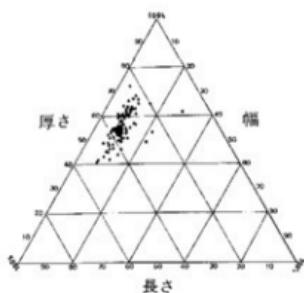


Fig. 38 長さ・厚さ・幅の三角グラフ

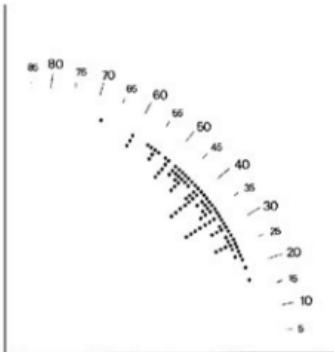


Fig. 39 先端角度グラフ

尖頭器 (Fig. 40, PL. 30, 31)

安山岩製が1点出土。先端部はするどく尖ってはいるが、側面は、厚みがある。全体的に瓦子形を呈している。

石匙 (Fig. 40, PL. 30, 31)

安山岩製2点、黒曜石製2点の出土。101, 103は、横形石匙で、いずれもつまみ部が中心よりやや横にずれた位置についている。さらに、101は、打面部を残し、刃部にあたる部分を加工し、他の部分は、粗雑に仕上げられている。102は、安山岩製の縱形石匙である。これも前者と同様に、刃部のみを加工しつまみ部分などは、比較的粗雑に加工されている。また、101の刃部は、直線的に加工されているのに対し、102の刃部は、丸く加工されている。

スクレイパー (Fig. 41, PL. 32, 33)

全体で7点の出土。グリッド別 (Tab. 5) にみると、すべてA地点よりの出土である。石材では、安山岩5点、黒曜石製2点である。刃部をみると、長軸に平行に刃部があるいわゆるサイド・スクレイパーがほとんどであるが、大きさや重さにややバラエティがある。105は、全面

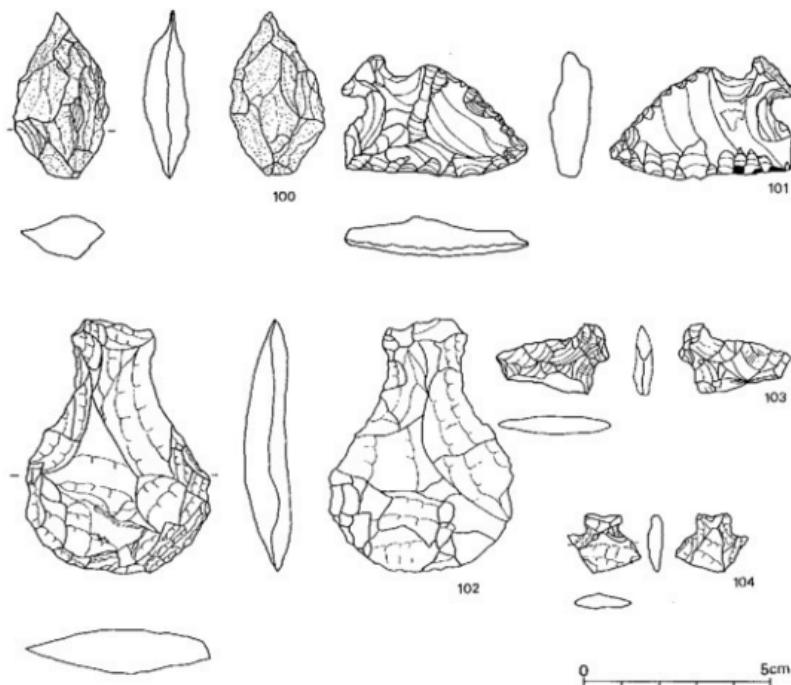


Fig. 40 尖頭器・石匙

にバティナで覆われ刃部は、比較的粗く加工されている。106は一部に自然面を残している。110は、スクレイバーの類に入れてはいるが、先端部を利用した、グレーバーと考えられる。111は加工が粗いが比較的薄い為、スクレイバーとしての機能はあったと考える。

使用痕ある剝片 (Fig. 42, PL. 34, 35)

112~115は、打面を上部とする縦長剥片を素材としている。さらに、112・113は一部に自然面を残す。116は、折断剥片の側縁部に刃こぼれが顕著なものである。118, 120~122はいずれも安山岩の縦長剥片を素材とし、側縁部に刃こぼれがみられるものである。

剝片 (Fig. 42, 43, PL. 36, 37)

剝片は15点を図示した。内、黒曜石10点、(漆黒色7点、灰白色1点、灰青色1点、2点)

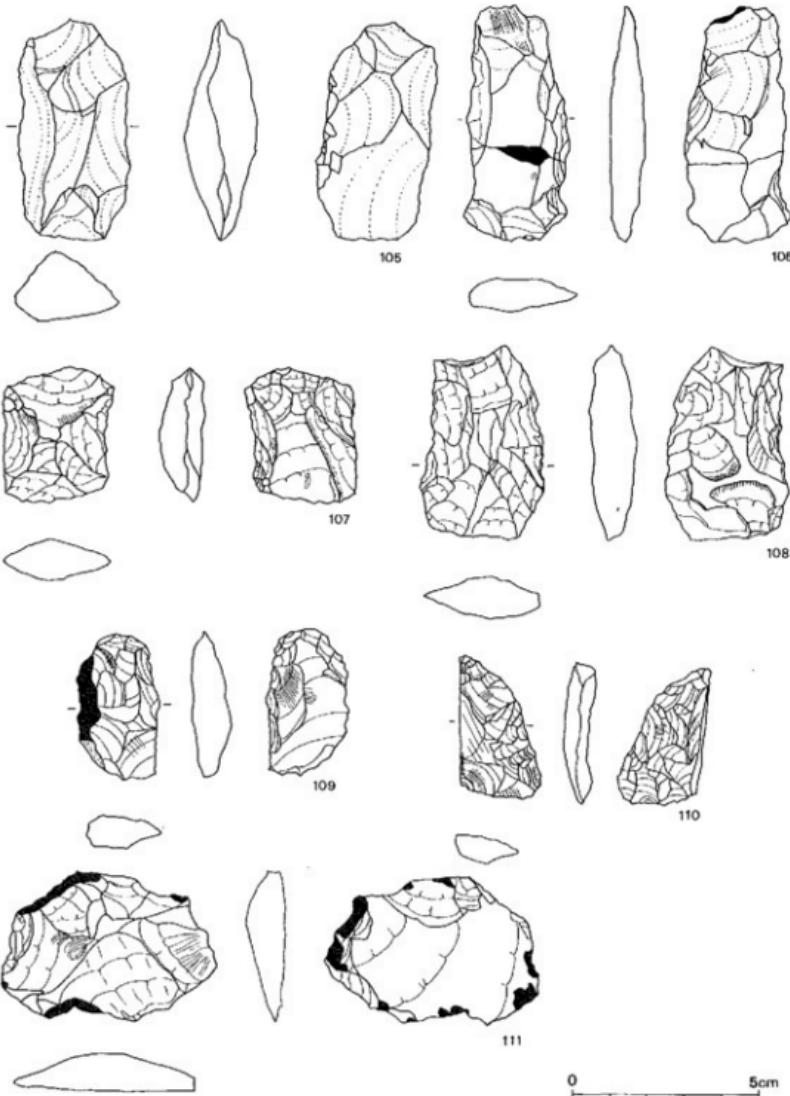


Fig. 41 スクレイバー・グレーバー

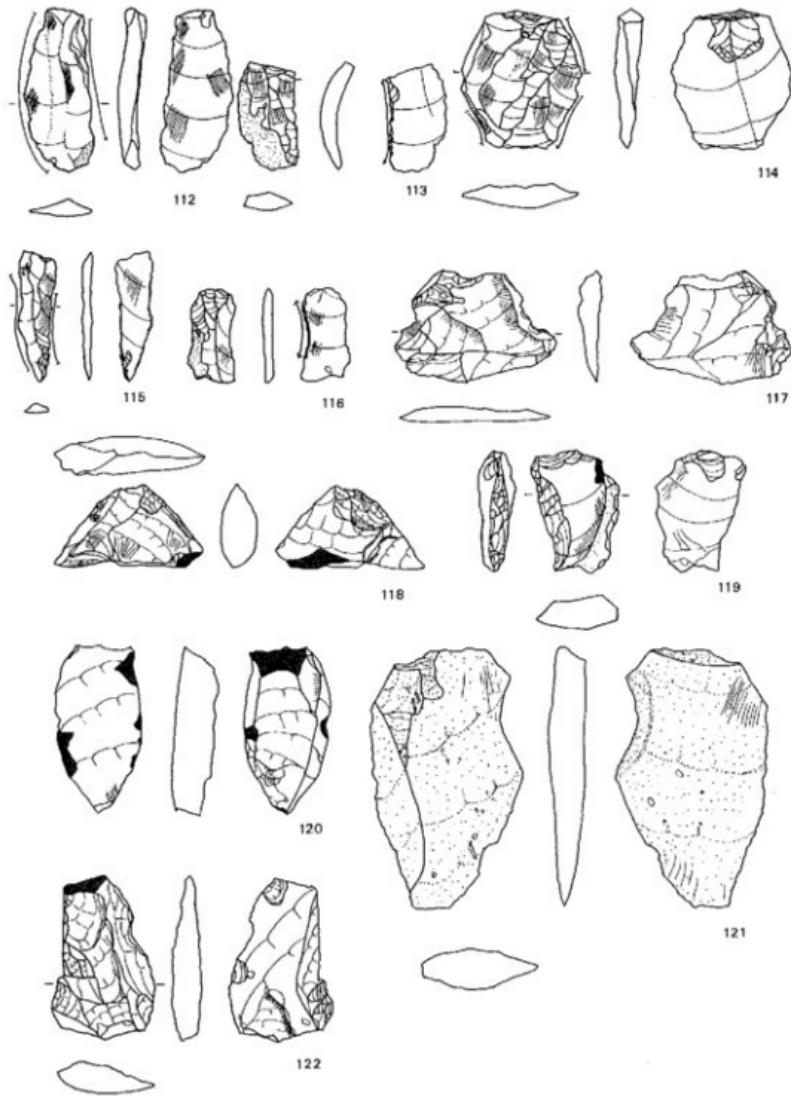


Fig. 42 使用痕ある剝片・剥片

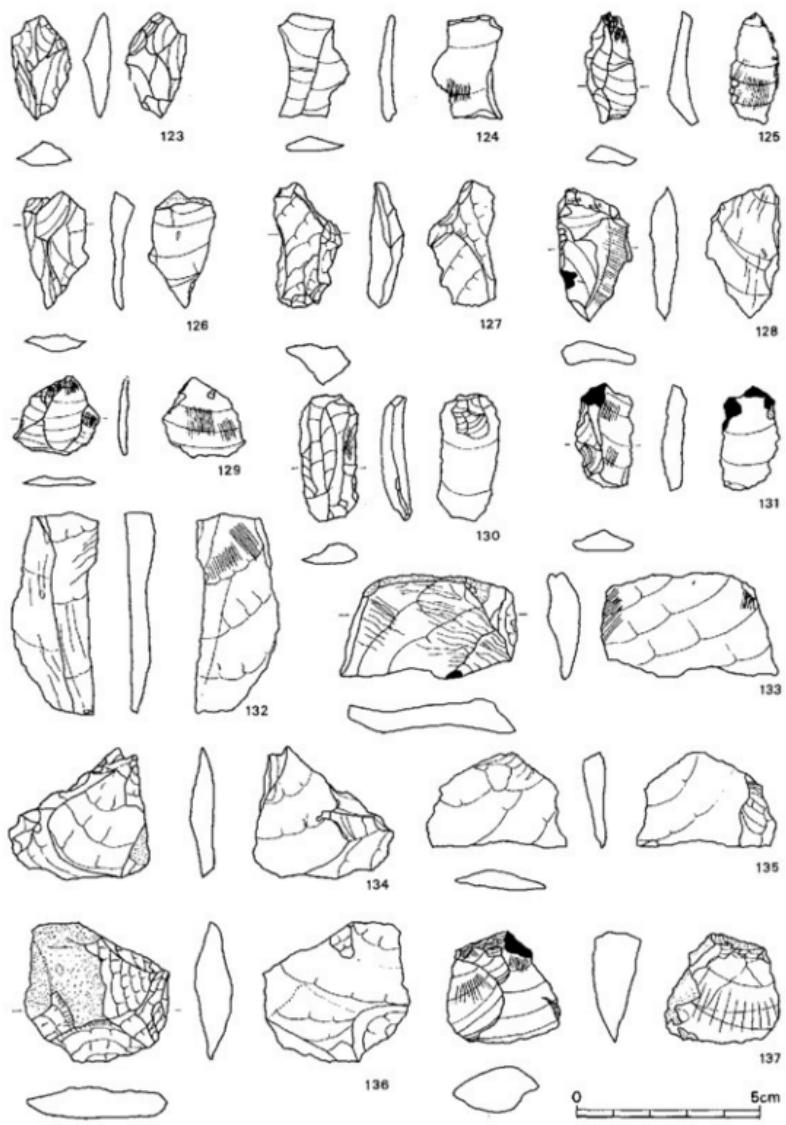
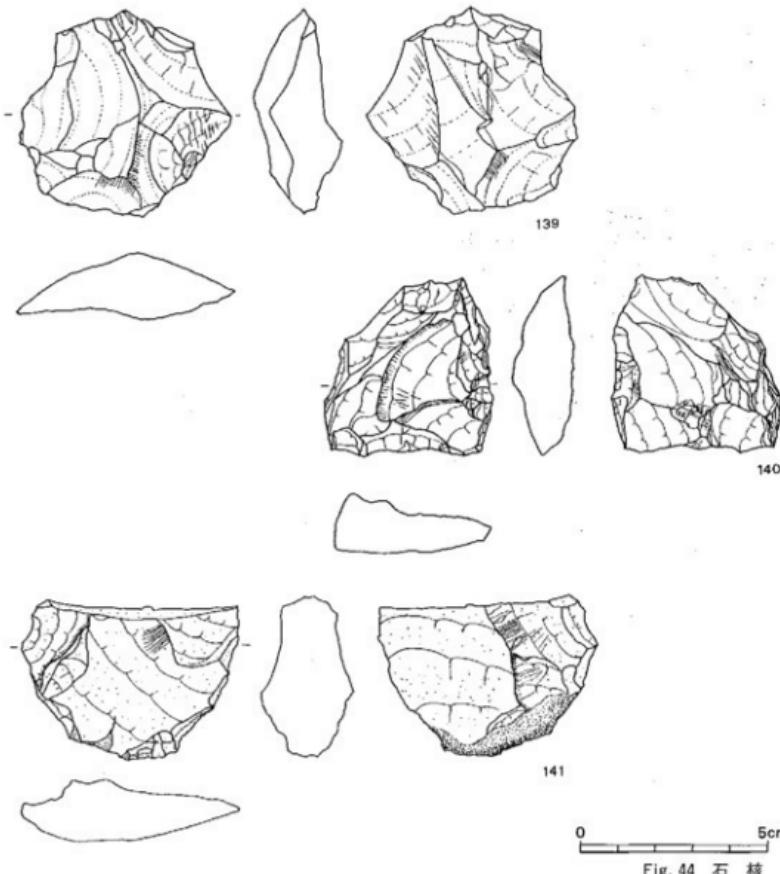


Fig. 43 刺 片



安山岩5点である。打面部は自然面なもの、調整痕があるもの2つに分類できる。

打面部が自然面なものは、126, 130, 131~133, 135~137である。130, 131は表面にいくつかの剥離痕がうかがえる。特に131は中央に稜を有し、断面が三角形を呈する。

調整された打面部を有するのは、123, 125, 127, 128, 129, 134である。123は中央に稜を打ち断面は扁平な三角形を呈する。(灰青色の黒曜石である) 129は小形の縦長剥片である。

最後に124は、上下とも切断されたもので中央部に稜を持つものである。灰白色。bである。

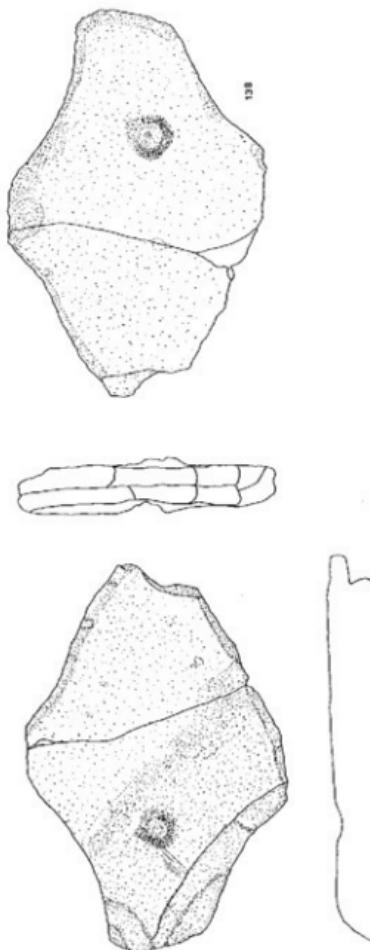


Fig. 45 砥石

石核 (Fig. 44, PL. 38, 39)

3点図示した。いずれも安山岩である。139, 140の2点は、打面を転移しながら、多方向よりの剥片剥離を行なっている。また剥片そのものも大きいものではなく、一定の剥片を取りだしている状況も認められない。表裏面共に作業面として利用され、円盤状に仕上がり、断面形も扁平になっている。これら2点とは明らかに相違する剥片剥離を行なっているのが141で正面のみを剥離作業面としており、裏面は一次剥離を残し、下部には自然面に覆われている。前者の石核よりも厚めの縦長剥片剥離を目的としたものであると考えられる。

砥石 (Fig. 45, PL. 38, 39)

G-10区、第II層よりの出土。扁平な砂岩製である。長さ14.2cm、幅9.2cm、厚さ1.8cm、重量283gを測る。表面は全体的に摩耗痕が認められ、中央部より半分は摩耗痕が高い。裏面は風化により板状の欠損がうかがえる。特に表面において、直径1.2cm程の円形のくぼみが認められ、この部分は他の円柱状のものを砥ぐ為に使用されたものと考える。二つの用途を持った砥石と考える。

Tab. 3 石鉄計測表

擇 番 号	出土区	層 位	石 材	破損 部位	重さ (g)	大きさ (mm)			挟り (mm)	先端 角度	分類
						長	幅	厚			
1	A-9	赤褐色粘質土層	安山岩	完	2.8	31	14	6	—	7	35° Ia
2	F-11	"	灰青色	完	3.3	32	16	6	—	7	30° Ia
3	E-11	表面採集	黒色o b	C	0.9	18 ²⁰	130 ¹⁵	5	1	9	45° Ib
4		"	"	A	0.7	17 ²⁰	17	3	2	12	45° Ib
5		"	"	"	1.3	22 ²⁰	18	3	1	—	(17°) Ib
6	G-27	"	"	E	0.9	20 ²⁰	12	4	1	—	36° Ib
7	D-5	"	灰白色o b	完	0.9	19	13	5	—	—	45° Ib
8	B-6	"	黒色o b	D	1.0	19 ²⁰	14 ²⁰	4	2	(12)	50° Ib
9	I-27	赤褐色粘質土層	"	C	0.8	22 ²⁰	140 ¹⁵	4	1	—	38° Ib
10		表面採集	黒色	完	1.1	19	19	4	3	17	56° Ib
11	B-14	赤褐色粘質土層	黒色o b	A	1.3	14 ²⁰	22	5	3	(17)	54° Ib
12	E-13	表面採集	"	D	—	18 ²⁰	19 ²⁰	4	3	—	Ib
13	G-13	赤褐色粘質土層	"	A	2.2	19 ²⁰	22	6	2	15	33° IIa
14	O-13	表面採集	"	完	0.5	17	15	3	3	9	54° IIa
15	H-13	赤褐色粘質土層	"	C	1.4	33 ³⁵	140 ¹⁵	4	6	7	30° IIa
16	G-13	"	灰青色o b	完	3.0	40	14	6	9	6	25° IIa
17	G-12	"	安山岩	"	4.9	39	21	9	8	7	35° IIa
18	E-15	表面採集	黒色o b	A	1.8	17	10	8	7	5	(41°) IIa
19	E-7	"	"	"	1.9	21 ²⁰	20	5	7	(5)	(28°) IIa
20	E-7	"	"	C	1.1	27	14 ¹⁵	5	9	8	45° IIa
21	C-14	"	"	D	1.8	29	13	5	5	5	32° IIb
22	B-15	"	"	B	1.8	29 ³⁰	13	6	1	(4)	22° IIb
23	A-12	ピット内	"	C	1.3	29	130 ¹⁵	4.5	7	(8)	33° IIb
24	G-13	表面採集	"	"	1.0	22	11 ¹⁰	5	6	(8)	38° IIb
25	H-15	赤褐色粘質土層	"	"	0.9	25 ²⁷	140 ¹⁵	4	5	(5)	33° IIb
26	A-10	"	"	D	1.0	21 ²⁰	90 ¹⁰	5	7	(7)	(28°) IIb
27	A-8	表面採集	"	C	1.1	26	150 ¹⁵	4	8	(12)	41° IIb
28	B-8	赤褐色粘質土層	"	"	1.1	28	130 ¹⁵	5	8	—	36° IIb
29	B-12	表面採集	"	D	2.0	29 ³⁰	13 ²⁰	6	—	(24°)	IIb
30	D-15	"	"	C	0.5	17	8	7	10	4	54° IIb
31	M-9	"	"	D	1.1	16	15	5	7	7	IIb
32	G-29	赤褐色粘質土層	灰白色o b	完	1.9	28 ³⁰	21	5	8	12	40° IIb
33	G-11	"	黒色o b	"	2.6	17 ¹⁹	15	4	4	5	50° IIb
34	J-8	表面採集	"	D	1.1	21 ²⁰	18	4	10	(10)	60° IIb
35	D-14	"	灰青色	C	1.9	29 ³⁰	13 ²⁰	6	7	7	40° IIb
36	D-8	"	"	"	—	32 ³⁰	17 ¹⁵	7	6	(7)	26° IIb
37	C-11	"	黒色o b	D	2.6	34 ³⁵	16	6	5	(7)	20° IIb
38	D-14	"	安山岩	A	2.7	32 ³⁵	16	6	5	6	38° IIb
39	H-15	赤褐色粘質土層	"	完	2.7	37 ³⁵	19	5	8	10	25° IIb

拂 番 号	出土区	層 位	石 材	破損 部位	重さ (g)	大きさ (mm)		挟り (mm)	先端 角度	分類
						長 度	幅			
40	J - 31	表面採集	灰白色 o b	C	1.0	22	110	5	6	(8) 23° IIb
41	B - 14	赤褐色粘質土層	黑色 o b	完	1.3	293	17	3	6	(8) 45° IIb
42	Q - 11	〃	灰青色	C	1.4	242	150	6	9	10 41° IIb
43	I - 29	表面採集	黑色 o b	D	0.9	183	151	4	8	(10) 33° IIb
44	〃	〃	〃	〃	1.7	26	151	5	6	(10) 35° IIb
45	K - 13	赤褐色粘質土層	〃	完	1.9	272	19	5	7	8 50° IIb
46	I - 29	表面採集	黑色	A	0.6	16	171	3	6	(10) 60° IIb
47	〃	〃	黑色 o b	C	0.4	202	111	4	10	13 51° IIb
48	D - 7	〃	灰白色 o b	完	0.4	202	11	3	7	9 35° IIb
49	F - 11	赤褐色粘質土層	安山岩	C	1.5	293	16	4.5	8	(9) 30° IIb
50	E - 12	〃	〃	A	1.1	16	14	5	5	7 (26°) IIb
51	A - 9	表面採集	黑色 o b	C	0.3	180	18	3	11	(12) 48° IIb
52	I - 29	赤褐色粘質土層	〃	D	1.2	263	142	5	10	12 (47°) IIb
53	D - 26	表面採集	〃	C	1.4	316	140	4	9	(10) (27°) IIb
54	H - 30	〃	〃	〃	0.6	192	111	4	6	(8) 45° IIb
55	G - 27	赤褐色粘質土層(△)	黑色	完	0.7	23	16	3	7	12 47° IIc
56	E - 8	〃	黑色 o b	C	0.6	20	22	4	7	(10) 60° IIc
57	B - 7	表面採集	〃	〃	0.8	22	130	4	5	9 46° IIc
58	E - 10	赤褐色粘質土層	安山岩	〃	1.3	272	120	5	4	(9) 33° IIc
59	D - 9	〃	〃	D	2.3	303	142	7	9	14 (31°) IIc
60	Q - 11	表面採集	黑色 o b	C	0.7	19	17	3.5	6	11 IIc
61	D - 6	赤褐色粘質土層	〃	〃	2.1	203	25	6	9	17 (33°) IIc
62	表面採集	〃	〃	C	1.3	202	140	5	4	(7) 44° IIc
63	D - 9	赤褐色粘質土層	安山岩	〃	1.2	18	16	4	3	9 IIc
64	H - 15	表面採集	黑色 o b	C	0.7	20	22	4	10	9 35° IIc
65	E - 12	〃	〃	A	0.7	22	7	5	10	5 30° IId
66	J - 12	赤褐色粘質土層	〃	完	0.8	202	14	5	5	10 42° IId
67	F - 12	〃	安山岩	〃	1.4	24	15	5	4	(9) 37° IId
68	Q - 11	表面採集	灰青色 o b	B	1.3	212	16	5	1	6 46° IId
69	I - 30	〃	黑色 o b	E	1.3	17	19	5	7	(10) IId
70	E - 14	〃	〃	C	0.6	16	170	3	3	6 68° IId
71	C - 11	〃	〃	D	0.5	182	14	3	4	(9) 40° IId
72	C - 11	〃	〃	P	1.8	212	18	6	6	15 43° IId
73	B - 25	〃	〃	E	0.6	192	11	3	2	4 33° IId
74	F - 14	赤褐色粘質土層	〃	A	0.5	20	10	5	15	5 55° IId
75	G - 19	表面採集	〃	D	1.6	253	192	4	(10) 22 (44°) IIc	
76	—	〃	〃	C	1.1	212	121	5	3	(8) 40° IIc
77	—	〃	〃	〃	1.9	282	172	5	4	(10) 48° IIc
78	D - 14	〃	〃	完	1.0	252	18	4	4	(10) 40° IIc

擇区番号	出土区	層位	石材	破損部位	重さ(g)	大きさ(mm)		抉り(mm)		先端角度	分類
						長	幅	厚	深度		
79	E-23	表面採集	安山岩	D	1.6	26.0	15	4		26°	IIe
80	L-25	赤褐色粘質土層	黒色o.b	C	0.8	17	13.0	4	1	(6) 50°	IIe
81	B-11	表面採集	灰白色o.b	D	3.1	28.0	17.0	6.5	2	(8) (23°)	IIe
82	C-8	赤褐色粘質土層	黒色o.b	n	1.5	28.0	15.0	4	6	— (27°)	IIe
83	K-29	n (A)	灰白色o.b	B	0.7	20.0	13	3		40°	IIe
84	L-18	n (A)	黒色o.b	n	1.3	21.0	14.0	5	1	(3) 40°	IIe
85		表面採集	灰青色o.b	D	0.6	15	18.0	3	2	(33°)	IIe
86	B-14	赤褐色粘質土層	黒色o.b	E	0.2	14.0	8	2	2	(4) (34°)	III
87	H-11	n	完	0.6	22	15	3	4	12	41°	III
88	C-15	表面採集	n	D	0.8	18	14	3	5	(1) 26°	III
89		n	灰青色o.b	完	2.0	31	18	4	7	10 50°	IV
90	I-11	n	黒色o.b	A	0.9	20.0	15	4	4	7 (43°)	IV
91	C-11	n	n	n	0.6	15	13	3	3	6 26°	IV
92	M-16	n	n	n	0.4	16.0	9	3	4	(9)	IV
93		n	n	n	1.0	19	15	5	11	3 (46°)	IV
94		n	n	n	2.8	24	17	6	10	6 31°	IV
95	D-11	n	n		1.8					39°	IV
96		n	n	完	2.3	27	19	5	3	7 39°	IV
97	O-13	n	n		1.2	27	14	4			IV
98	H-30	n	灰白色o.b	F	0.7			4			V
99	G-14	n	黒色o.b	n				4			V

Tab. 4 尖頭器・石匙計測表

擇区番号	分類	出土区	出土 層位	石材	重さ(g)	長	幅	厚	備考
100		C-7-16	赤褐色粘質土層	安山岩	12.3	4.4	2.4	1.1	ポイント
101	横形	E-12-60	n	黒色o.b	14.3	3.1	4.8	1.0	石匙
102	n	F-9-33	n	安山岩	37.1	6.8	4.8	1.2	n
103	縦形	C-11-H	n	灰青色ob	2.3				n %欠損
104		F-13-3	n	安山岩					n n

Tab. 5 スクレイバー計測表

標図番号	分類	出土区	出土層位	石材	重さ(g)	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
105	B-8-64	赤褐色粘質土層	安山岩	32.3	5.8	2.9	1.9		
106	A-9-H	〃	〃	19.9	6.3	2.6	0.9		
107	F-11-24	〃	〃	13.3	3.5	2.8	1.2		
108	E-9-H	〃	〃	24.1	5.2	3.1	1.2		
109	E-13-H	〃	灰白色	10.3	3.8	2.1	1.0	新しい剥離あり	
110	C-12-98	〃	黒色○b	6.7	3.6		0.7	切断	
111	B-10-10	〃	安山岩	25	3.8	5.6	1.0		

Tab. 6 使用痕ある刷片・刷片・石刻計測表

(IIは表面採集)

標図番号	出土区	石材	打面	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	自然面	折断	備考
112	H-13-H	黒色○b	自然面	4.3	1.7	0.5	3.8	有	無	
113	B-8-67	〃	平坦	3.0	1.5	0.5	2.4	有	有	
114	M-26-H	〃	調整	3.6	2.6	0.6	7.3	無	無	新しい剥離有
115	C-19-H	〃	自然面	3.5	0.9	0.3	0.8	有	無	
116	O-13-H	〃	調整	2.5	1.2	0.4	1.1	有	有	
117	F-12-121	安山岩	自然面	3.0	4.2	0.6	6.6	有	無	
118	F-8-H	〃	調整	2.1	3.9	1.0	8.8	無	無	新しい剥離有
119	E-23-H	黒色○b	〃	3.2	2.2	1.0	7.5	有	無	
120	A-9-H	安山岩	欠	4.3	2.1	1.0	12.7	無	無	一部欠損
121	B-11-29	〃	自然面	6.9	4.0	1.2	30.0	有	無	
122	B-8-77	〃	線状	4.3	2.8	0.8	10.7	無	無	新しい剥離有
123	F-10-62	灰青色○b	調整	2.3	1.6	0.7	2.4	無	無	
124	B-8-8	黒色○b	平坦	2.7	1.5	0.3	2.2	無	有	
125	G-11-H	〃	調整	3.1	1.4	0.6	1.7	無	無	
126	F-10-38	灰白色○b	自然面	3.2	1.7	0.5	2.1	有	無	
127	B-7-8	安山岩	調整	3.4	1.7	0.9	5.5	無	無	
128	F-8-H	灰青色○b	〃	3.5	1.9	0.5	5.4	無	無	
129	C-14-11	黒色○b	線状	2.2	2.0	0.3	1.0	無	無	
130	G-12-14	〃	自然面	3.5	1.6	0.8	4.3	有	無	新しい剥離有
131	O-13-11	〃	欠	2.8	1.6	0.6	2.9	有	無	新しい剥離有
132	B-7-18	安山岩	自然面	5.4	2.1	0.6	6.9	有	有	
133	A-12-68	〃	調整	4.2	4.7	0.6	8.4	有	無	
134	B-7-87	〃	〃	3.5	3.8	0.4	9.0	有	有	
135	F-8-4	灰青色○b	線状	2.6	3.8	0.7	5.0	有	有	
136	B-8-H	安山岩	〃	3.9	3.9	0.9	14.8	有	無	
137	B-8-20	黒色○b	自然面	3.1	3.2	1.2	9.1	有	無	
138	E-10-54	安山岩	〃	5.6	5.4	1.8	42.3	有	無	
140	B-7-88	〃	〃	4.6	4.2	1.5	35.5	無	無	
141	G-10-40	〃	〃	4.2	5.9	2.2	41.7	無	無	

四、旧石器時代の遺物

旧石器時代の遺物は、A地点・B地点共に出土し、その総出土点数は表土、包含層出土のものを合わせて、A地点で235点、B地点105点とA地点出土のものが圧倒的に多い。しかし、A地点については、包含層の堆積が薄く、土層堆積状況、及び、遺物の出土状況も、縄文時代の遺物がかなり混入するなど、定形的な石器以外の剝片類については、その時代的判別は困難な状態にある。従ってA地点の遺存状態については定形的な石器についてのみ、その出土状況を示した。B地点では、そのほとんどが旧石器時代の遺物で占められ、包含層の堆積も厚いが傾斜がかなり強く、遺物の流れが予想されるため本来の遺存状態を保っているといいがたい。遺物については、周辺からの表面採集品、A地点の表土、包含層出土品、B地点の表土、包含層出土品に分けてそれぞれ説明し、A地点での石器組成、B地点での石器組成、A・B両地点の相違について考えていくとするものであり、県内の旧石器時代の遺跡との関連の中で、上原遺跡の位置づけを行うことを目的とする。

遺跡周辺表面採集の石器 (Fig. 46)

遺跡は台地全体に及ぶと思われるものの、発掘区域は台地中央部のみに留まり、その周辺からは、発掘区域内とは相違する石器群が存在することを示唆する資料が採集されている。1～18の資料は、それら表面採集の資料で、ナイフ形石器、彫器、角錐状石器、三陵尖頭器、台形石器からなり、角錐状石器、三陵尖頭器などは、発掘資料では出土していない点、半戸市の堤西牛田遺跡の出土関係などから判断すると、発掘資料との間に時間的な差を持つものと考えられる。ナイフ形石器については、中型の柳葉形をなす、中山・柿崎遺跡に見られるものと同様なものや、当遺跡に普遍的に見られる、小型のナイフ形石器などからなり、台形石器16～18は、その技術的側面からは、各々様相を異なるものが出土している。1～18の採集資料からは、萩原氏編年を踏襲するとすれば、角錐状石器・台形石器の在り方、柳葉形のナイフ形石器などから、フェイズII後期～中期の石器が混入しているものと考えられる。

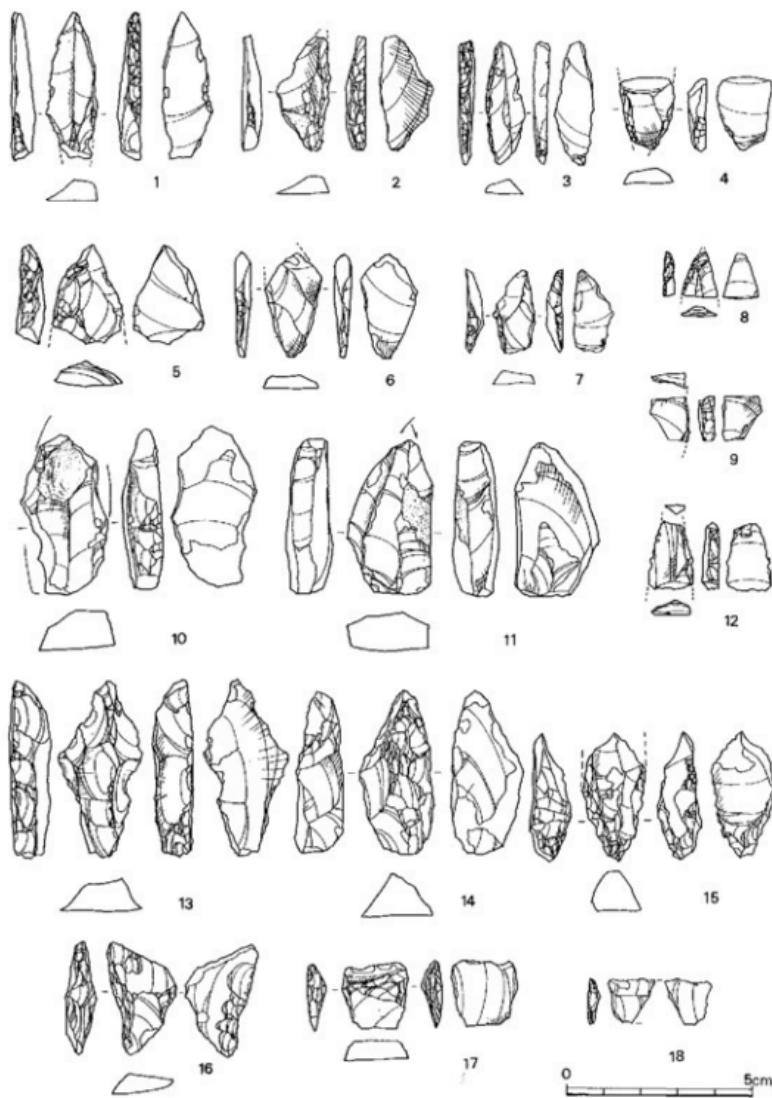


Fig. 46 遺跡周辺表面採集の石器

A 地点表土出土の石器

A 地点の表土からは、ナイフ形石器37点、台形石器3点の出土が見られる。ナイフ形石器は中型で柳葉形を呈するものと、先端部切断のナイフ形石器が目を引くもので、柳葉形のナイフ形石器は、中山・柿崎遺跡などのような細身、長身のものは見られず、柳葉形になるものも少ない。先端部切断のナイフは、そのプランティング面が側刃にまで及ぶもので、このような形態は、先端部切断のナイフを多数出土している柿崎遺跡においては見られず、中山遺跡において1点認められるにすぎない。いずれにせよ、先端部切断のナイフ自体はフェイズII後期のものとして捉えられよう。台形石器33は、素材剥片自体が彎曲しているため刃部もやや彎曲し、刃部が全体形から張り出した形をしている。34の刃部は直線上で、プランティングも両側刃平行して加工しているもので、素材剥片でやや相異があるが、日の岳型と呼ばれる一連のものに類似している。33・34は灰青色黒曜石を使用しているが、55は漆黒色黒曜石を使用し、その素材剥片は薄身で、一側刃にプランティングを加え、もう一側刃は素材剥片のエッジをそのまま使用しているもので、台形石器自体の範疇の中で捉えられるかどうかかも問題があろう。A 地点表土出土の石器についても、様々な時期が混入しているものと思われ、その中において統一性は見られない。

A 地点出土の石器

表土出土のものに比べ、比較的まとまった状況にあり、小型の柳葉形ナイフ形石器と、先端部切断のナイフ形石器で構成される。柳葉形のナイフ形石器は、薄い小型の剥片を利用した、59～63、86～92など的一群と、やや肉厚の縦長剥片を使用した一群とに分けられよう。小型のナイフ形石器の一群には、打面部を残存させる、61・62・85などがあり、素材剥片の形状をほぼ残存せるものがある。特に85のナイフ形石器は、B 地点出土の155のナイフ形石器と共通している点、このナイフ形石器に見るかぎり、A 地点とB 地点との繋がりを考えさせる石器である。64以下の中型のナイフ形石器については、64のように尖端部尖鋭になるものと、68・69・72～74・76・77などに見られるような、刃部が短く、肉厚のナイフ形石器の一群があり、平面分布の中でも集中するような傾向が見られる。先端部切断のナイフ形石器98～103は、表土出土のものと同様に、単に先端部のみがプランティングによって切断されるばかりでなく、それに統く側刃もプランティング加工が施される。このような加工を施すナイフ形石器が、まとまって出土した例は他になく、一つの形式設定ができるものと思われるが、その時期については、他の先端部切断のナイフと同様、素材剥片の在り方からフェイズII後期のものとして捉えられよう。他のナイフ形石器については、フェイズI前期においても看守される面もあり、今後の研究に待たれる面が多い。石核は7点出土しており、円盤状の石核107・108・110と、

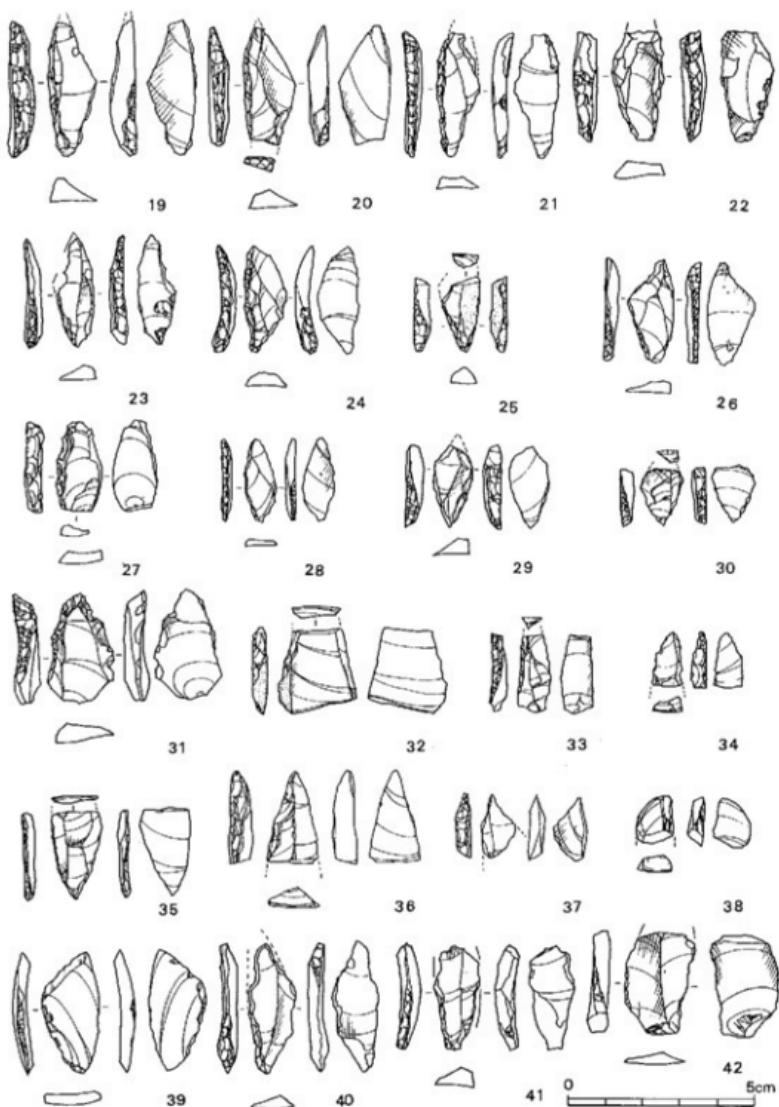


Fig. 47 A 地点表土出土の石器(1)

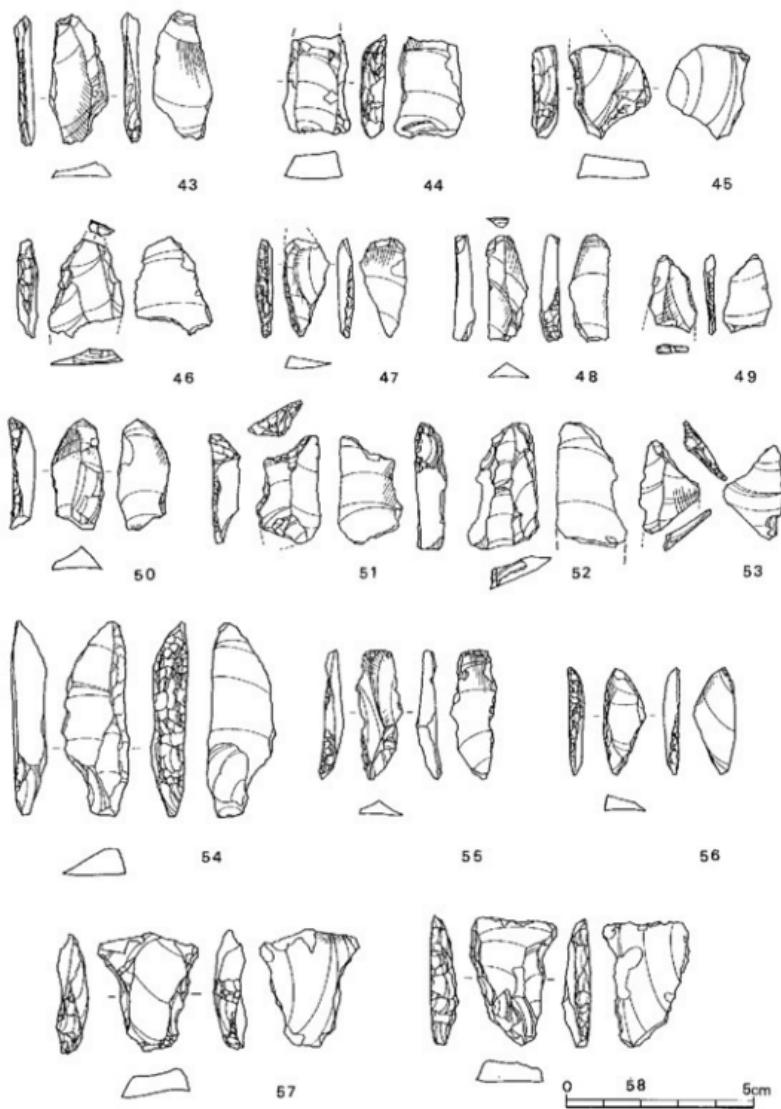


Fig. 48 A 地点表土出土の石器(2)

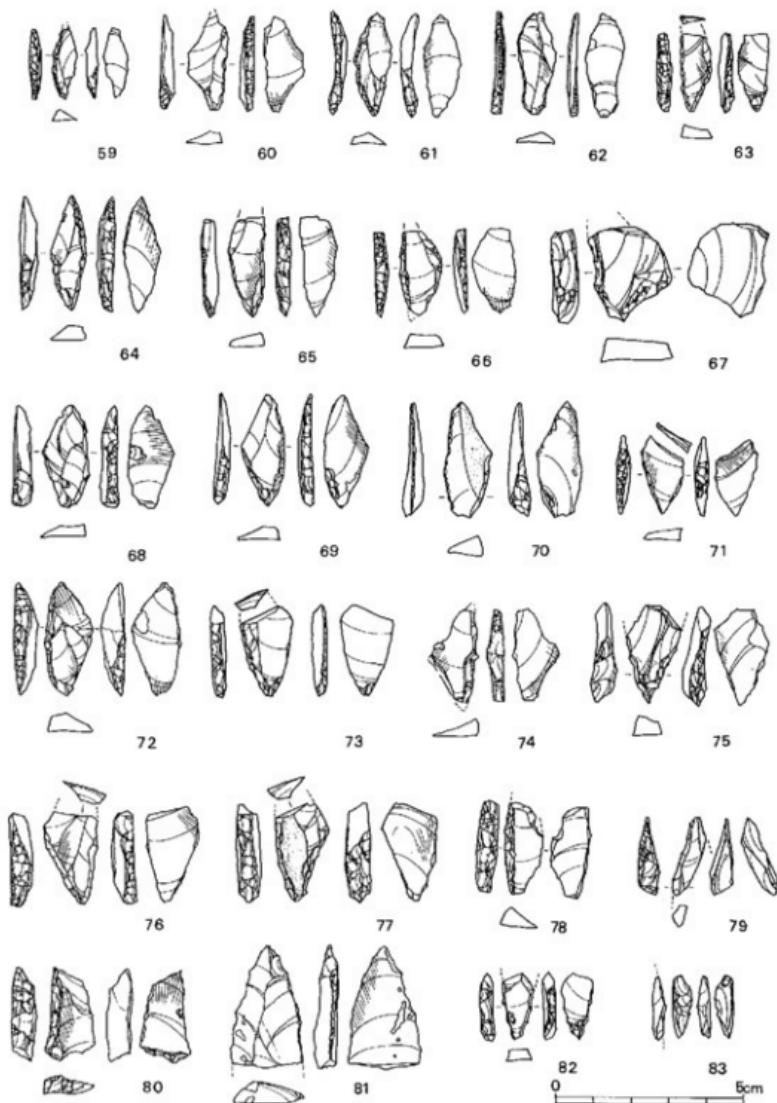


Fig. 49 A 地点出土の石器(1)

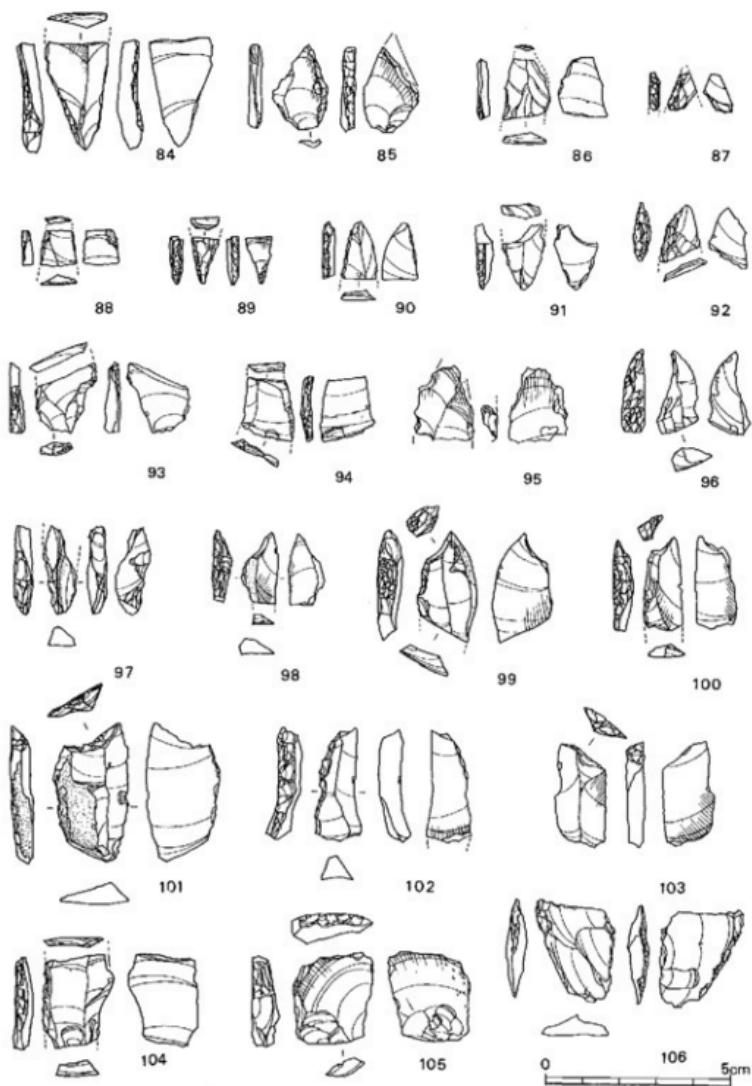


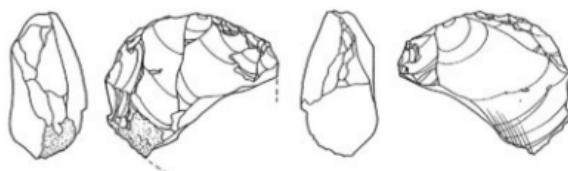
Fig. 50 A地点出土の石器(2)

109の縦長剥片用の石核で代表される。107・108は表裏面共に、作業面として利用され、亀甲状に仕上っている。110も同様に、最初に円盤状に縦長剥片を周囲から剥離していたものを、最終的に、図面正面にあるように打面調整を行い、小型縦長剥片を剥離している。これら3点とはあきらかに相違する剥片剥離を行っているのが109で、方柱状を呈し、正面のみを剥離作業面としており、裏面は自然面に覆われている。前者の石核よりも厚めの縦長剥片剥離を目的としたものであろう。113の石核については、縄文時代の所産としての可能性も強いが、瀬戸内の旧石器時代終末にみられる横長剥片剥離技術にも類似する資料として扱ってみた。114～135は旧石器時代の剥片及び、石器と考えられるもので、搔器・彫器・使用痕ある剥片などを掲げて見た。117・118の搔器は、特に丹念な調整により刃部を厚く作り出しており、特に117については縦石器文化に伴う厚手のエンドスクレーバーと考えられよう。彫器は、A地点、B地点の発掘資料の中では124と167の2点のみで、整った縦長剥片の一端に、打面調整なしで彫刃面を作り出している。この他にA地点・B地点共に言えることであるが、使用痕ある剥片、特に擦痕の目立つ剥片が非常に目立ち、上原遺跡での石器組織の貧弱さを補うものとして捉えられる。

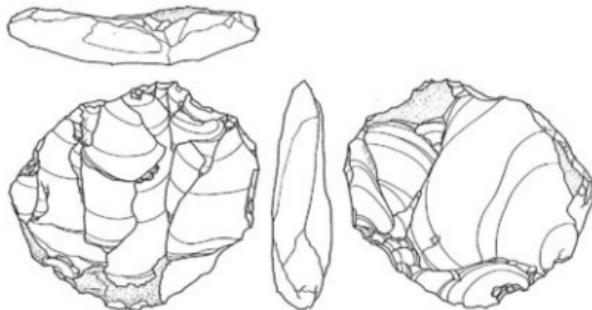
PL. 14



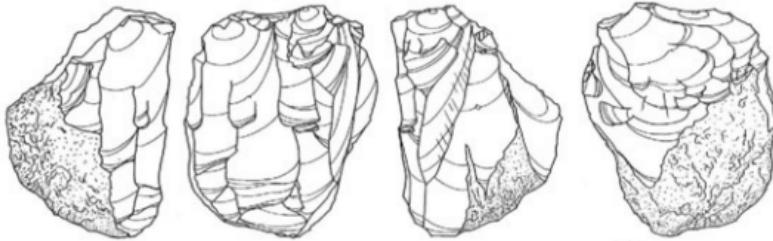
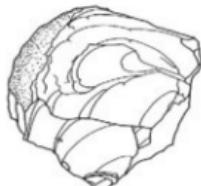
石核出土状況



107



108



109



Fig. 51 A 地点出土の石核(1)

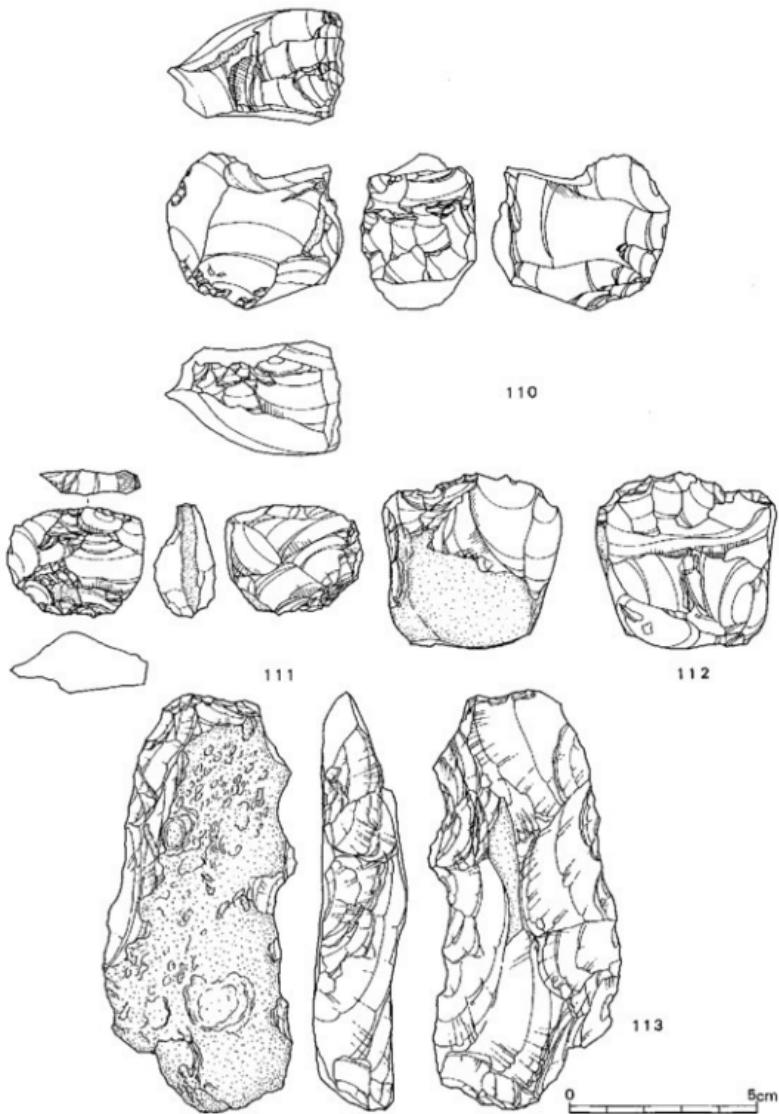


Fig. 52 A 地点出土の石核(2)

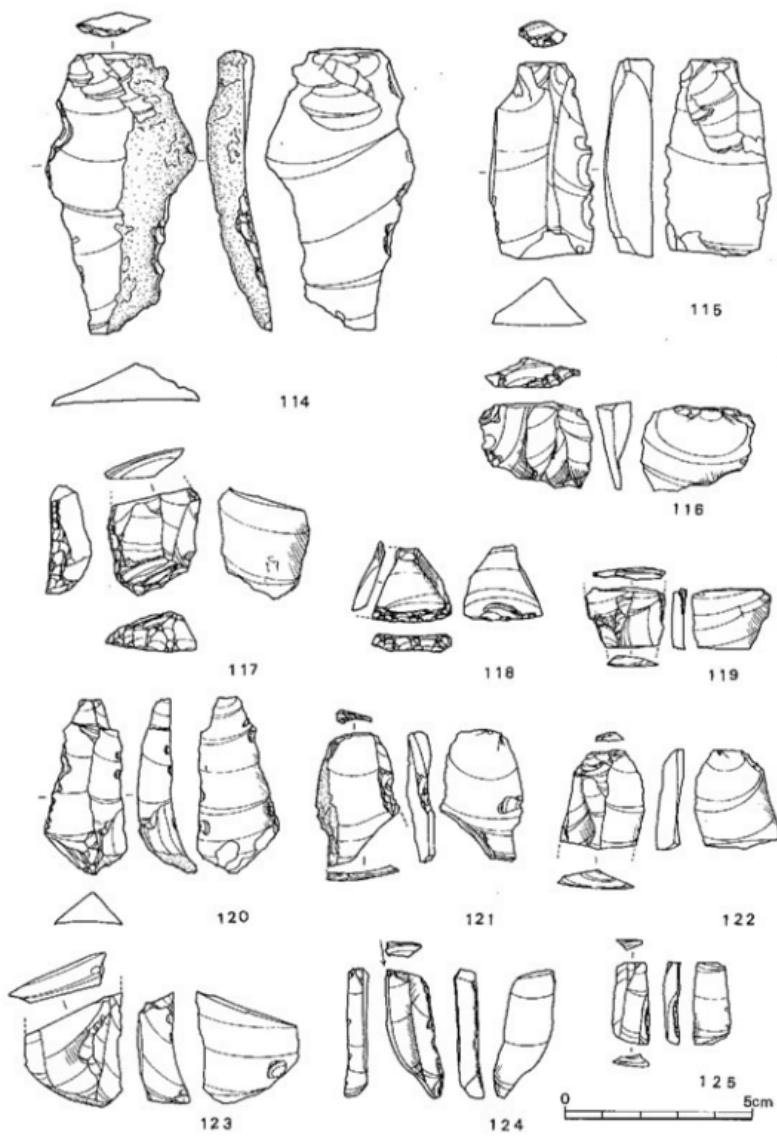


Fig. 53 A 地点出土の石器(3)

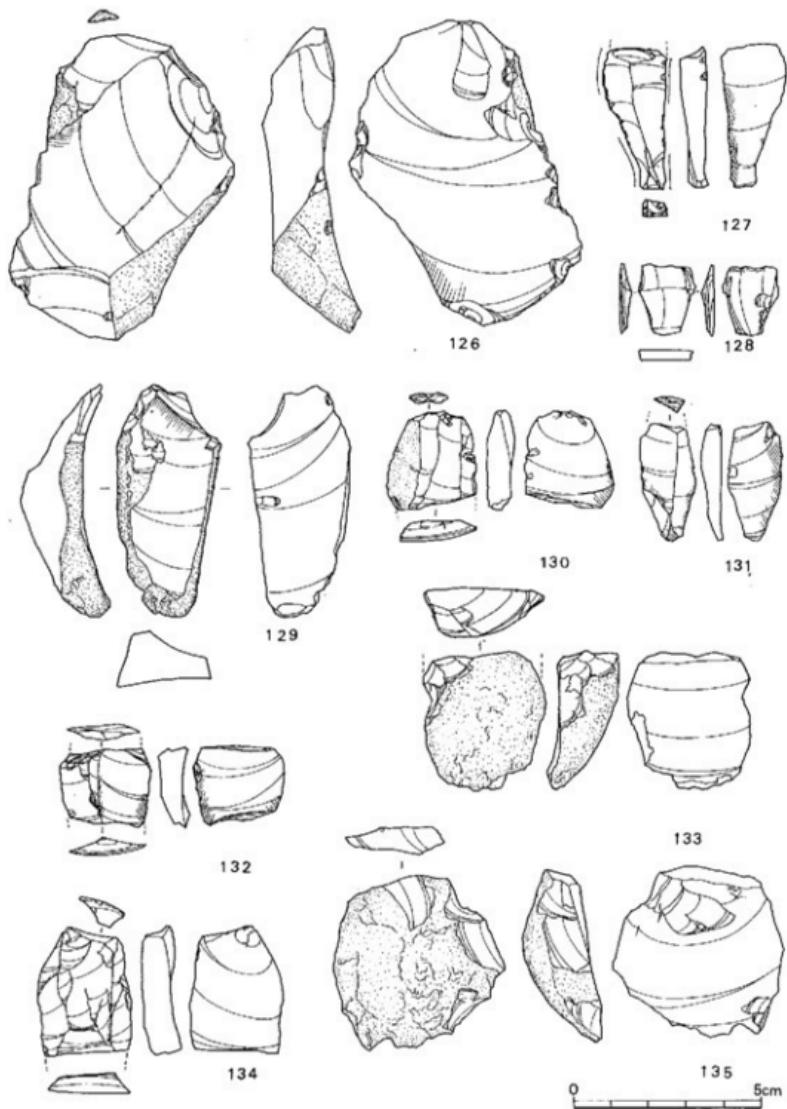


Fig. 54 A 地点出土の石器(4)

B 地点出土の石器

B 地点の遺物はナイフ形石器を中心に構成され、特に小型のナイフ形石器に特筆すべきものがある。これら小型のナイフ形石器140～155は、薄い小型の縦長剥片を使用することに共通性があり、151～153などは小形の不定形剥片を素材とし、幾何形を呈する。139のような大型のナイフ形石器も、素材剥片は小型のナイフ形石器と同様な、極薄の剥片を使用しており、同じ剥片剝離技術の中で掌握されるものと考えられる。また、背面基部平坦細調整のみられる138・140・142・162などのナイフ形石器があり、162と138においては、他のものに比べ、大型の縦長剥片を使用している点で相異しており、162についてはB 地点の中でもやや距離をおくF-24区に出上している点などから、B 地点で代表される小型のナイフ形石器と時間的な差を持つ可能性がある。138・162については、その所属時期については、柿崎型ナイフと呼ばれる一群に相当するものと考えられ、フェイズII後期に位置づけられようが、130～145の一連の小型のナイフ形石器がこれらと同時共存するものかどうかが一つの問題となり得る。160は、石錐で、中央部から欠損しているが、3つほどの尖鋭部分を作り出していたものと思われ、161についてはチャートの小円錐を半削したものにプランティング加工を施したものである。石核については、3点の出土があり、うち164は表土出土のもので、表裏面ともに剝離面に覆われ、縦断面凸レンズ状を呈する。163は、正面にのみ剝離作業面を設け、裏面は自然面を呈した小石核で、薄い小剥片を剝離したものと考えられる。165は、II層下、III層上面で出土した石核で拳大の角礫に対し、数回の剝離を施した後に、打面調整をした段階で放棄されている。剝離された剥片は自然面を表面に残すものが剝離されたと思われるが、その後に打面調整を行っている点、その後に剝離作業を続ける意志があったものと思われる。この石核については、B 地点遺物出土レベルより、さらに下の方でこの1点が出土しており、上部出土の石器群より古い時期の段階に属するものであろう。この他の石器として、彫器・搔器などが出土しているが、A 地点と同様、使用痕ある剥片が多数出土しており、石器の組成上はA 地点と同じ傾向を持つ。石器素材としては、漆黒色黒曜石と灰青色黒曜石ではば占められ、灰白色黒曜石製のものとしては、136と137のナイフ形石器にのみ使用しており、剥片類についても皆無に等しい状況にある。B 地点出土の剥片は、大きさにおいて極端な差が認められるが、すべて縦長剥片剝離の中で捉えられる。灰青色黒曜石製の石核は出土していないが、179・180・181などの大型の調整剥片が出土しており、遺跡内での剥片剝離作業が現に存在し、石核は他に運び込まれたものであろう。

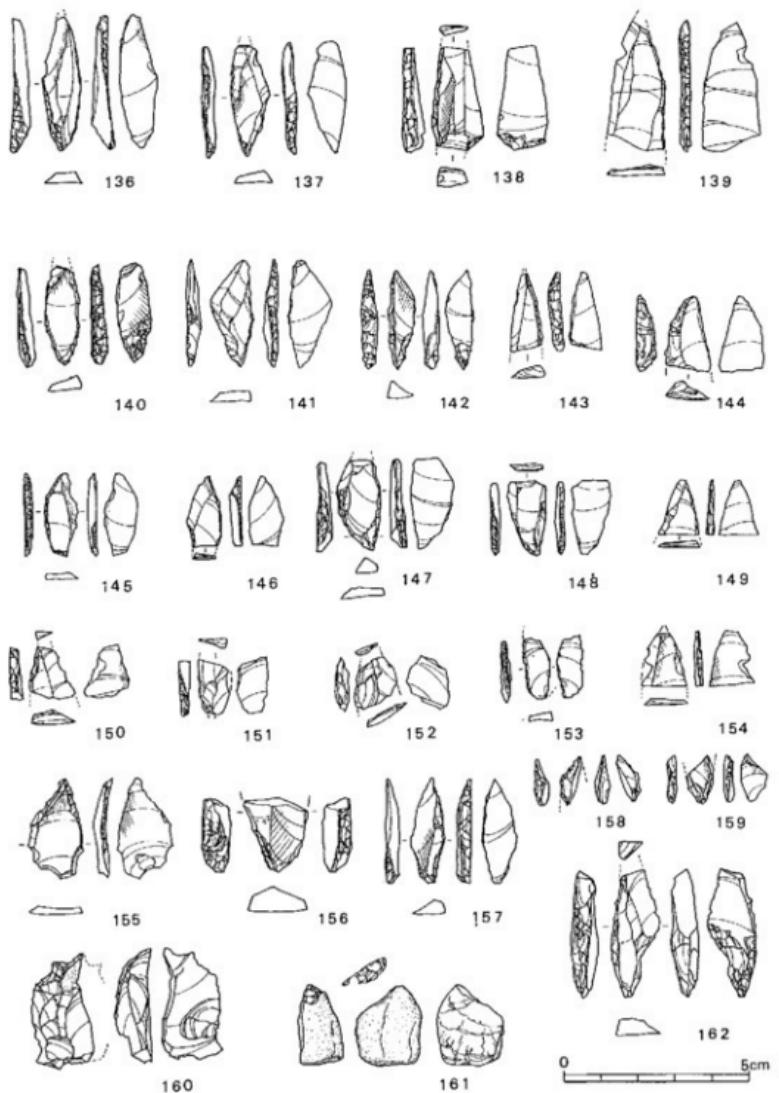
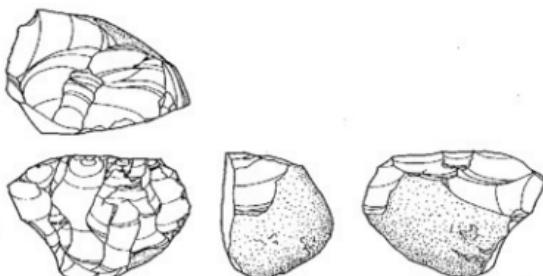
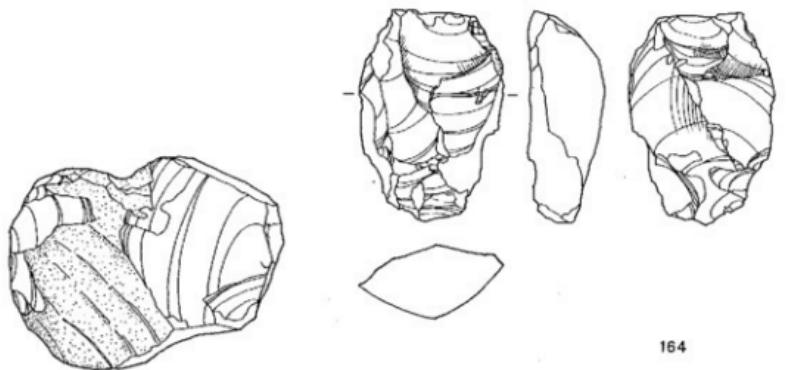


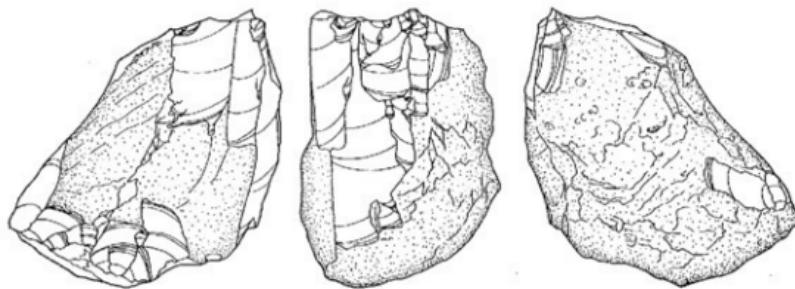
Fig. 55 B地点出土の石器(1)



163



164



165

0 5cm

Fig. 56 B 地点出土の石核

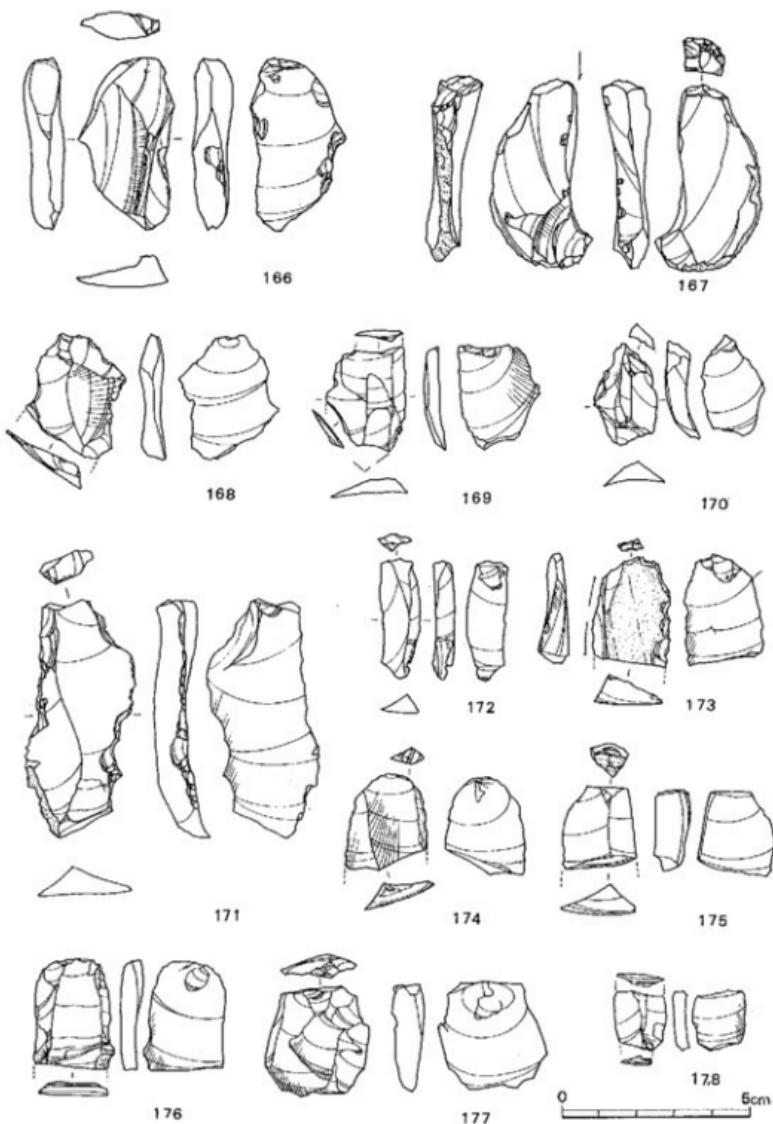


Fig. 57 B 地点出土の石器(2)

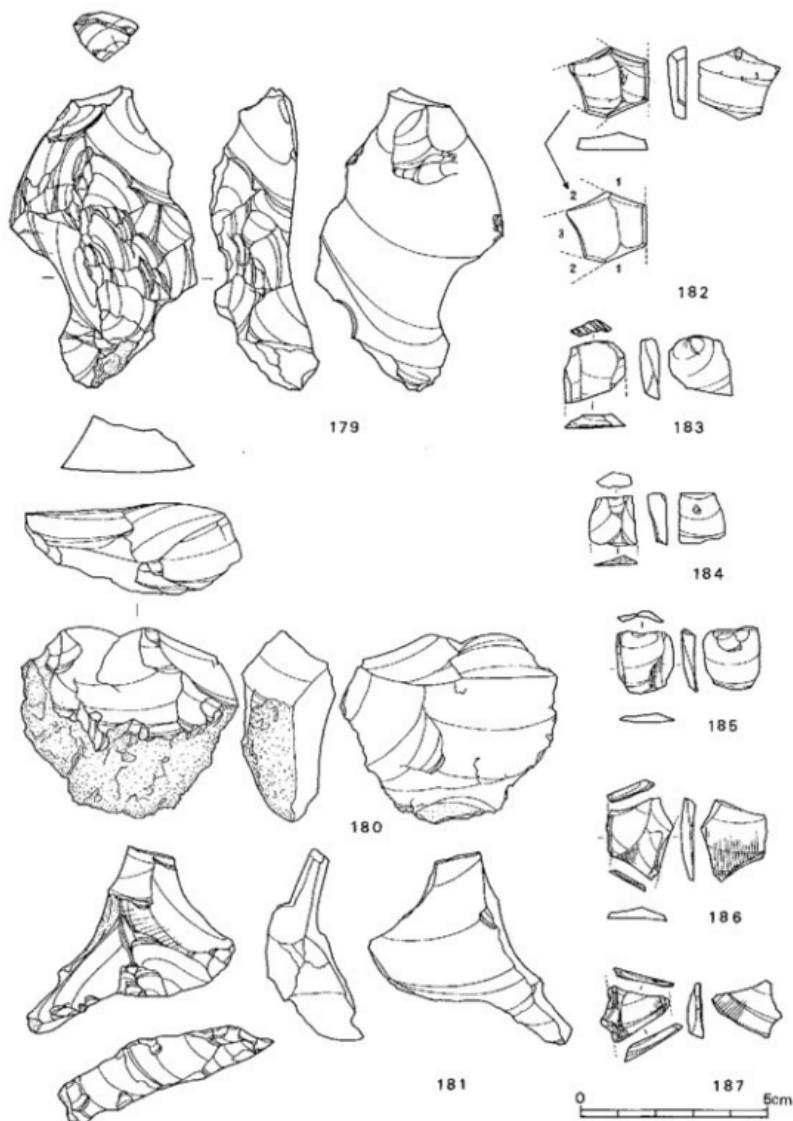


Fig. 58 B 地点出土の石器(3)

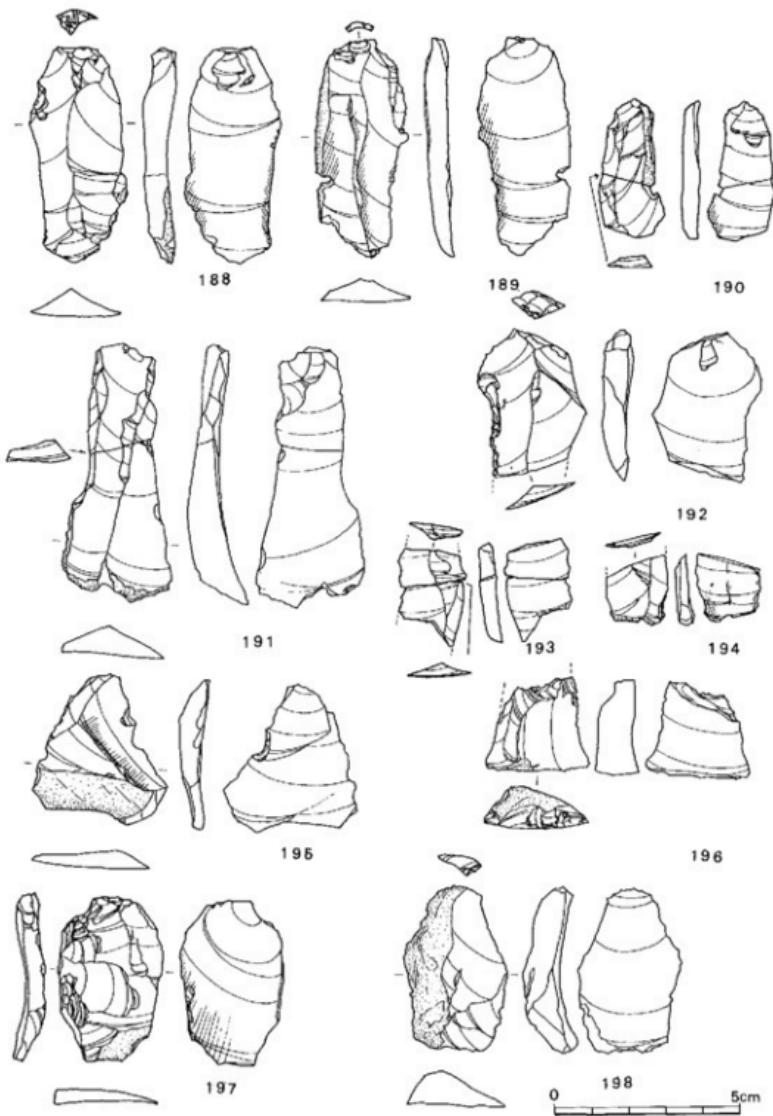


Fig. 59 B地点出土の石器(4)

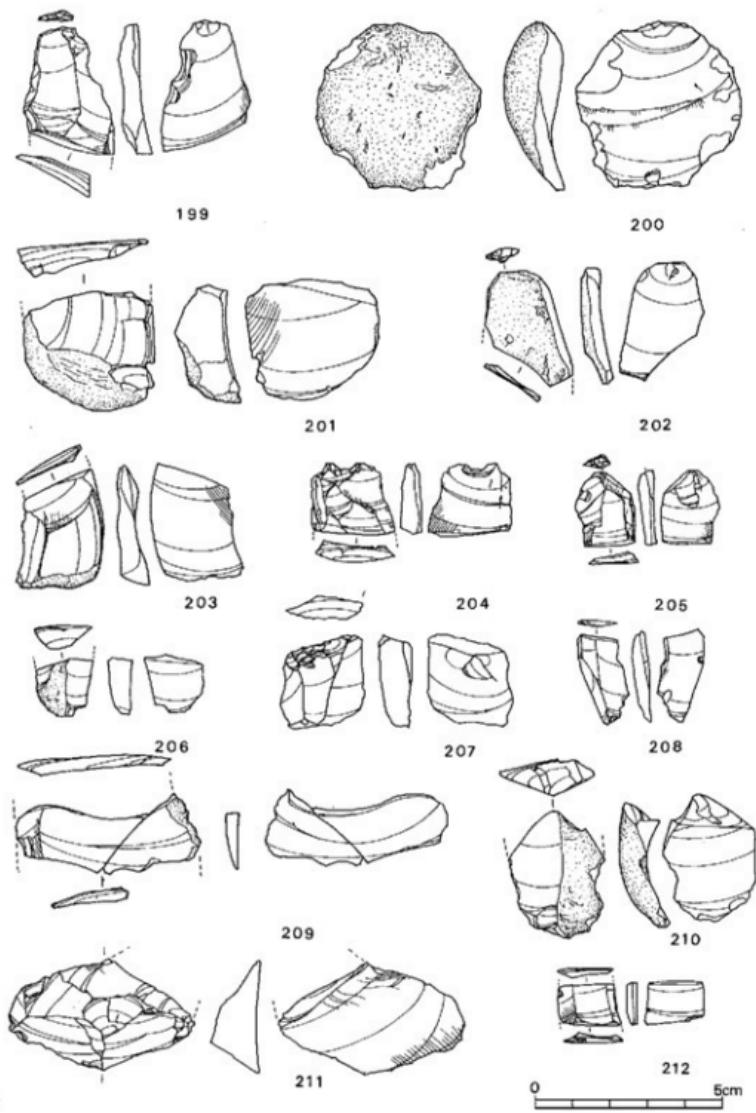


Fig. 60 B 地点出土の石器(5)

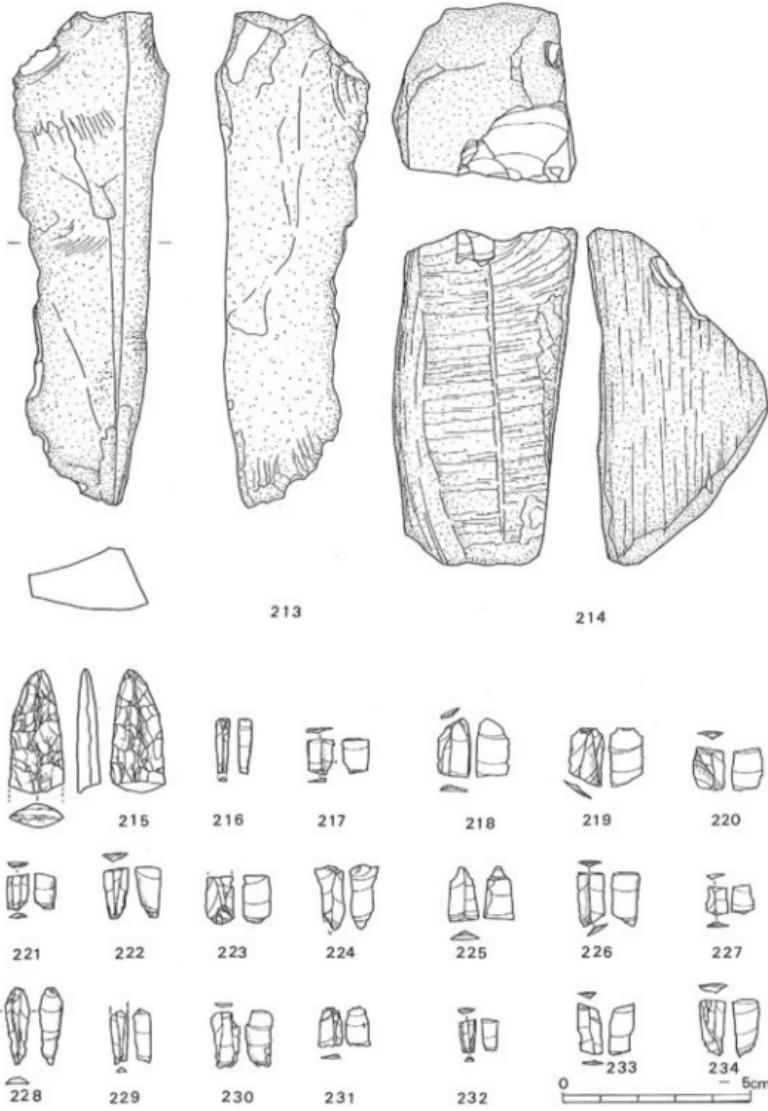


Fig. 61 その他の石器

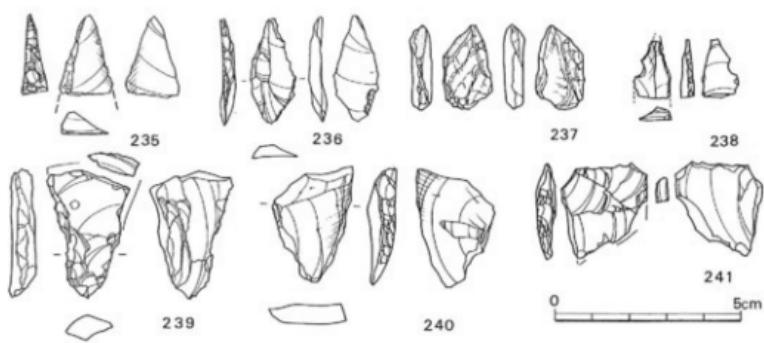


Fig. 62 B 地点表土出土の石器

PL. 15



石核出土状況

A地点のナイフ形石器遺存状態 (Fig. 63)

A地点からは、ナイフ形石器46点、台形石器1点が出土しているが、上層の堆積状況は3層下部にある安山岩疊により、かなりの搅乱状態にある。このため、縄文時代の遺物がかなり混入し、垂直分布においては、その新旧関係を判断することは困難な状況下にあるため、ここでは平面分布による出土状況を示して見た。本遺跡のように土層堆積が極めて薄く、上下・新旧関係を掴めない状況においても、平面分布におけるブロックの核は、いくらか捉えることができるものと考えるからである。従ってここにおいては、ブロック内のナイフ形石器の中から形態、技術の両面においての共通性を掴むことを目的とするものであり、その時間的な同一性あるいは相異については、今後の研究に待たねばならない点が多いことをふまえて、遺存状態を考えていくことにする。先に述べたようにA地点からは46点のナイフ形石器が出土しているが、その出土状況は、北東側に集中する傾向を見せてている。これをブロックとして取り扱うには問題があるが、石核の出土などから考えると、なんらかのブロックの核がそこにあったものと推定される。A地点では北東側にしか、このような集中区は見られず、他は散漫的に出土している状況にある。その集中区でのナイフ形石器の一つの特徴として目を引くのは、器体中央部に最大幅を持つ、68・72・73・76・77などのナイフ形石器で、他のナイフ形石器に比べ、厚みにおいても相違を持ち、刃部長も相対的に短くなるもので、この遺跡において比較的特徴のあるナイフ形石器として捉えられる。

PL. 16



ナイフ形石器出土状況

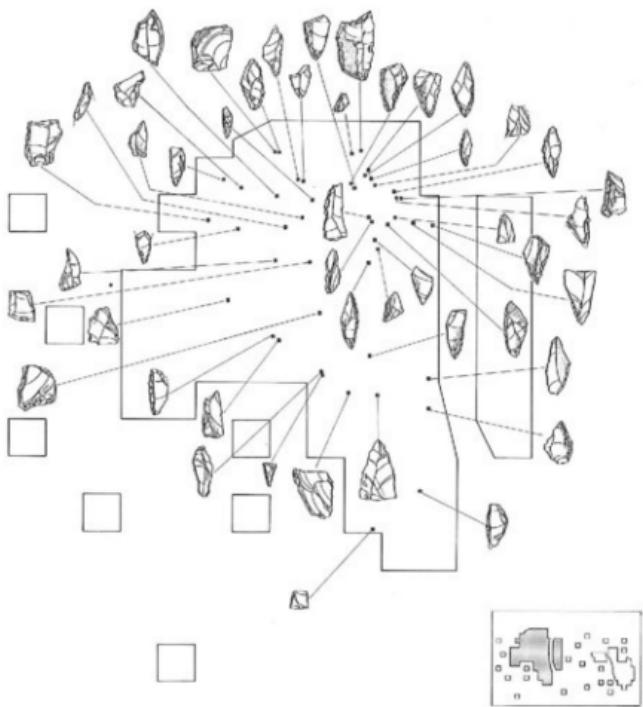
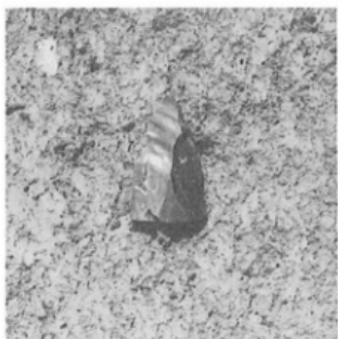


Fig. 63 A地点ナイフ形石器平面分布図

PL. 17



ナイフ形石器出土状況

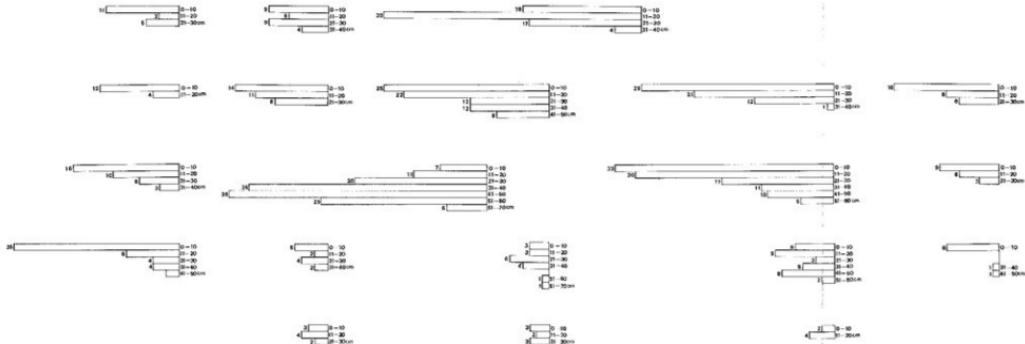


Fig. 64 B地点深度別遺物出土 (10cmカット)

B地点の遺物遺存状態 (Fig. 65, 66)

B地点は台地東側傾斜面部分にあたり、土層自体もかなりの傾斜を持って堆積している。土層は1~4層まで確認され、包含層は2層の赤褐色安山岩風化土層中にある。A地点での土層堆積状況よりも包含層の堆積は厚く、安定した堆積状況を示しているが、いくらかの傾斜角を持つため遺物自体の動きが考えられ、本来の原位置とはかなり様相を異にするものと思われる。傾斜にそった遺物の流れが想定されよう。B地点の調査は傾斜にあわせ5cmカットで発掘を行い、それをもとに10cmの深度で遺物の出土数をあらわした。(Fig. 64)

G-30・I-29区については、5cm掘りを行っていなかったため、グラフとして表われていないが、他のものについては、I-28区を除く多くのグリッドで10~20cmの間にピークをもち、深度が深くなるにつれ、減少する傾向があるとみてよいであろう。これに対し、I-28区については20~60cmの間に遺物出土のピークが見られ、その遺物出土数も集中しており、垂直分布からも遺物が堅く堆積している状況が伺える。これについては旧地形面がI-28区において、いくらかの接部を呈し、そこに遺物が集中したと考えられる。また、その接部において一つのブロックを形成したと考えられないこともない。

このような状況からB地点における遺物の有り方は、赤褐色風化土層中の上部10~20cmの間に生活面があったことを想定させる。しかし、このような中にあって178の石核は、2層下部、3層上面において出土したもので当遺跡の遺物の中で最下部から出土したもので、上部遺物群との間に時間差があるか否か問題を提起するものの一つであり、この点については遺物の頂で扱っていくことにする。

平面分布においては調査時から灰青色黒曜石の集中がI-28区を中心としてブロックが形成されるのではないか、あるいは漆黒色黒曜石を使用する石器群との間に時間差が見い出されるのではないかとの仮説の中で、灰青色黒曜石の平面分布と漆黒色黒曜石だけの平面分布を作成してみた。灰青色黒曜石の分布の中では先述したごとく、I-28区における遺物の集中が見られ、遺物自体、179、181などのような石核調整用の大型剝片などが出土し、接合関係などもみられるなど、よりプライマリーに近い状況を呈しているのではないかとの見方ができる。しかし、先述したごとくB地点は傾斜がかなり強く、遺物の流れが予想され、そのことを示すかのように接合関係も、その傾斜と同様に、西側と東側との間に成立している。I-28区は垂直分布、あるいは深度別遺物出土表などから、旧地形、小さな溝地を呈していたと予想され、そこに遺物がたまつたものとしても捉えられる。又、I-30区においても遺物集中区が認められ、灰青色黒曜石の分布の中では2つの集中区がある。この関係についてはその接合関係などからも同一時期内として捉えられるものであろう。漆黒色黒曜石の分布については、かなり散在的で、そこに集中区を認める事はできない状態にあるが、灰青色黒曜石の分布に比べ、北側に多くのナイフ形石器、剝片類を認める事ができる。

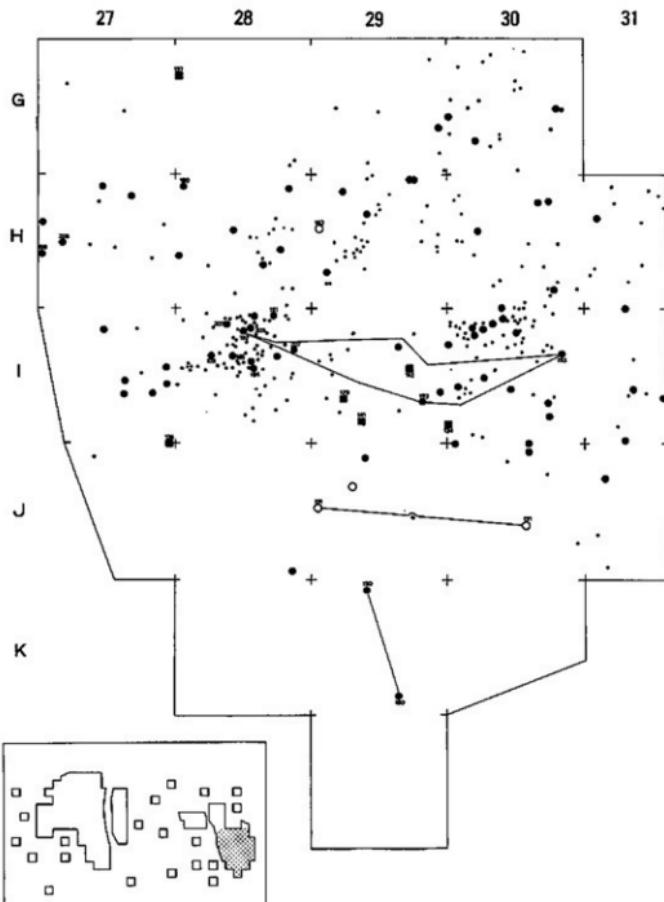


Fig. 65 B 地点遺物依存状況図 (灰青色黒曜石)

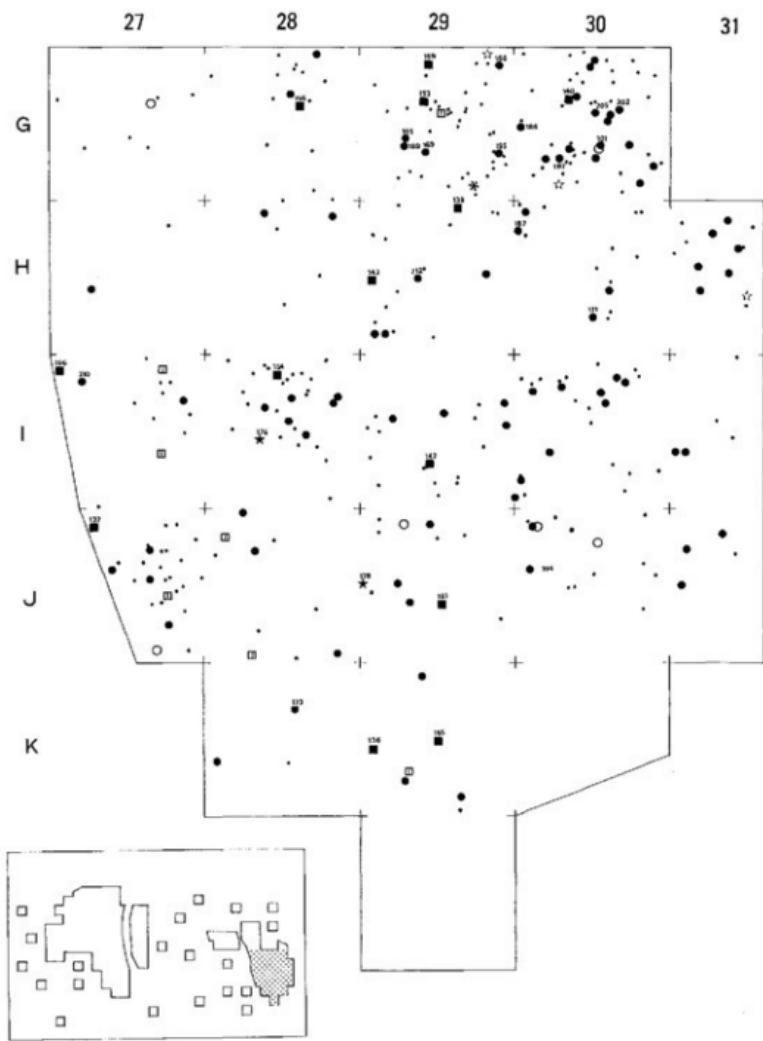


Fig. 66 B 地点遺物依存状況図 (漆黒色黒曜石)

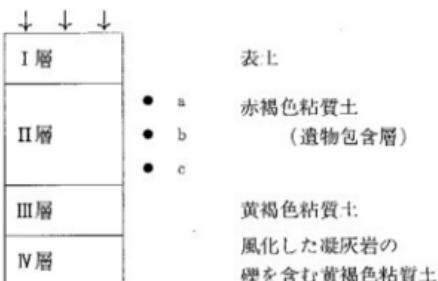
IV 上原遺跡試料花粉分析結果報告

1 試料

試料は上原遺跡のB地点II層（遺物包含層）から採取したものである。試料の名称・土質についてTab. 7に示す。

Tab. 7 試料表

試料名	採取層	土質
a	II	赤褐色粘土
b	II	赤褐色粘土
c	II	赤褐色粘土



試料採取地点模式土層柱状図

2 分析方法

花粉分析の方法は下記の手順で行なった。

試料約15g秤量（湿重）—HF処理—重液分離—アセトトリル処理—KOH処理—封入—検鏡。
封入は残渣が少なかったので全量を用いた。検鏡はプレパラートの全面を走査し、出現した
全ての花粉・胞子を同定した。

3 分析結果および考察

花粉分析の結果は、Tab. 9に同定した花粉・胞子化石の個体数で表示した。

Tab. 9にみられるように、いずれの試料においても花粉化石の産出が非常に少なかった。
主な花粉をあげるとアカガシ亜属・コナラ亜属・スギ属・ハイノキ属・ヨモギ属・イネ科等で
ある。アカガシ亜属は照葉樹であることからII層の堆積した時代は温暖な気候であったと考え
られる。花粉化石の保存状態は非常に悪く、膜がうすくなっているものが多かったこと、花粉
化石の産出が少なかったこと、下位試料になるにつれて花粉化石の産出が少なくなる傾向がみ
られることなどから、花粉が堆積後に分解作用を強く受けたものと考えられる。このような試
料は検出花粉の組成が片寄るため、古植生を述べるには十分な試料とはいえない。したがって、
古植生について述べることは差控えたい。

なお、この他に少數であったが、ヤマモモ層(a)・ハシバミ属(b)・シイノキ層(a)・モチノキ属(a)・ブドウ属(b)・イギクノキ属(b)・サカキカヅラ属(a)等の樹木花粉、イネ科の他の草本類ではスゲ科(a・c)・ゾバ属(a)・トウダイグサ属(a)・アリノトウグサ属(a)・セリ属(b)等が僅かに産出する。

1 試料

試料は上原遺跡A地点のG-12区、B-11区より出土した4点である。各試料の番号・土質についてはTab. 8にまとめた。

Tab. 8 上原遺跡の花粉分析試料と土質

遺跡名	試 料	土 質
上 原	G-12 II b	明黄褐色砂質シルト質粘土
"	G-12 II b	橙色 " " "
"	B-11 南西ビット	明褐色砂質粘土質シルト
"	G-12 II f	明褐色シルト質粘土

2 分析方法

花粉分析の方法は下記の手順で行なった。試料約20g秤量(湿重)→H F処理→重液分離→アセトリシス処理→K OH処理→封入→検鏡。

封入は分析後の残渣が非常に少なかったので残渣全部を封入し、検鏡はプレパラートの全面を走査した。

3 分析結果

花粉分析の結果は各試料について同定した分類群の個体数で表示し、Tab. 10にまとめた。Tab. 10においてハイフォンで結ばれた分類群は両者間の識別が困難なものである。

このたび分析を行った試料はいづれも花粉・胞子化石の含有が非常に少なく、産出した化石は分解を受けて膜が薄くなっているもの多かった。したがって、各試料共に花粉・胞子化石が解析に十分な数を同定できなかった。また、このように分解を受けている試料は花粉組成が比較的分解しにくい花粉に片寄る傾向にあるので古環境を解析するには十分とはいえない。しかし、このたびの分析結果(Tab. 10)をみると固定した花粉組成に特徴があるので、若干の考察を以下に述べる。

各試料ともにスギ属とアカガシ亜属が産出し、とくに、G-12 II fにおいてアカガシ亜属

の産出は非常に多い。また、G-2のII bとG-12 II fにおいてサカキカズラ属が産出している。アカガシ亜属は照葉樹林を形成する樹木類から成るものとして重要であり、サカキカズラ属はアジア東部・南部の熱帯から暖帯に広く分布し、関東南部以西・四国・九州の林中にはえる常緑のつる性の木である。これらのことから、各試料の堆積した当時は、照葉樹林の形成が可能な温暖な気候であったと考えられる。しかし、上原遺跡のG-12 II f 試料の堆積層は無文土器や先土器時代の遺物も出土することなので、完新世初頭の堆積物と考えられるが、アカガシ亜属の優占は時代的に調和的でなく、もう少し後の縄文時代早期後半～前期にかけての堆積物とも考えられる。

Tab. 9 上原遺跡試料 花粉分析結果

試 料 名	a	b	c
花粉・孢子化石名			
<i>Cryptomeria</i>	4	3	
AP-1	4	3	0
<i>Myrica</i>	1		
<i>Corylus</i>		1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	11	1	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	15	5	1
<i>Castanopsis</i>	2		
<i>Ilex</i>	2		
<i>Vitis</i>		1	
<i>Symplocos</i>	4	1	
<i>Ligustrum</i>		1	
<i>Anodendron</i>	1		
AP-2	36	10	3
AP	40	13	3
Gramineae	11	1	
Cyperaceae	1		1
<i>Fagopyrum</i>	4		
<i>Euphorbia</i>	1		
<i>Halorugis</i>	1		
Umbelliferae		2	
<i>Artemisia</i>	26	4	1
Cichorioideac	1		
NAP	45	7	2
Trizonocolporate pollen	25	9	
FP	25	9	0
<i>Lycopodium</i>	1		
Monolete spore		1	
FS	1	1	0
Total Number	111	30	5
Pseudoschizaea	1		

Tab. 10 上原遺跡試料花粉分析結果

花粉・孢子化石名	遺跡名及び試料名	上原 G-12II b	上原 G-12II h	ピット内 B-II	上原 G-12II f
<i>Podocarpus</i>		1			1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		5	2	1	
<i>Cryptomeria</i>		4	14	1	5
T. — C.		5		1	2
AP — I		14	17	3	8
<i>Myrica</i>					1
<i>Carpinus</i> <i>Ostrya</i>		4		1	2
<i>Corylus</i>		4			3
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		9	1		9
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		7	2	1	60
<i>Castanea</i>		1			
<i>Castanopsis</i>			2		1
<i>Ulmus</i> — <i>Zelkova</i>			1		
<i>Celtis</i> — <i>Aphananthe</i>		3			
<i>Acer</i>		1			
<i>Symplocos</i>		4			7
<i>Ligustrum</i>		3			
<i>Viburnum</i>		2			
<i>Lonicera</i>					1
<i>Anodendron</i> サカキカズラ属		7			4
AP — 2		45	6	2	88
AP		59	23	5	96
Gramineae		10	6	1	1
Cyperaceae		2	3	1	2
Moraceae		1			
Chenopodiaceae		6	5		
Caryophyllaceae		2	2		
Ranunculaceae		4			5
<i>Halaraxis</i>			1		
<i>Cuscuta</i>			1		1
<i>Patrinia</i>		1			
<i>Actinostemma</i>					1
<i>Artemisia</i>		4	1		2
Carduoideae		2			1
Cichorioideae		2			1
NAP		34	19	2	14
Trizonocolpate pollen		1			
Trizonocolporate pollen		19	3	1	19
FP		20	3	1	19
<i>Lycopodium</i>		3			
<i>Pteris</i>		2			1
Monolete spore		31	9	5	15
Trilete spore		6	13	1	7
FS		42	22	6	23
Total Number of Pollen and Spores		155	67	14	152
Pseudoschizaea		1	1		

Tab. 11 検出花粉・胞子化石名一覧表

検出花粉・胞子化石名(学名)	和 名
AP-1 (針葉樹花粉)	
<i>Ginkgo</i>	イチョウ属
<i>Podocarpus</i>	マキ属
<i>Abies</i>	モミ属
<i>Tsuga sieboldii</i>	ツガ
<i>Tsuga diversifolia</i>	コメツガ
<i>Tsuga</i>	ツガ属
<i>Picea</i>	トウヒ属
<i>Pseudotsuga</i>	トガサワラ属
<i>Larix</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	ゴヨウマツ亚属
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	ニヨウマツ亜属
<i>Pinus</i>	マツ属
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属
<i>Cryphomeria</i>	スギ属
T. C.	イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科
<i>Ephedra</i>	マオウ属
<i>Metasequoia</i>	メタセコイア属
<i>Sequoia</i>	セコイア属
Taxodiaceae	スギ科
<i>Dacrydium</i>	リムノキ属
AP-2 (広葉樹花粉)	
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属
<i>Juglans</i>	クルミ属
<i>Pterocarya</i>	サワグルミ属
<i>Platycarya</i>	ノグルミ属
<i>Carya</i>	ペカン属
<i>Salix</i>	ヤナギ属
<i>Aibus</i>	ハンノキ属
<i>Betula</i>	カバノキ属
<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシテ属—アサダ属
<i>Corylus</i>	ハシバミ属
<i>Castanea</i>	クリ属
<i>Castanopsis</i>	シイノキ属
<i>Fagus</i>	ブナ属
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ亜属
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	アカガシ亜属
<i>Aphananthe</i>	ムクノキ属
<i>Celtis</i>	エノキ属
<i>Ulmus</i>	ニレ属
<i>Zelkova</i>	ケヤキ属
Moraceae	クワ科
<i>Viscum</i>	ヤドリギ属
Magnoliaceae	モクレン科
<i>Illicium</i>	シキミ属
<i>Euptelea</i>	フサザクラ属

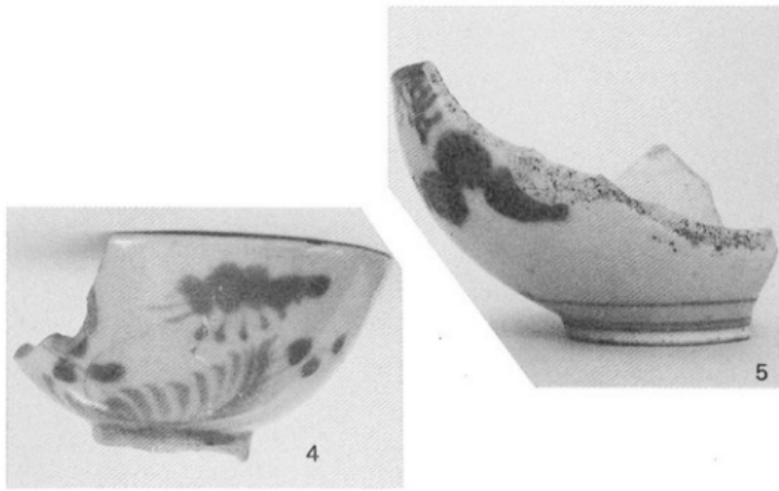
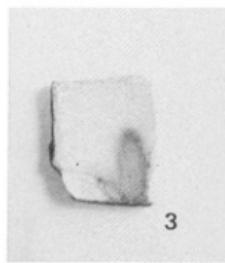
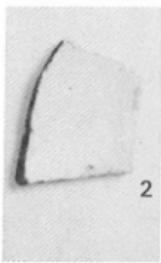
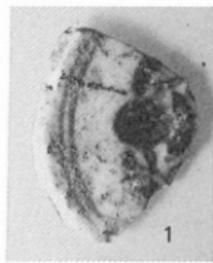
<i>Nandina</i>	ナンテン属
<i>Akebia</i>	アケビ属
<i>Cercidiphyllum</i>	カツラ属
Theaceae	ツバキ科
<i>Camellia</i>	ツバキ属
Hamamelidaceae	マンサク科
<i>Hamamelis</i>	マンサク属
<i>Corylopsis</i>	トサミズキ属
<i>Saxifraga</i>	ユキノシタ属
Rosaceae	バラ科
<i>Prunus</i>	サクラ属
<i>Daphniphyllum</i>	ユズリハ属
Leguminosae	マメ科
<i>Albizia</i>	ネムノキ属
<i>Sapium</i>	シラキ属
<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属
<i>Fagara</i>	イヌサンショウ属
<i>Phellodendron</i>	キハダ属
<i>Melia</i>	センダン属
<i>Orixa</i>	コクサギ属
<i>Skimmia</i>	ミヤマシキミ属
<i>Rhus</i>	ウルシ属
<i>Acer</i>	カエデ属
<i>Aesculus</i>	トナノキ属
<i>Ilex</i>	モチノキ属
<i>Euonymus</i>	ニシキギ属
<i>Buxus</i>	ツゲ属
<i>Vitis</i>	ブドウ属
Parthenocissus	ツタ属
Rhamnaceae	クロウメモドキ科
<i>Tilia</i>	シナノキ属
Malvaceae	アオイ科
<i>Elaeagnus</i>	グミ属
<i>Coronilla</i>	ミズキ属
<i>Clethra</i>	リョウブ属
<i>Aucuba</i>	アオキ属
Araliaceae	ウコギ科
Ericaceae	ツツジ科
<i>Diospyros</i>	カキ属
<i>Styrax</i>	エゴノキ属
Oleaceae	モクセイ科
<i>Osmunthus</i>	ヒイラギ属
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属
<i>Ligustrum</i>	イボタノキ属
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属
<i>Trachelospermum</i>	ティカカズラ属
<i>Clerodendron</i>	クサギ属
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属
<i>Weigela</i>	タニウツギ属

<i>Abelia</i>	ツクバネウツギ属
<i>Liquidambar</i>	フウ属
<i>Illicium</i>	シキミ属
<i>Nyssa</i>	ヌマミズキ属
NAP (草本花粉)	
<i>Humulus</i>	カナムグラ属
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	サナエタデ属
<i>Polygonum</i> sect. <i>Echinocaulon</i>	ウナギツカミ属
<i>Polygonum</i> sect. <i>Bistorta</i>	イブキトラノオ属
<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	イタドリ属
<i>Polygonum</i> sect. <i>Tovara</i>	ミズヒキ属
<i>Polygonum</i>	タデ属
<i>Fagopyrum</i>	ゾバ属
<i>Rumex</i>	ギシギシ属
<i>Portulaca</i>	スベリヒュ属
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科
<i>Chenopodiaceae</i>	アカザ科
<i>Nelumbo</i>	ハス属
<i>Amaranthaceae</i>	ヒユ科
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属
<i>Ranunculaceae</i>	キンポウゲ科
<i>Ranunculus</i>	キンボウゲ属
<i>Nymphaeaceae</i>	スイレン科
<i>Nymphaea</i>	スイレン属
<i>Aconitum</i>	トリカブト属
<i>Nuphar</i>	コオホネ属
<i>Euryale</i>	オニバス属
<i>Macleaya</i>	タケニグサ属
<i>Cruciferae</i>	アブラナ科
<i>Potentilla</i>	キジムシロ属
<i>Sanguisorba</i>	ワレモコウ属
<i>Rosaceae</i>	バラ科
<i>Leguminosae</i>	マメ科
<i>Azukia</i>	アズキ属
<i>Vicia</i>	ソラマメ属
<i>Dunbaria</i>	ヒメクズ属
<i>Geranium</i>	フウロソウ属
<i>Euphorbiaceae</i>	トウダイグサ科
<i>Euphorbia</i>	トウダイグサ属
<i>Polygala</i>	ヒメハギ属
<i>Impatiens</i>	ツリソネソウ属
<i>Corchoropsis</i>	カラスノゴマ属
<i>Malva</i>	ゼニアオイ属
<i>Actinostemma</i>	ゴキヅル属
<i>Campanula</i>	ホタルブクロ属
<i>Trapa</i>	ヒシ属
<i>Lythrum</i>	ミソハギ属
<i>Rolala</i>	キカシグサ属

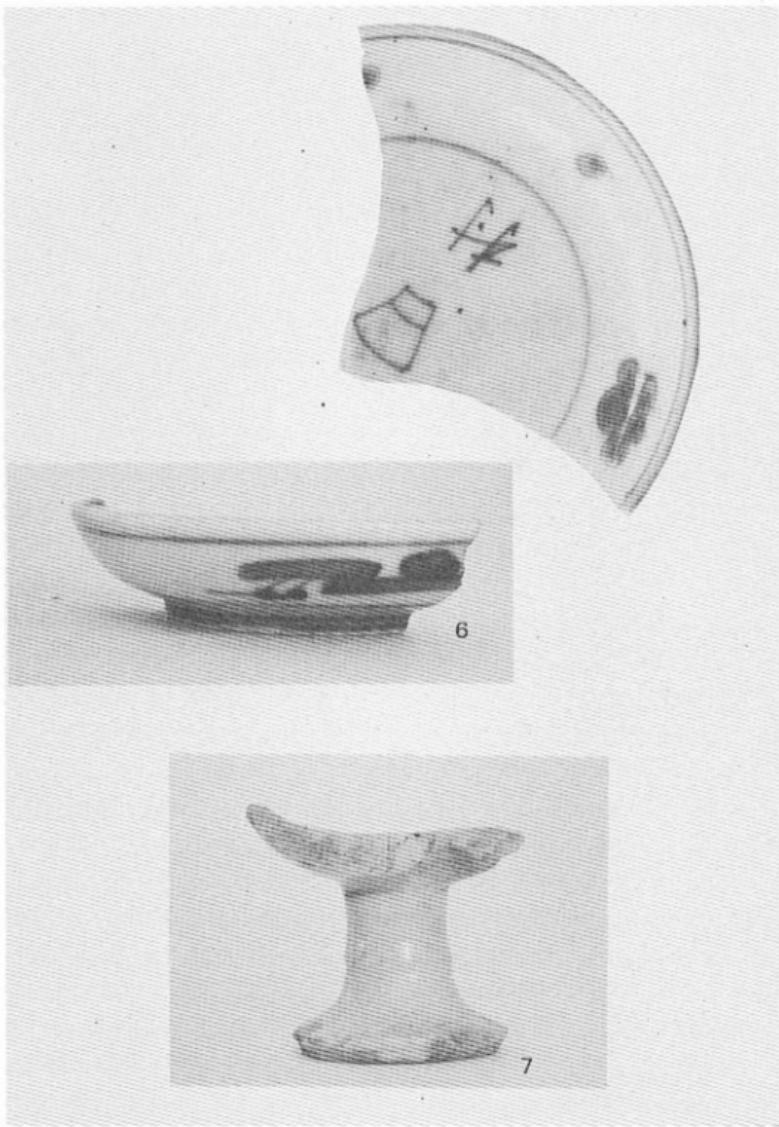
<i>Epilobium</i>	アカバナ属
<i>Ludwigia</i>	ショウジョウテ属
<i>Haloragis</i>	アリノトウグサ属
<i>Myriophyllum</i>	フサモ属
<i>Umbelliferae</i>	セリ科
<i>Paederia</i>	ヘクソカズラ属
<i>Utricularia</i>	タヌキモ属
<i>Nymphoides</i>	アサザ属
<i>Galium</i>	ヤエムグラ属
<i>Gentiana</i>	リンドウ属
<i>Monotropastrum</i>	ギンリョウソウ属
<i>Rubiaceae</i>	アカネ科
<i>Rubia</i>	アカネ属
<i>Calystegia</i>	ヒルガオ属
<i>Cuscula</i>	ネナシカズラ属
<i>Labiatae</i>	シソ科
<i>Mosla</i>	ヤマジソ属
<i>Solanum</i>	ナス属
<i>Justicia</i>	キツネノマゴ属
<i>Plantago</i>	オオバコ属
<i>Ottelia</i>	ミズオオバコ属
<i>Patrinia</i>	オミナエシ属
<i>Scabiosa</i>	マツムシソウ属
<i>Campanulaceae</i>	キキョウ科
<i>Adenophora</i>	ツリガネニンジン属
<i>Platycodon</i>	キキョウ属
<i>Carduoideae</i>	キク亜科
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属
<i>Diaspananthus</i>	クサヤツデ属
<i>Cichorioideae</i>	タンポポ亜科
<i>Xanthium</i>	オナモミ属
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属
<i>Caldesia</i>	マルバオモダカ属
<i>Hydrilla</i>	クロモ属
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属
<i>Blyxa</i>	スブタ属
<i>Potamogeton</i>	ヒルムシロ属
<i>Liliaceae</i>	ユリ科
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属
<i>Urticaceae</i>	イラクサ科
<i>Iridaceae</i>	アヤメ科
<i>Ancilema</i>	イボクサ属
<i>Eriocaulon</i>	ホシクサ属
<i>Gramineae</i>	イネ科
<i>Sparganium</i>	ミクリ属
<i>Typha</i>	ガマ属
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科
<i>Zea</i>	トウモロコシ属
<i>Polygonaceae</i>	ヒメハギ科
<i>Polemoniaceae</i>	ハナシノブ科

<i>Menyanthes</i>	ミツガシワ属
<i>Phyllanthus</i>	コミカンソウ属
<i>Gossypium</i>	ツタ属
FP (形態分類花粉)	
Inaperturate pollen	無口型花粉
Monoporate pollen	單孔型花粉
Trizonoporate pollen	三孔型花粉
Trizonocolpate pollen	三溝型花粉
Trizonocporate pollen	三溝孔壁花粉
polypantoporate pollen	多散孔型花粉
Tetrazonoporate pollen	四孔型花粉
Tetrazonocolpate pollen	四溝型花粉
Tetrazonocporate pollen	四溝孔壁花粉
FS (羊齒類胞子・形態分類胞子)	
<i>Lycopodiaceae</i>	ヒカゲノカズラ科
<i>Lycopodium</i>	ヒカゲノカズラ属
<i>Selaginellaceae</i>	イワヒバ科
<i>Ophioglossum</i>	ハナヤスリ属
<i>Osmunda</i>	ゼンマイ属
<i>Lygodium</i>	カニクサ属
<i>Hymenophyllaceae</i>	コケシノブ科
<i>Pteris</i>	イノモトソウ属
<i>Ceratopteris</i>	ミズワラビ属
<i>Polypodiaceae</i>	ウラボシ科
<i>Salvinia natans</i>	サンショウモ
<i>Isoetes</i>	ミズニラ属
<i>Marsilea</i>	デンジソウ属
<i>Azolla</i>	アカウキクサ属
Monolete spore	單条溝型胞子
Trilete spore	三条溝型胞子 和名なし
その他の微化石	
<i>Pseudoschizaca</i>	淡水生藻類
<i>Botryococcus</i>	緑藻類
<i>Dinoflagellates</i>	渦鞭藻類
<i>Pediastrum</i>	クンショウモ属

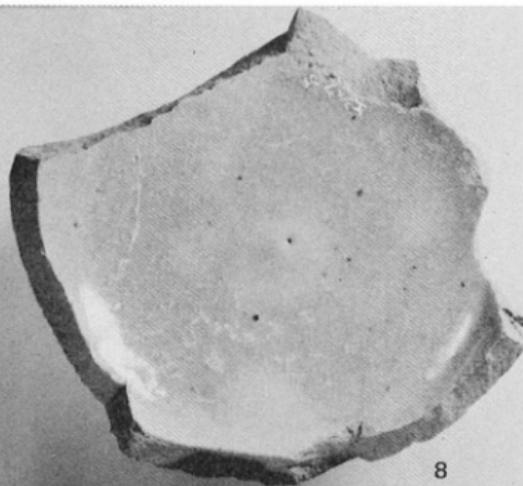
PLATE



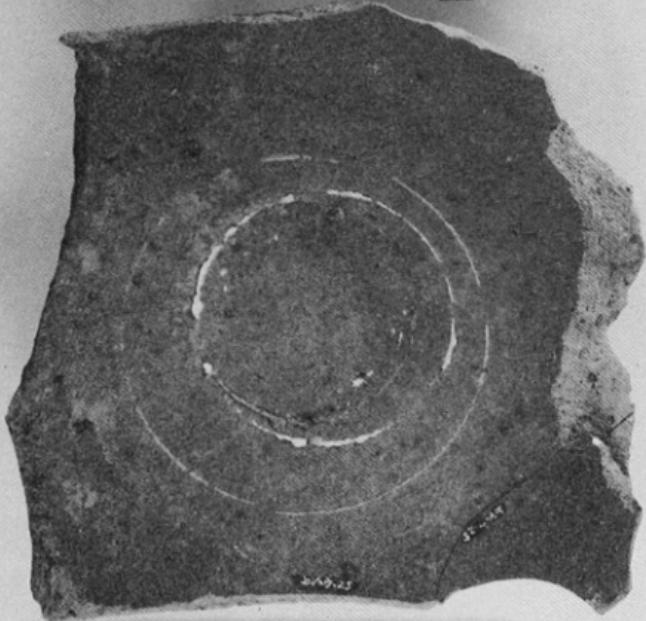
明染付，近世磁器



近世磁器

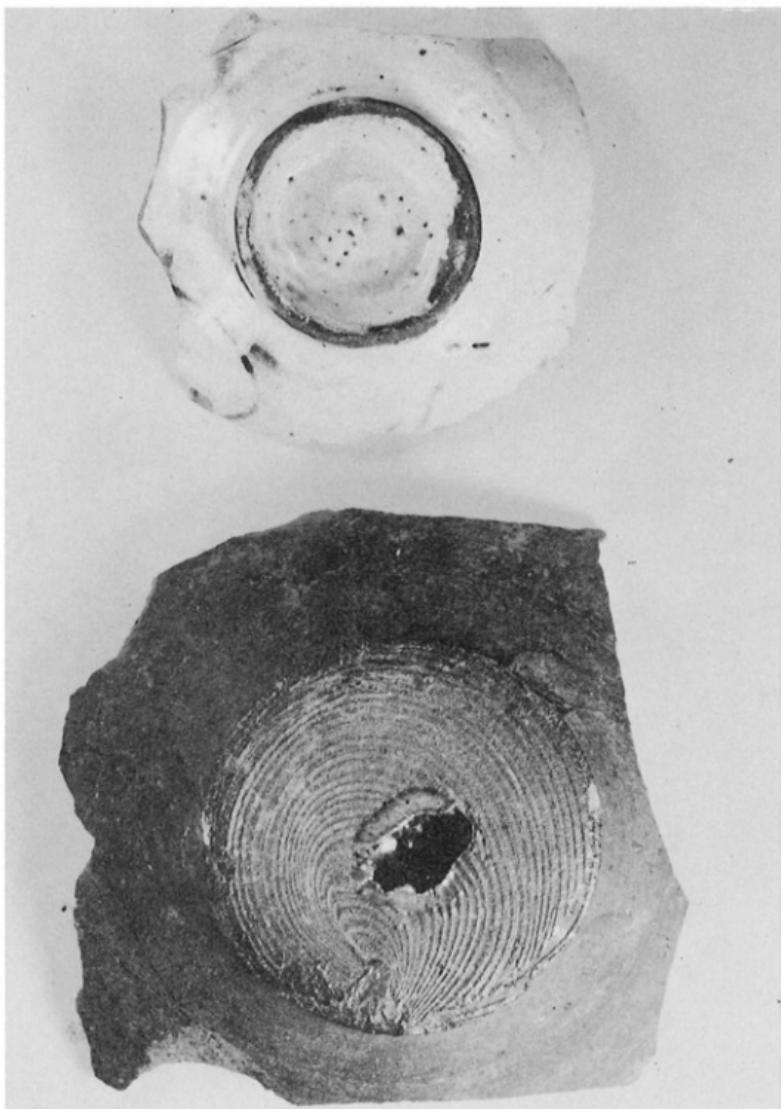


8

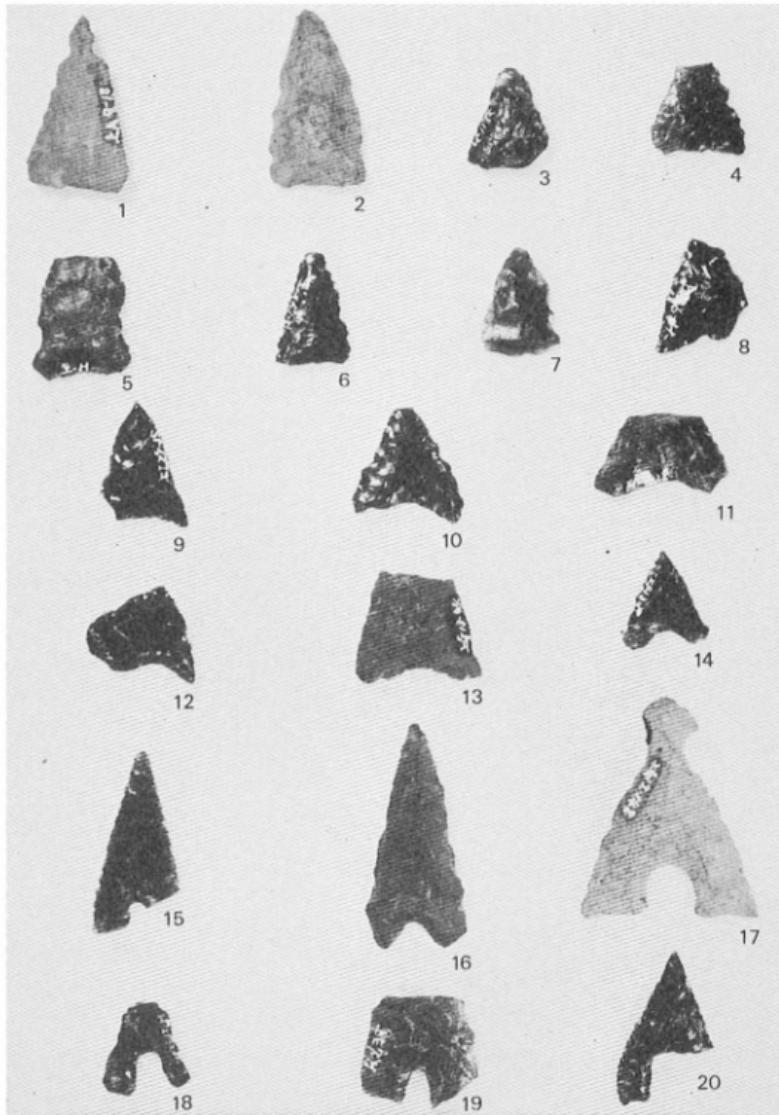


9

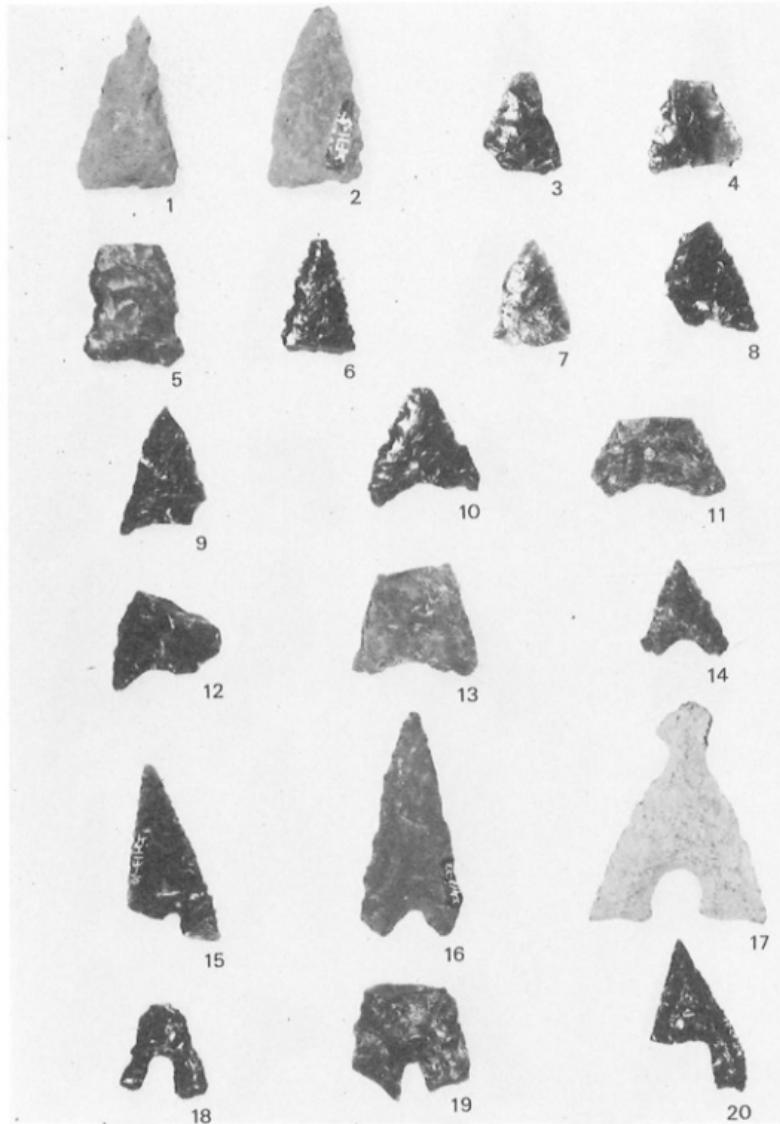
(裏)



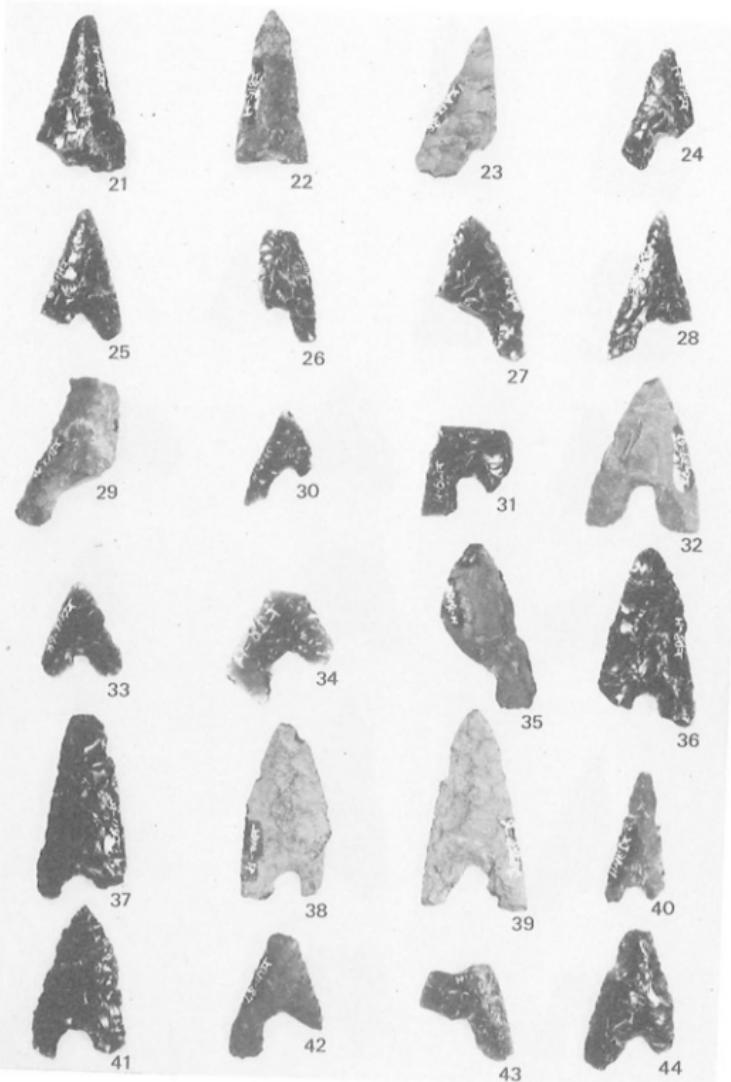
(表)



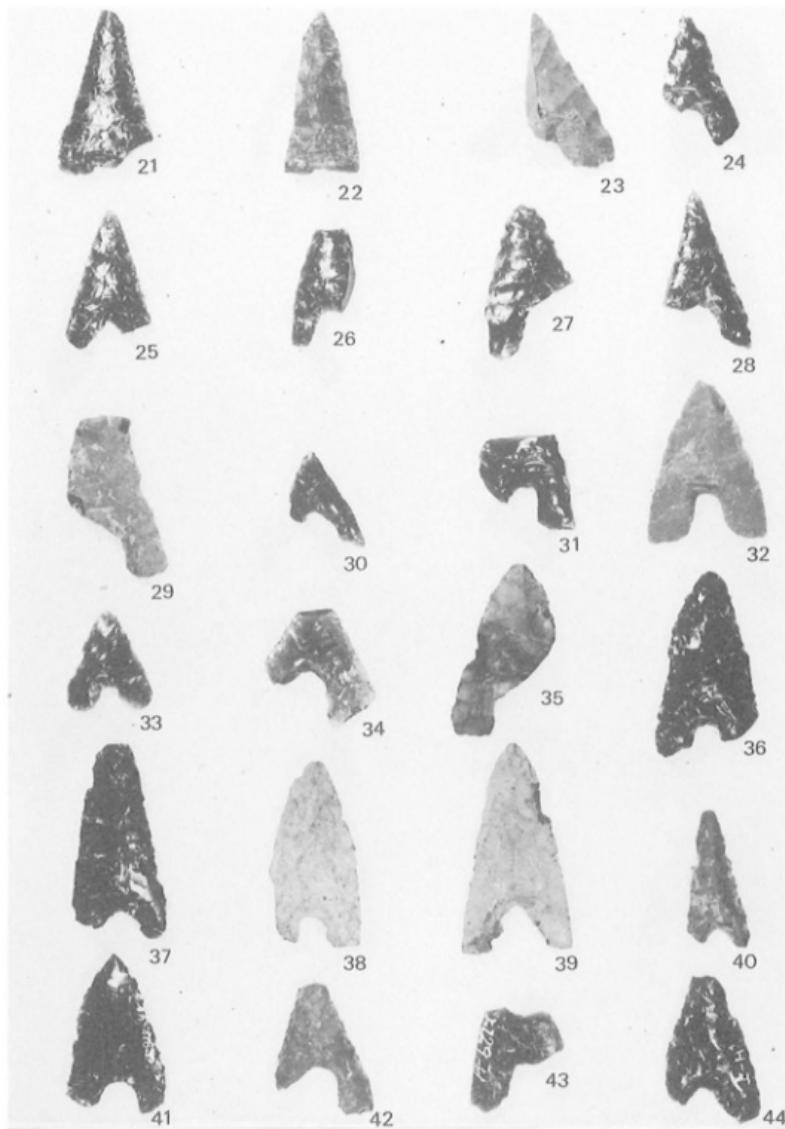
石 鏽 (表)

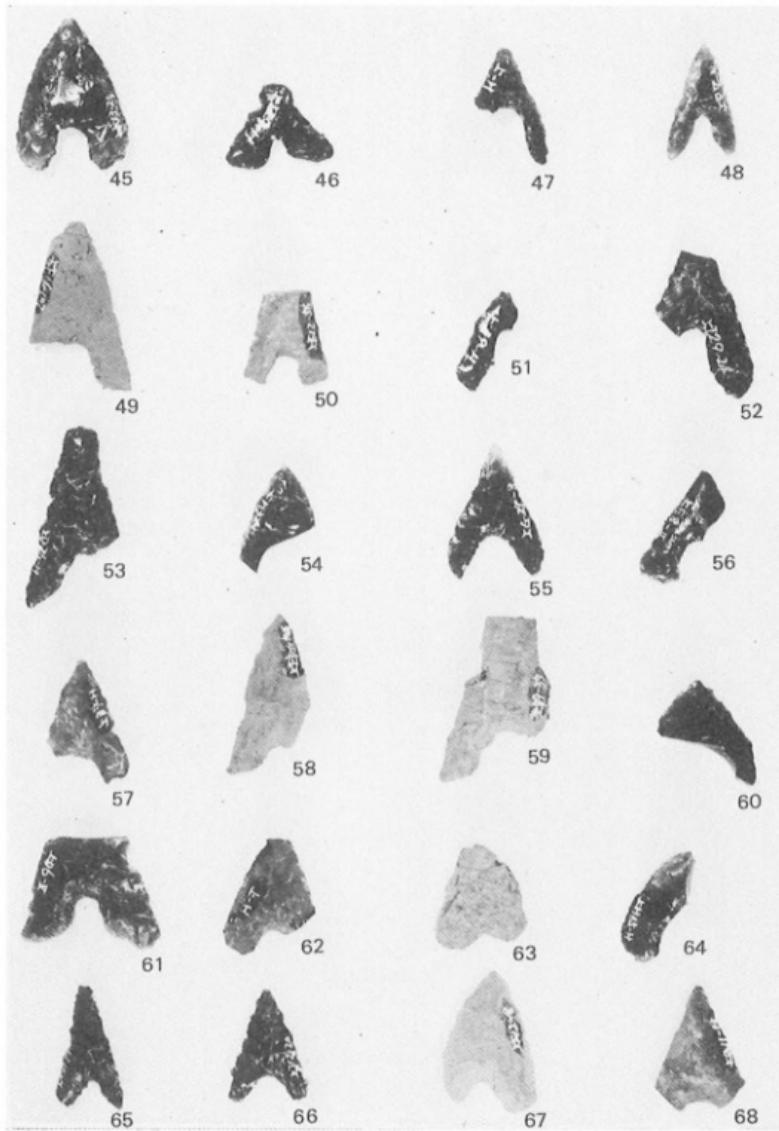


石 錐 (裏)



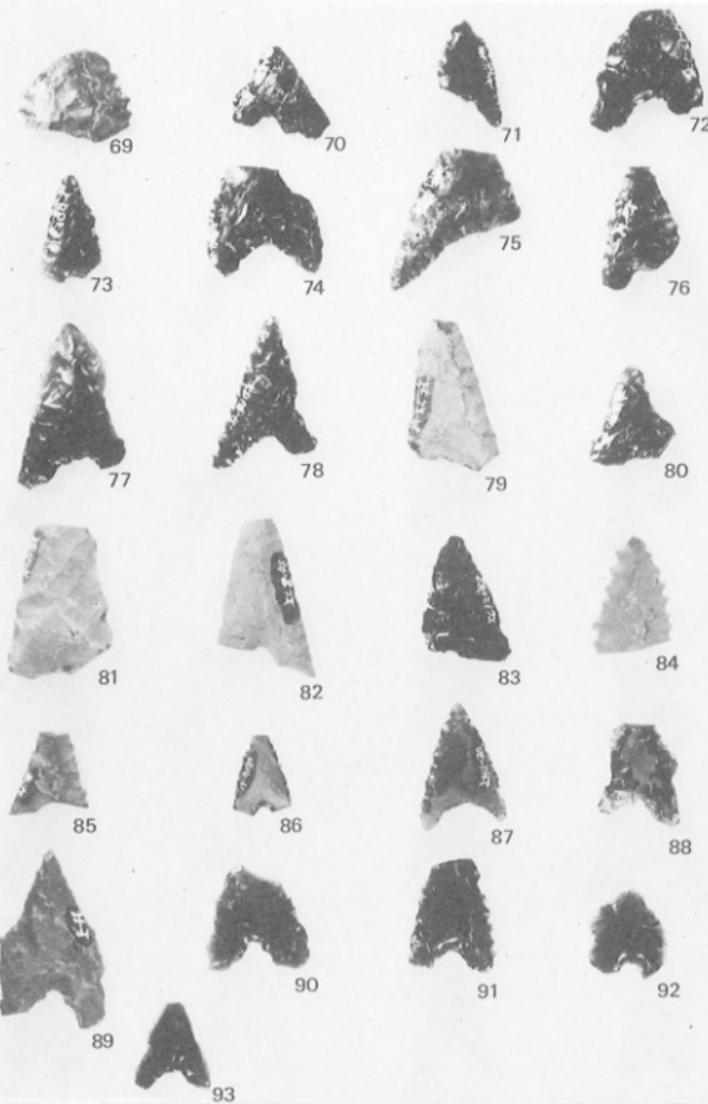
石 鑽 (表)

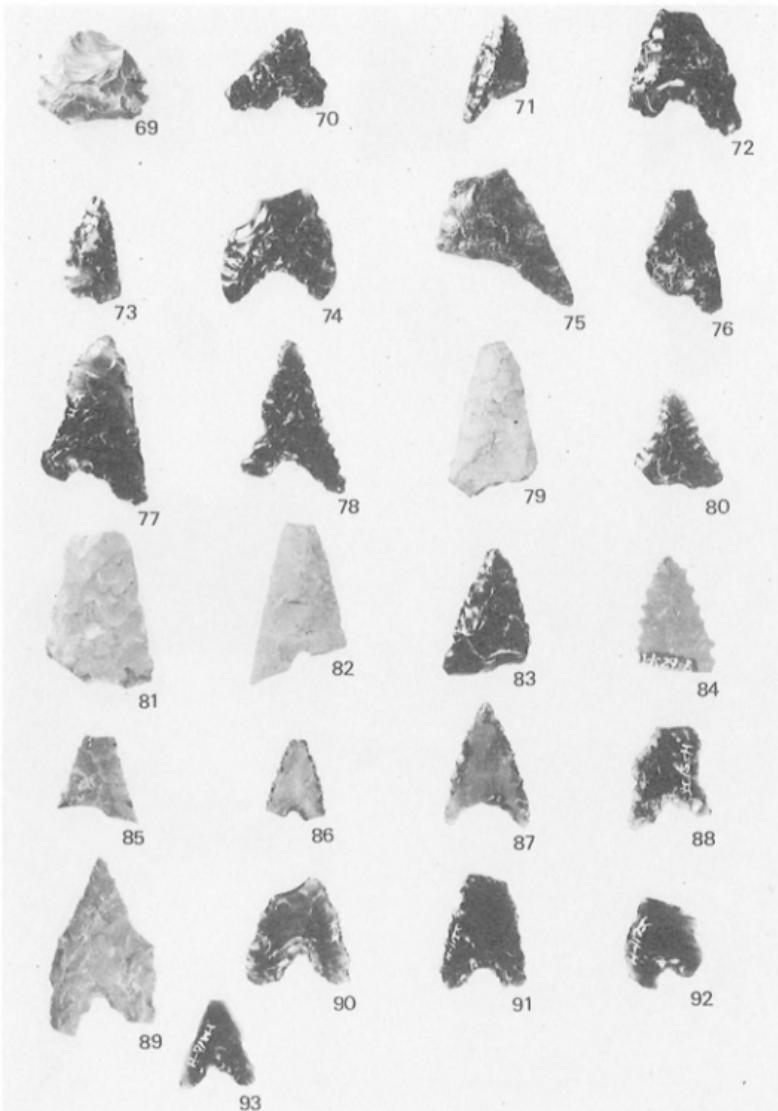




石 錐 (表)









94



95



96



97



98



99



100



101



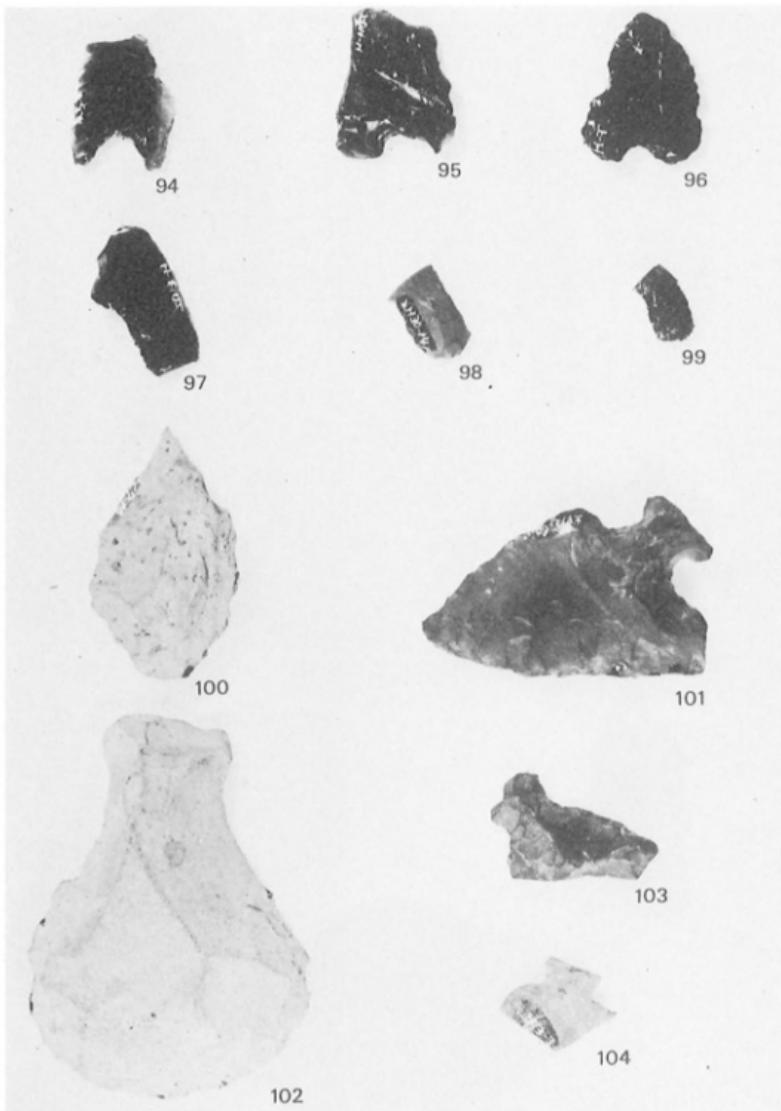
102



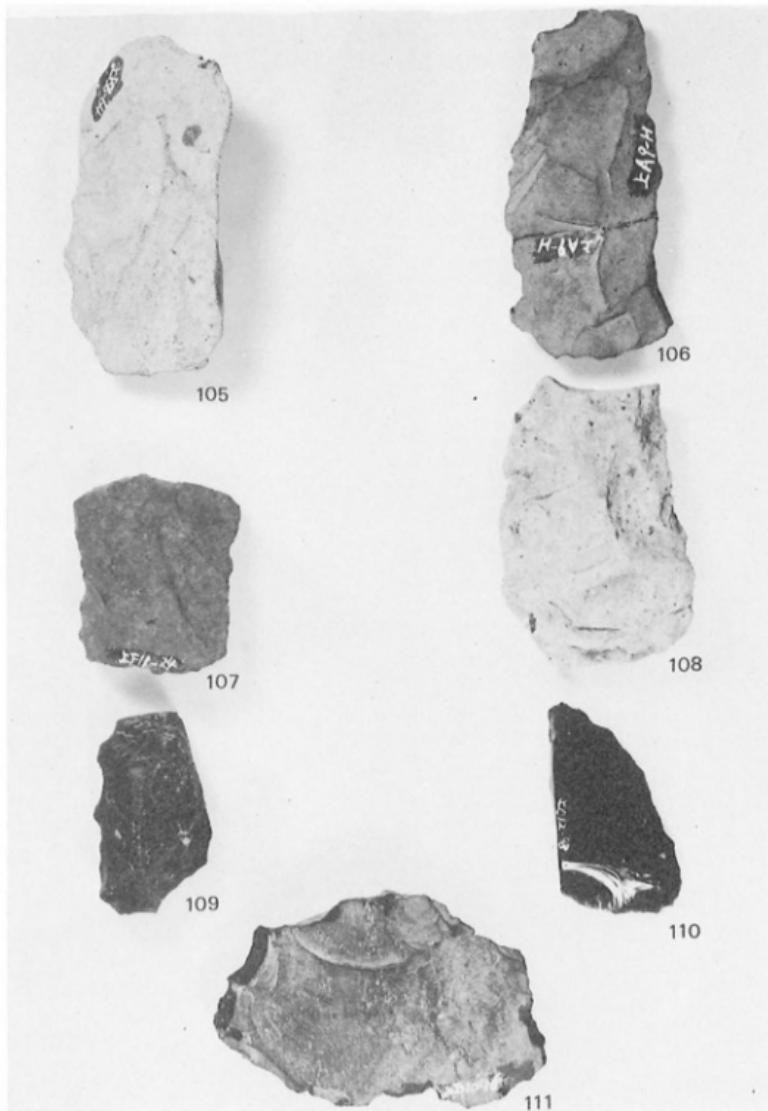
103



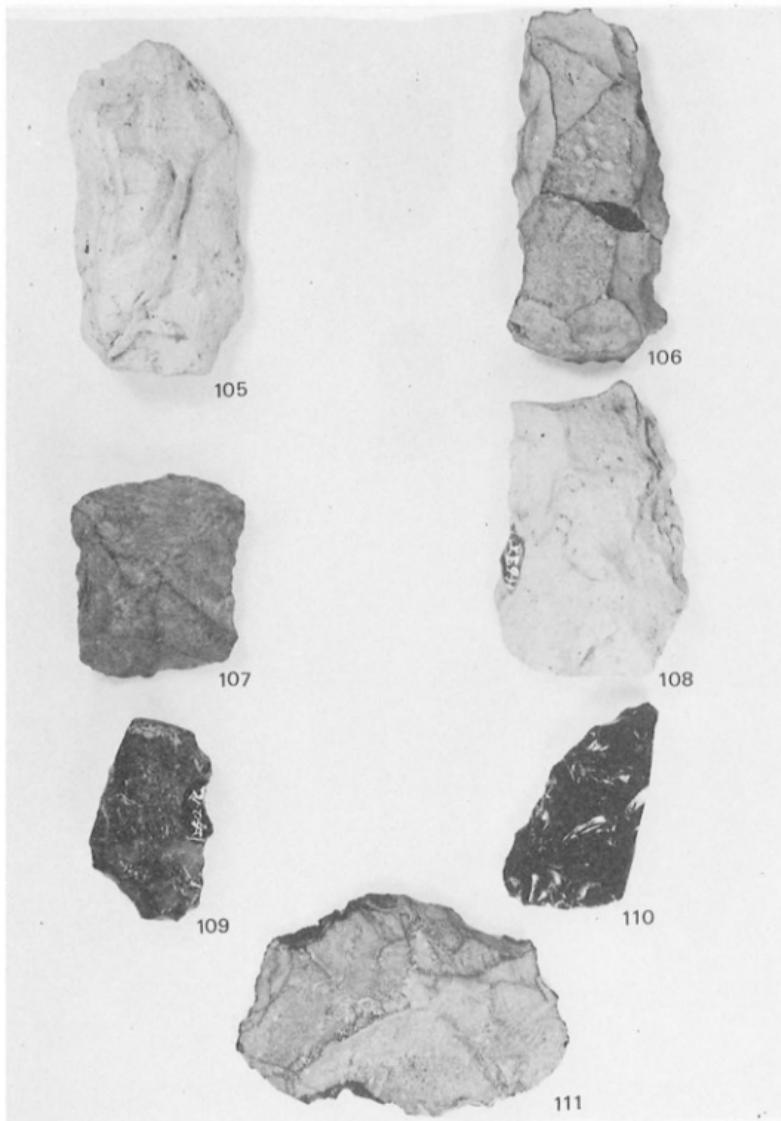
104



石鏃・ポイント・石匙（裏）



スクレイパー (表)



スクレイパー（裏）



112



113



114



115



116



117



118



119



120

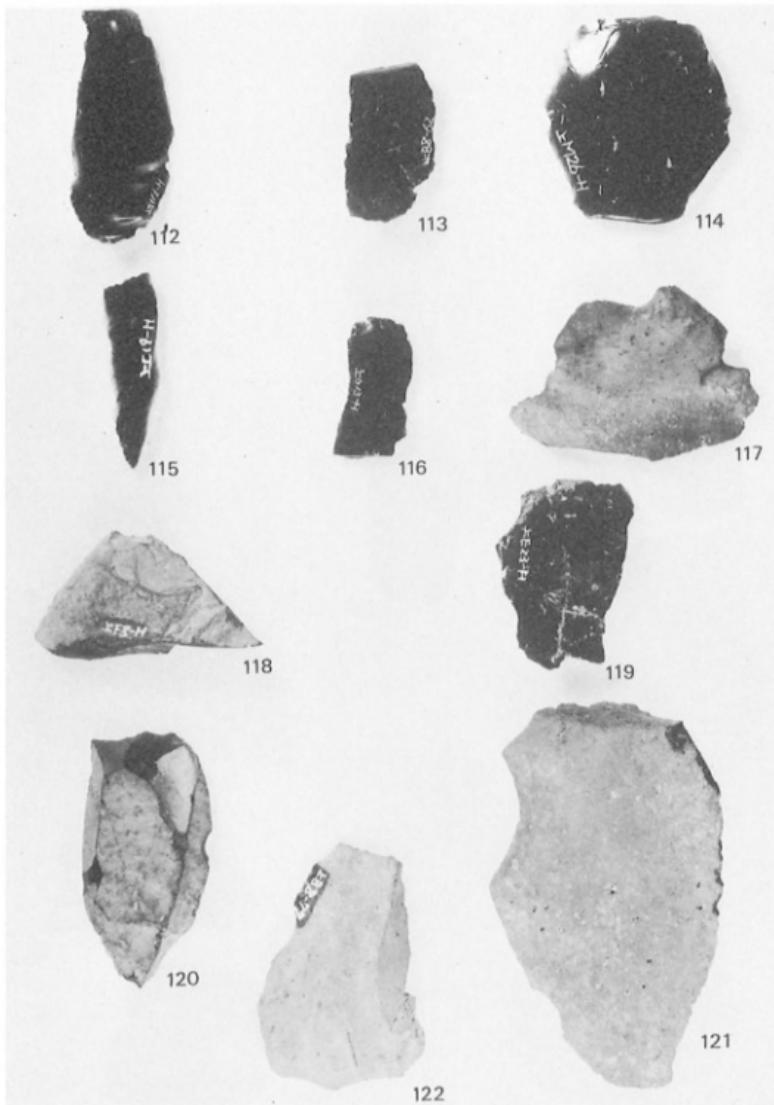


122

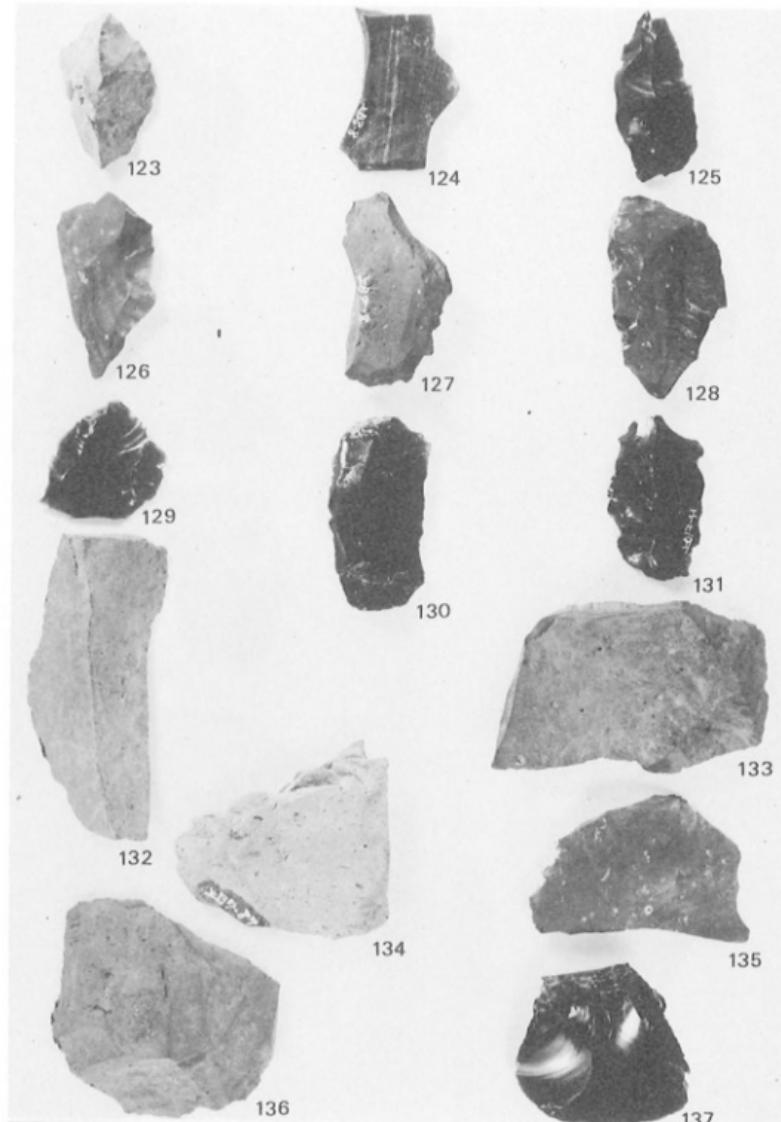


121

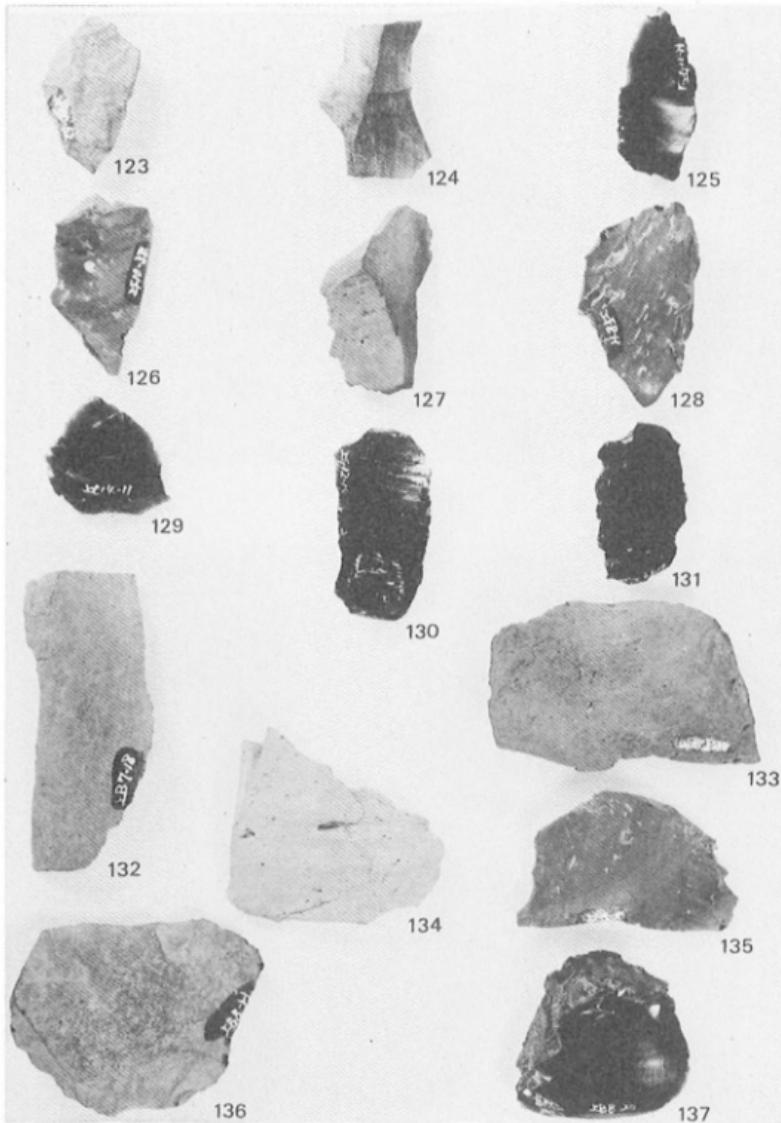
使用痕ある剥片（表）



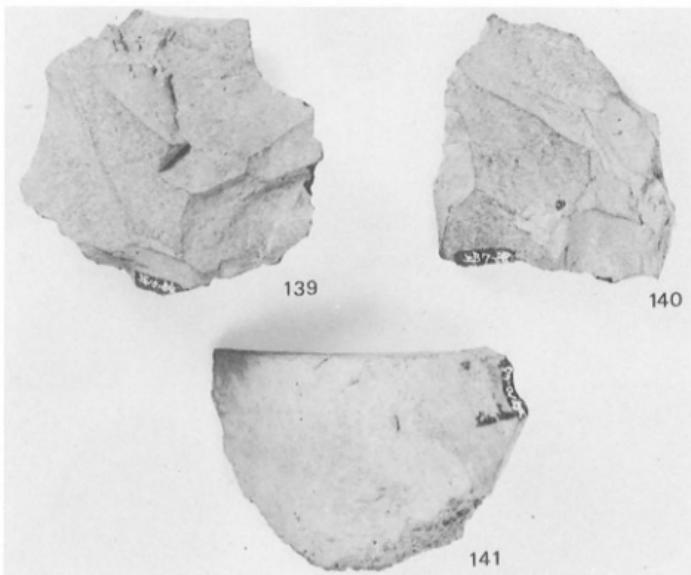
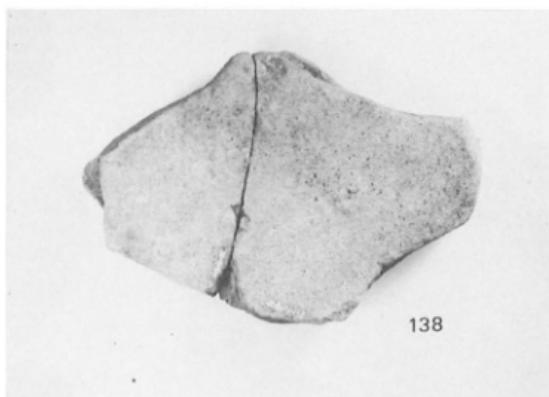
使用痕ある剝片（裏）



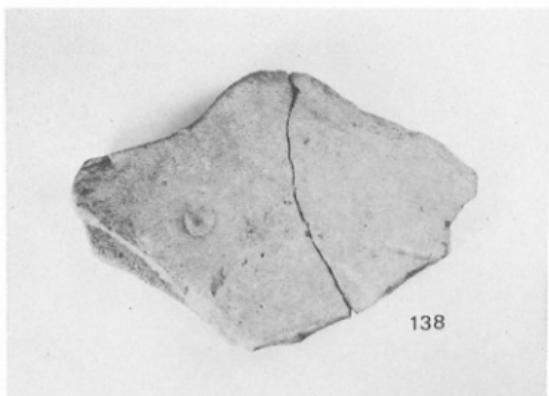
剥片(表)



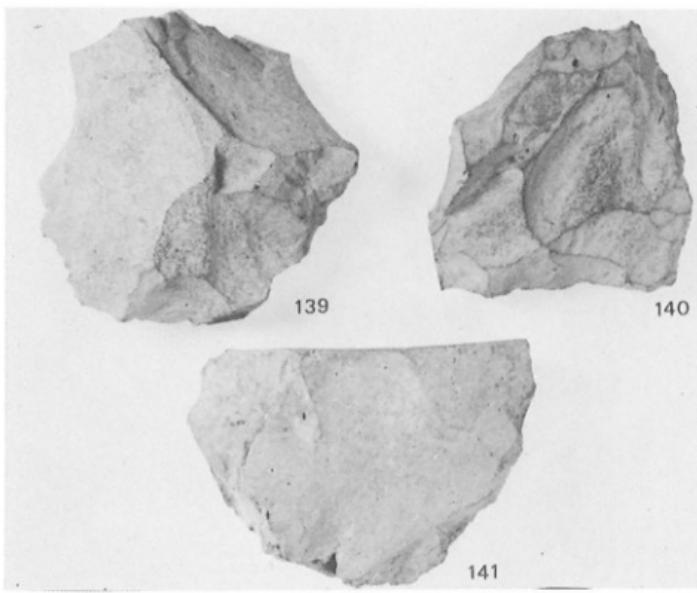
剥片 (裏)



砾石·石核(表)



138

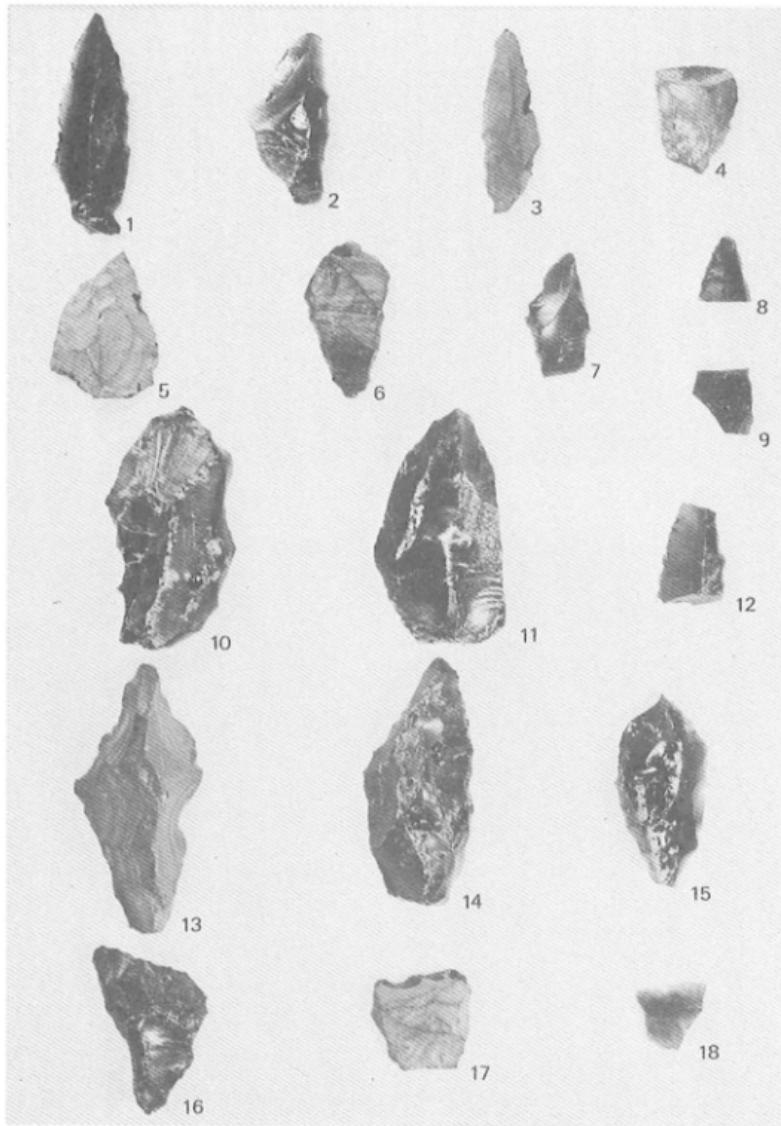


139

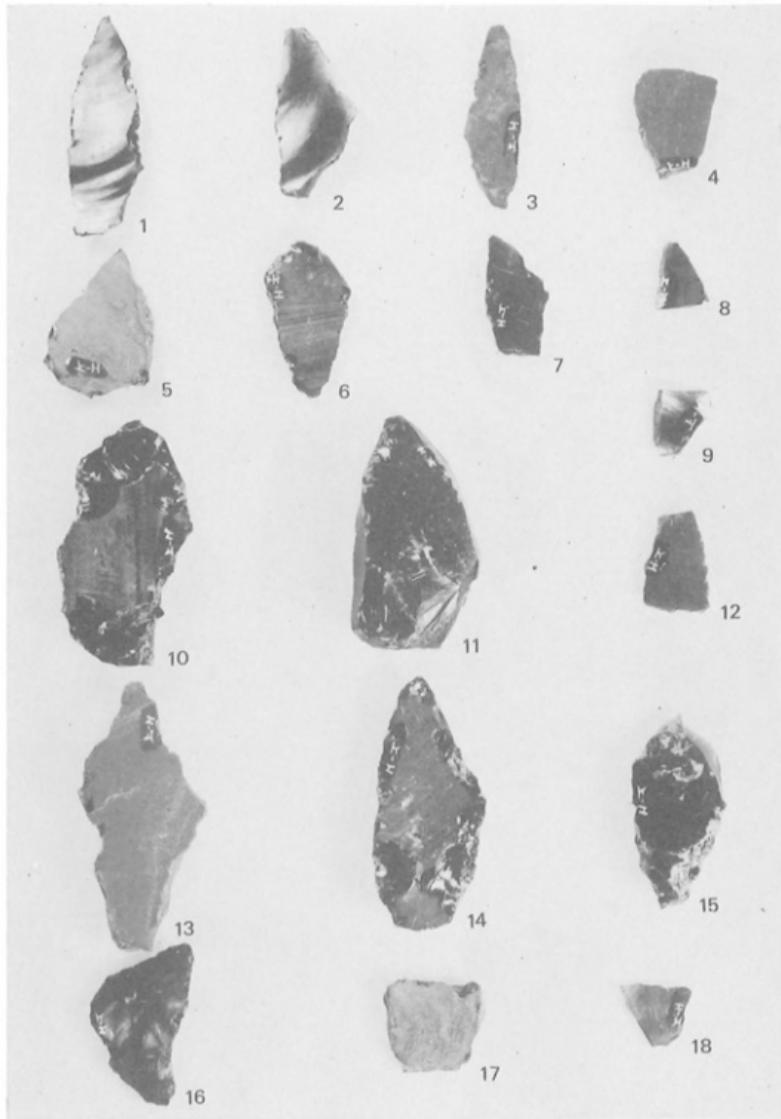
140

141

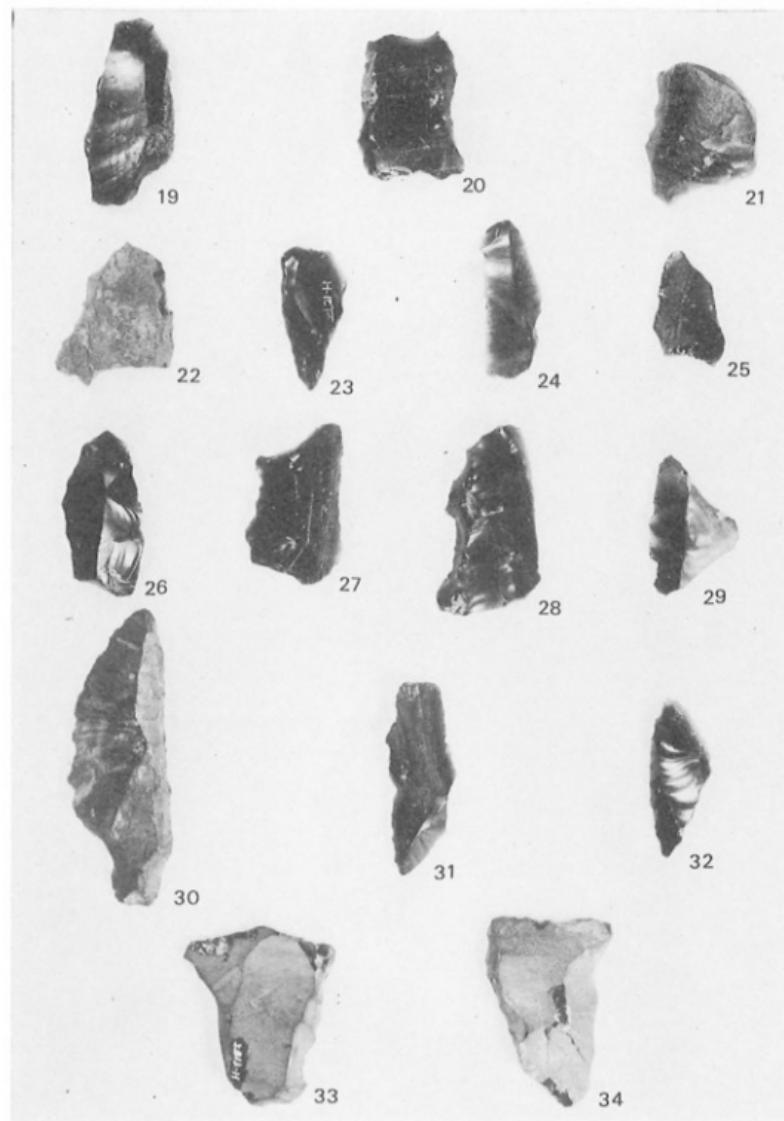
砾石・石核(裏)



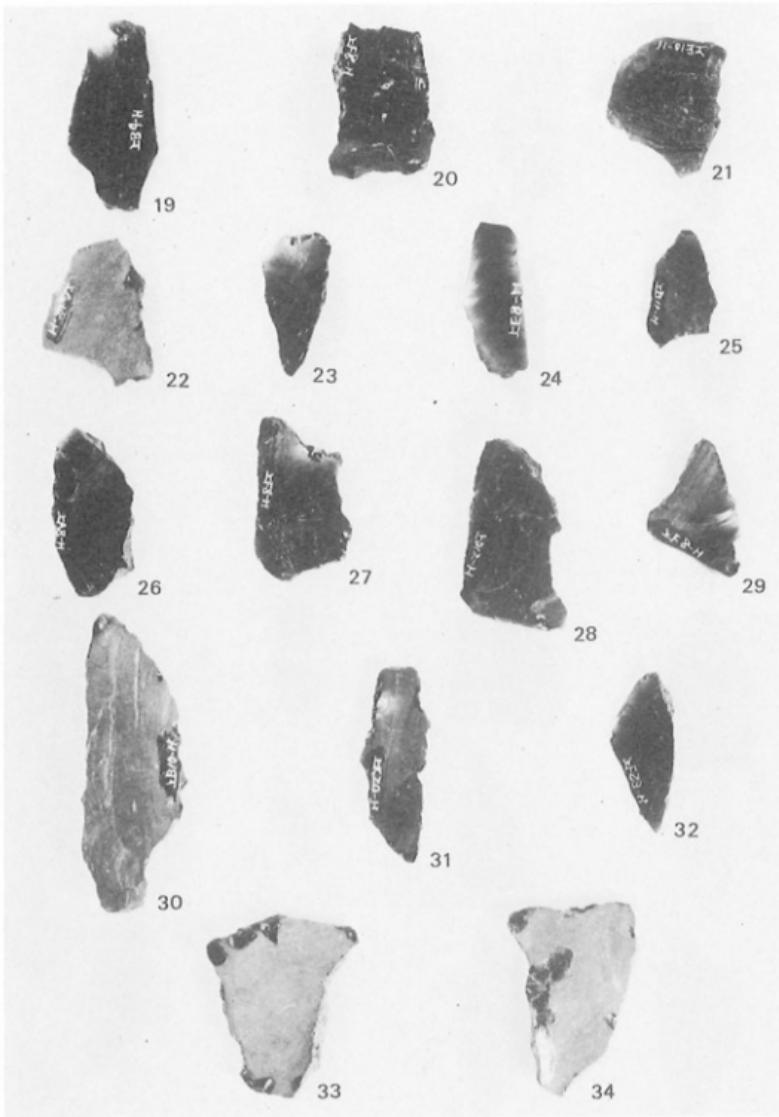
遺跡周辺表面採集の石器（表）



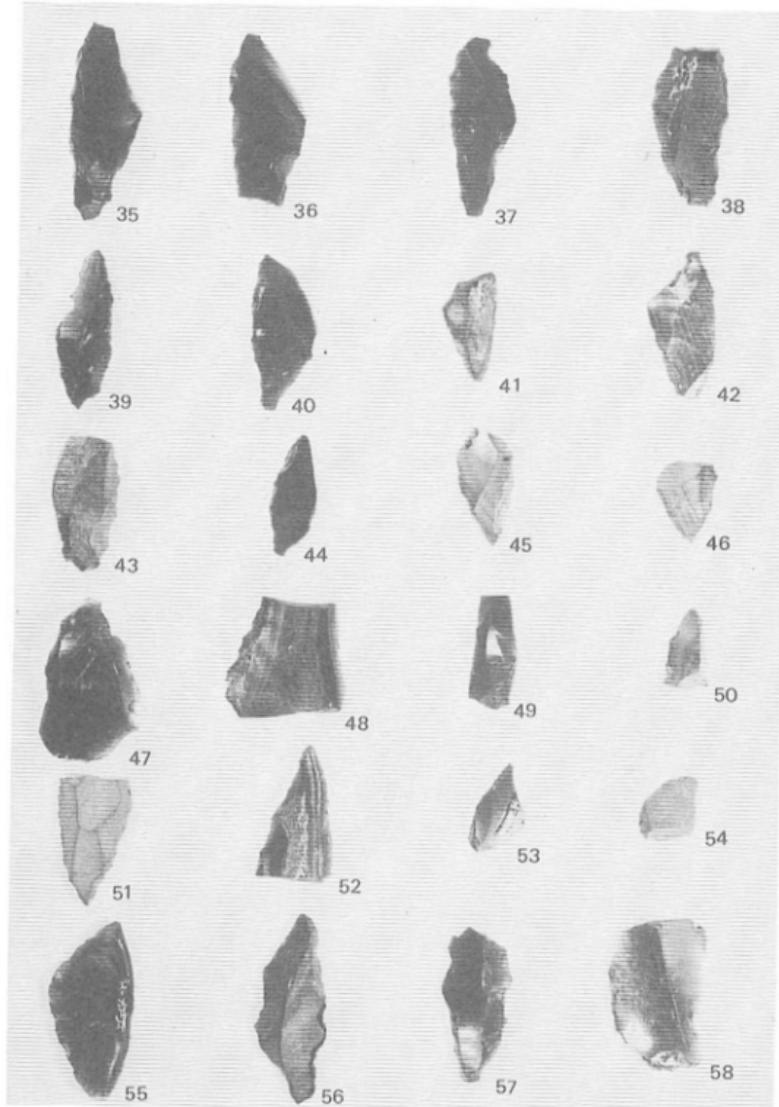
遺跡周辺表面採集の石器（裏）



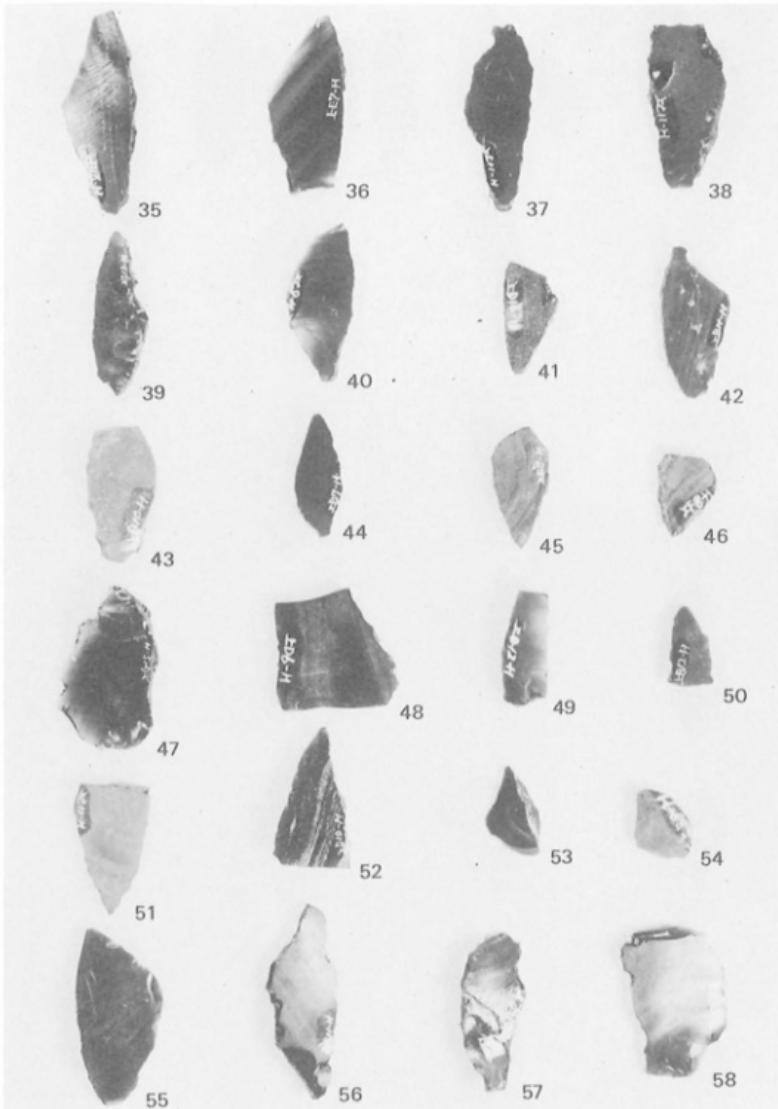
A地点表土出土の石器(1) (表)



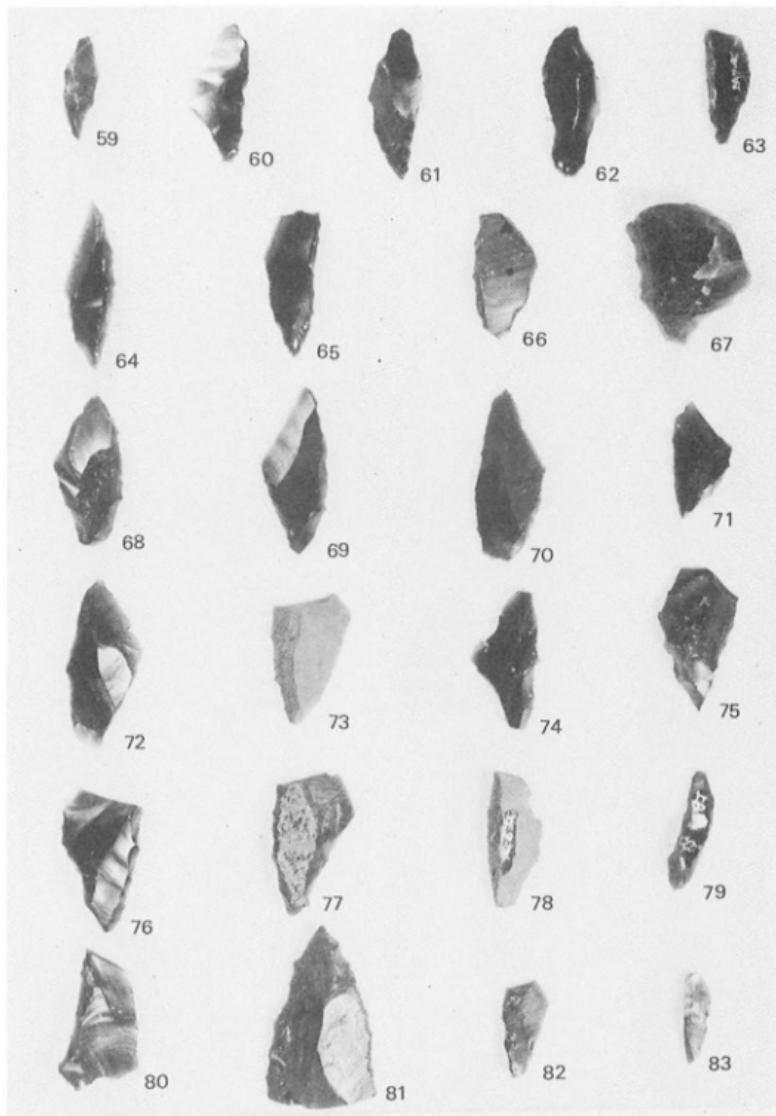
A 地点表土出土の石器(1) (裏)



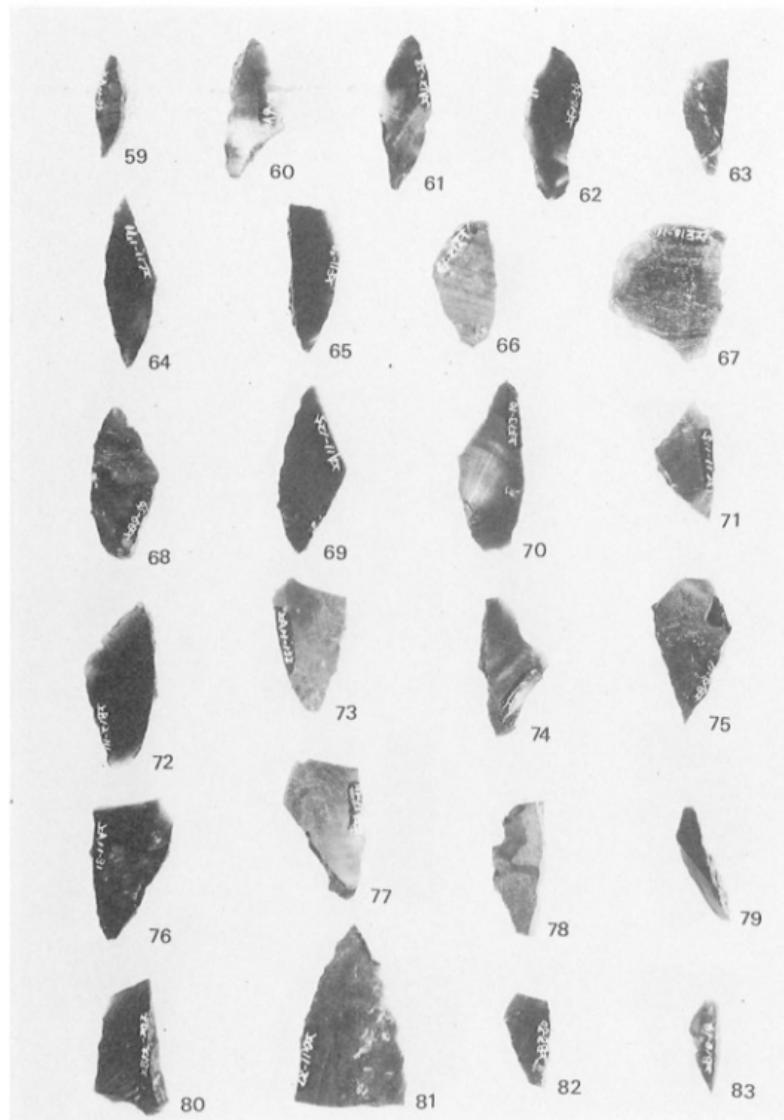
A地点表土出土の石器(2)(表)



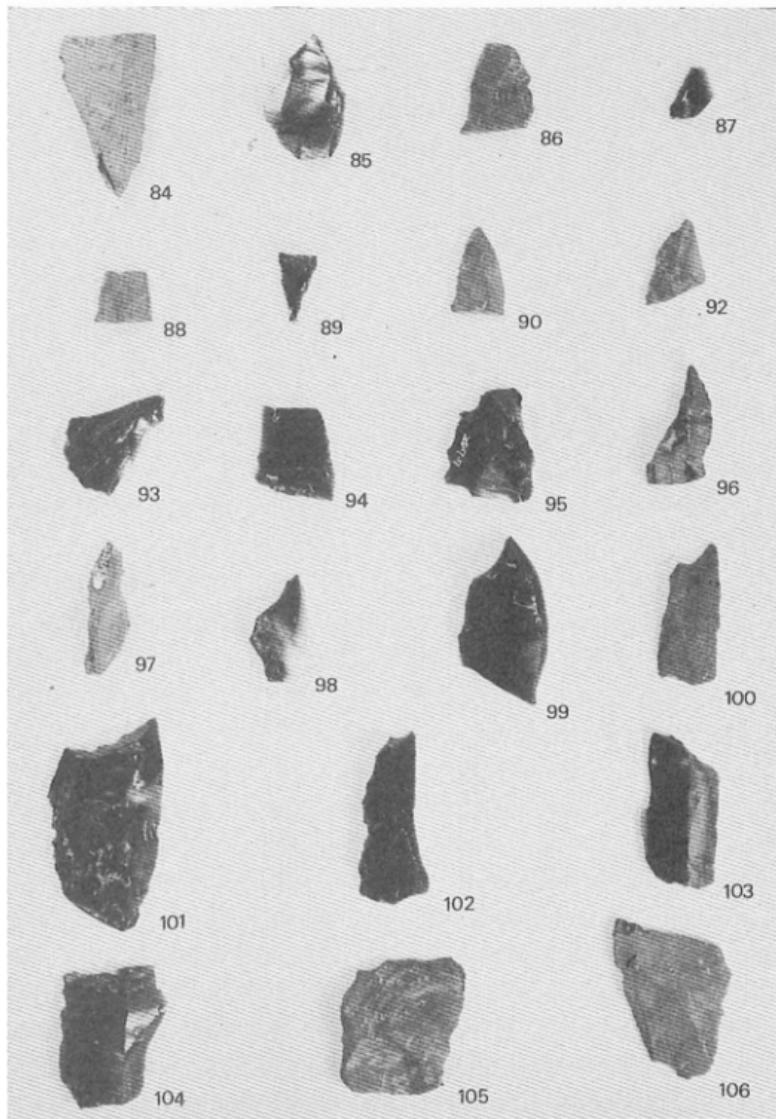
A 地点表土出土の石器(2) (裏)



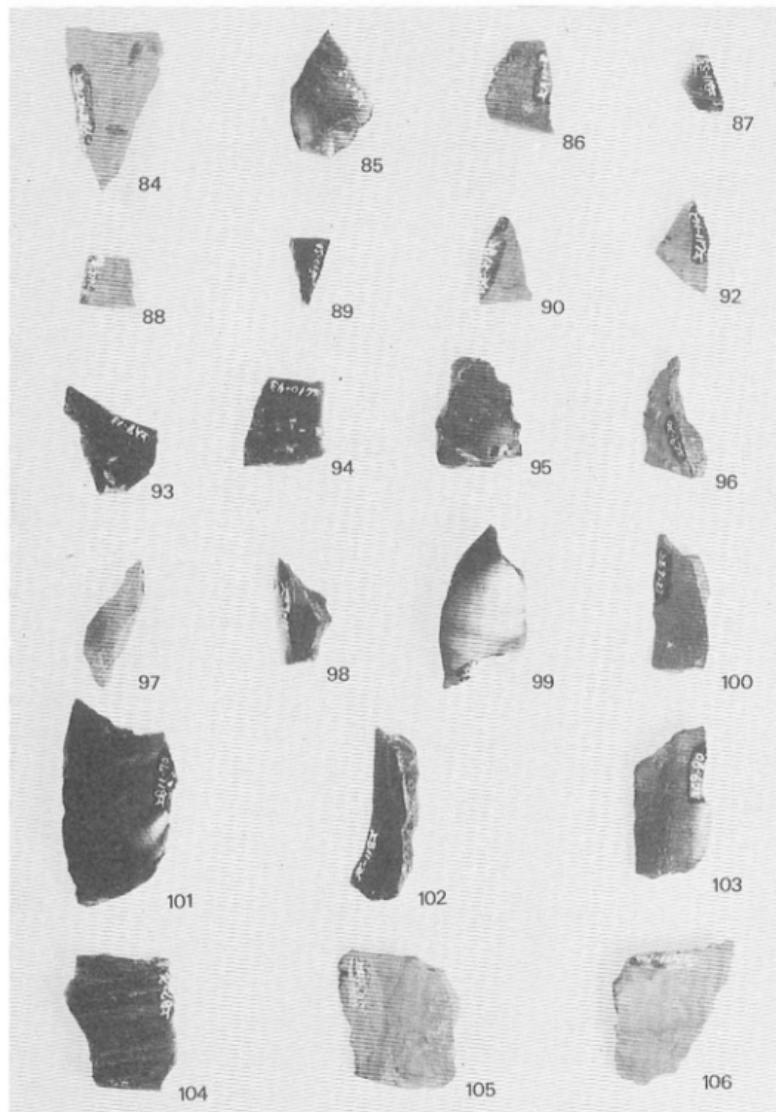
A 地点出土の石器(1) (表)



A 地点出土の石器(1) (裏)



A 地点出土の石器（表）



A地点出土の石器（裏）



107



108

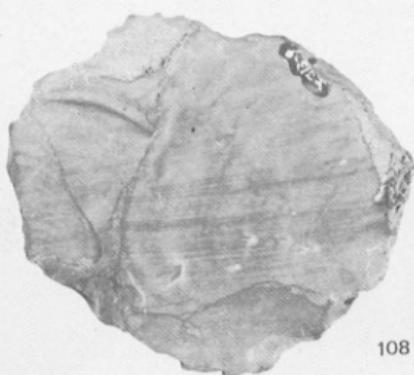


109

A 地点出土の石核(1) (表)



107



108



109

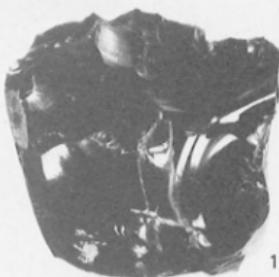
A 地点出土の石核(1) (裏)



110



111



112



113

A 地点出土の石核(2) (表)



110



111

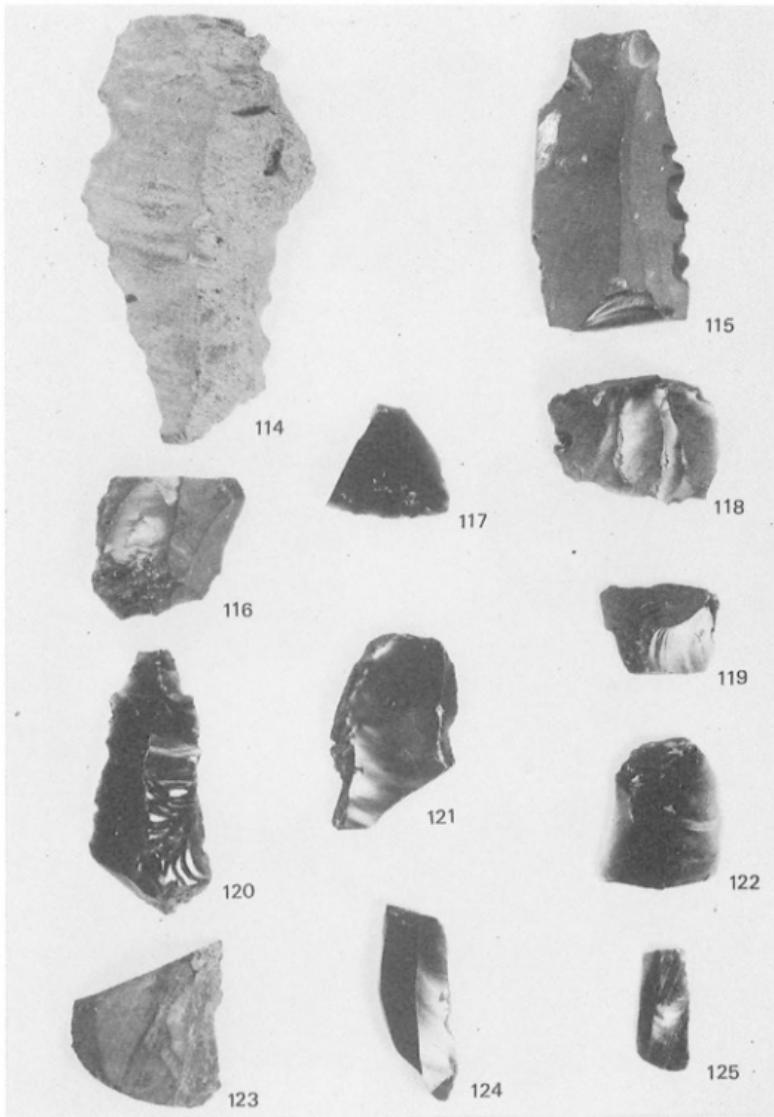


112

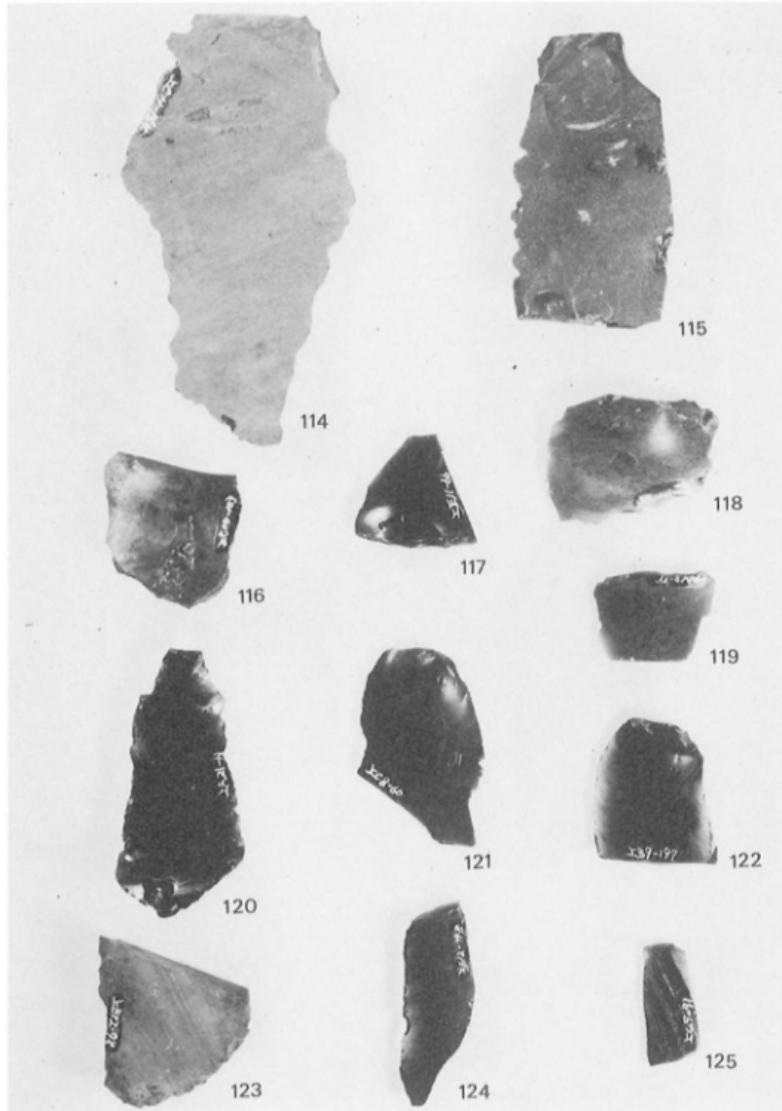


113

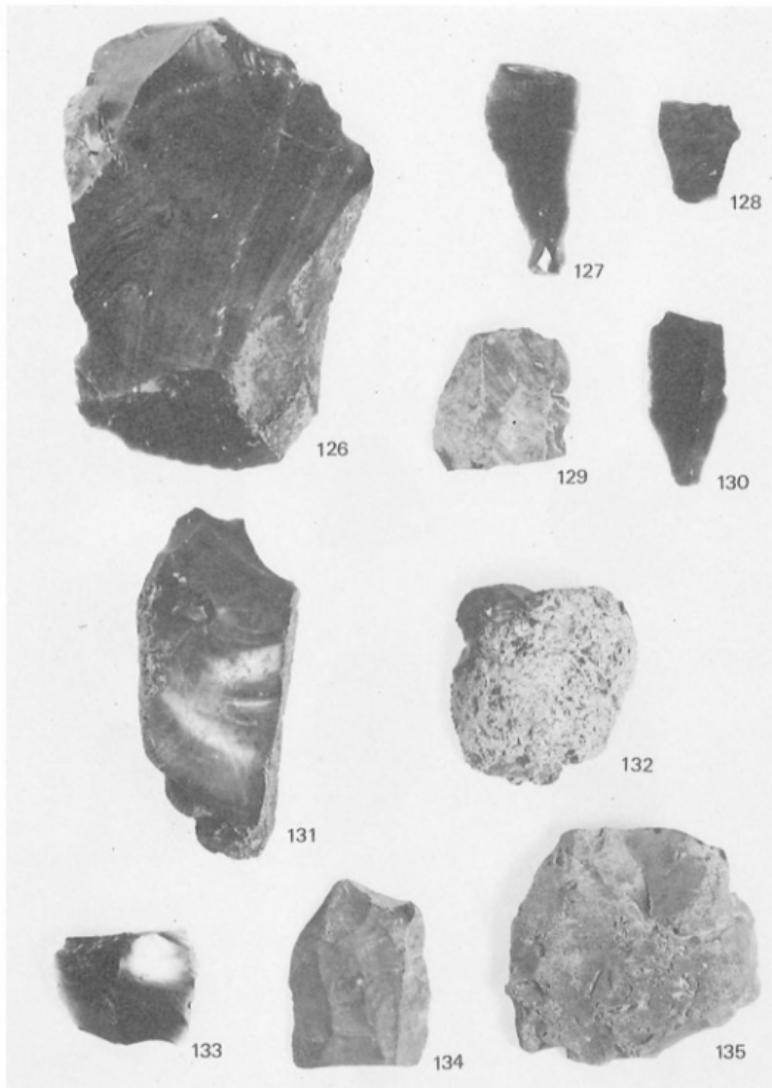
A 地点出土の石核(2) (裏)



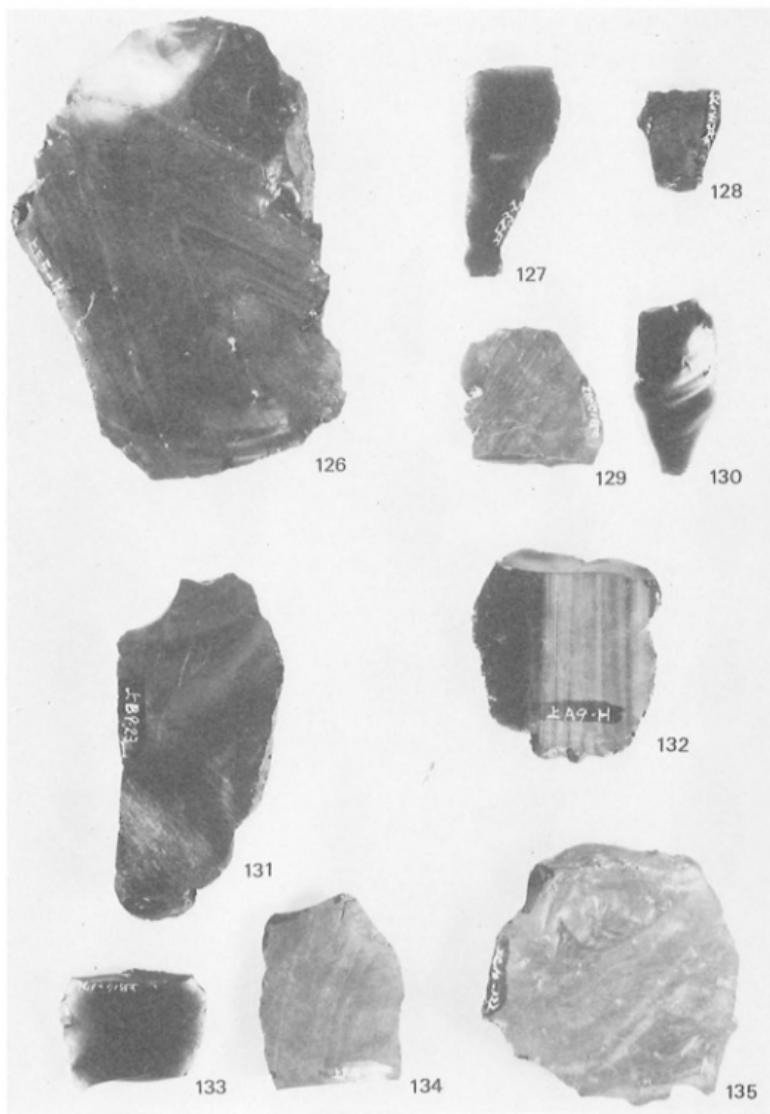
A 地点出土の石器(3) (表)



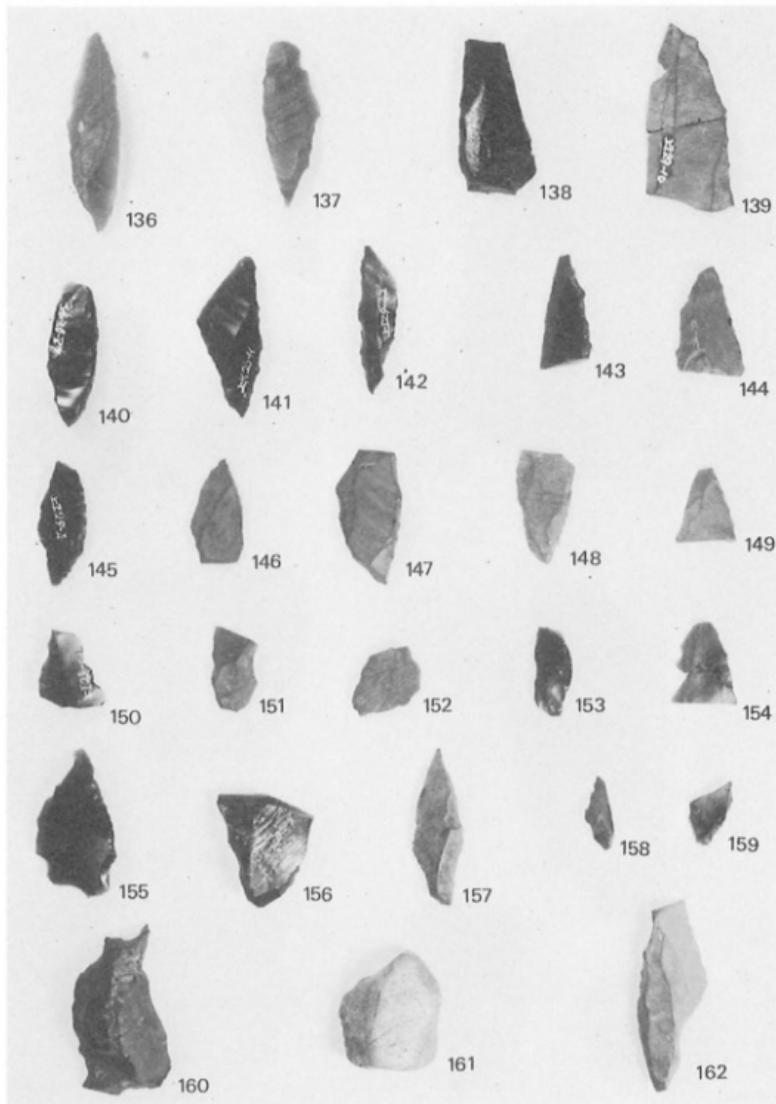
A 地点出土の石器 (3) (裏)



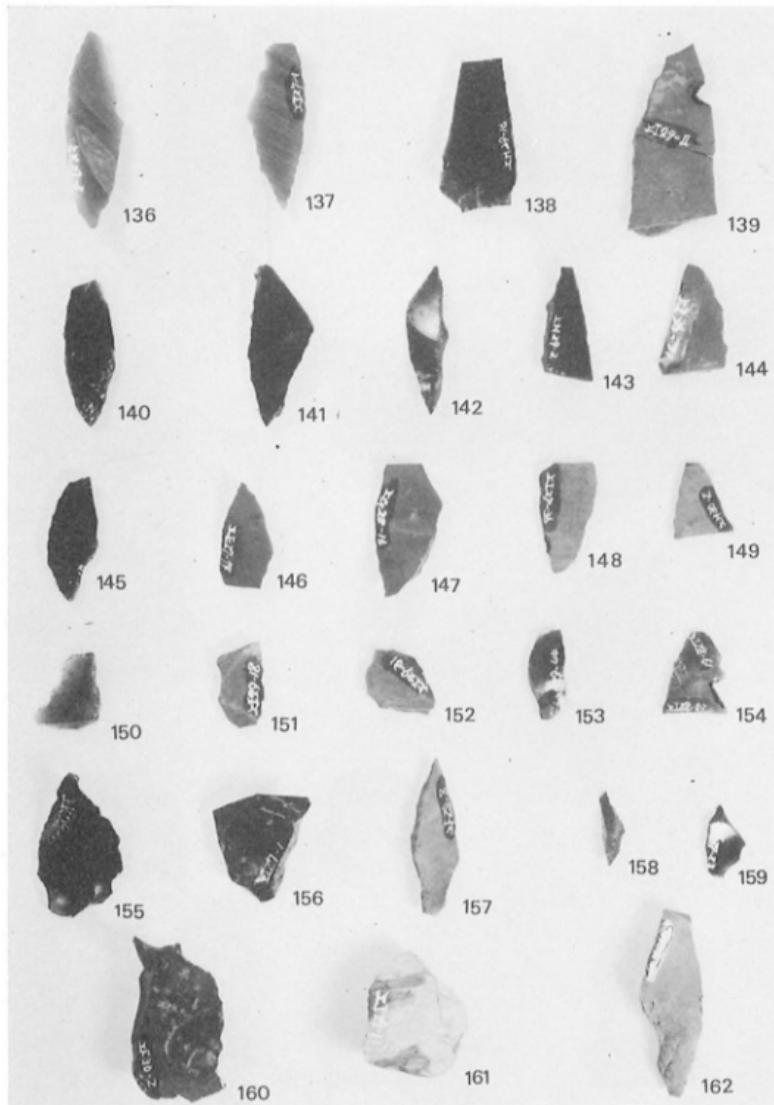
A 地点出土の石器(4) (裏)



A地点出土の石器(4) (表)



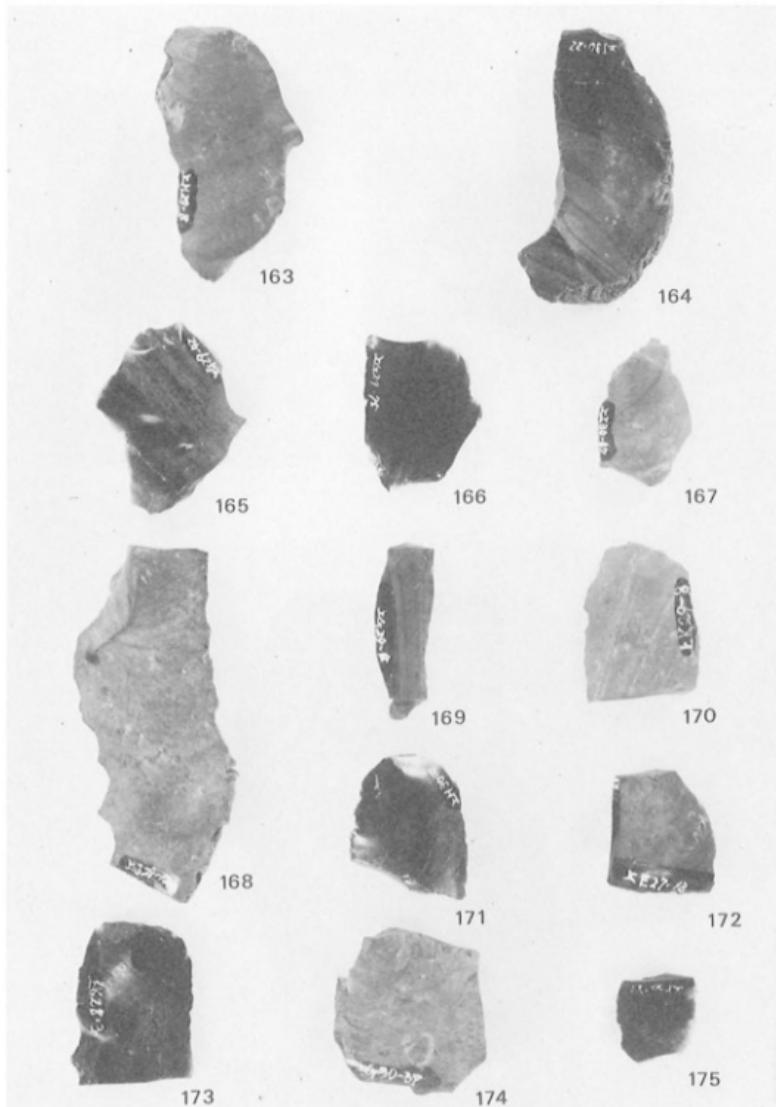
B 地点出土の石器(1) (表)



B 地点出土の石器(1) (裏)



B地点出土の石器（表）



B 地点出土の石器（裏）



176



177



178

B 地点出土の石器（表）



176

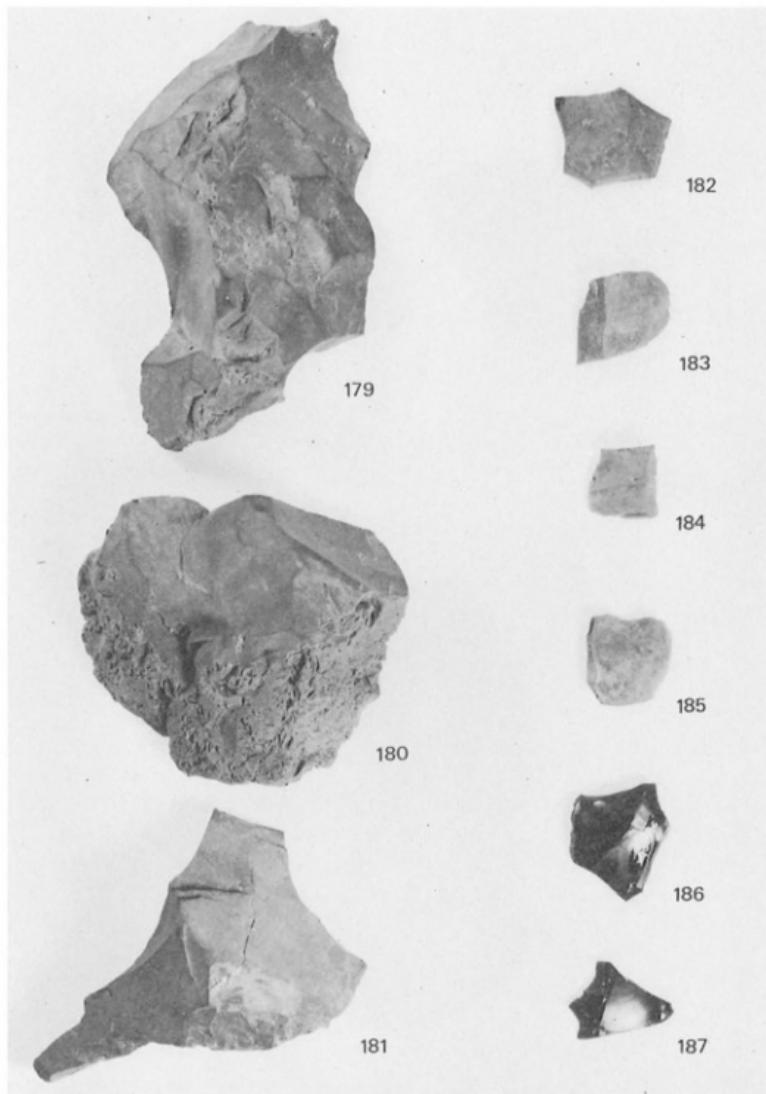


177

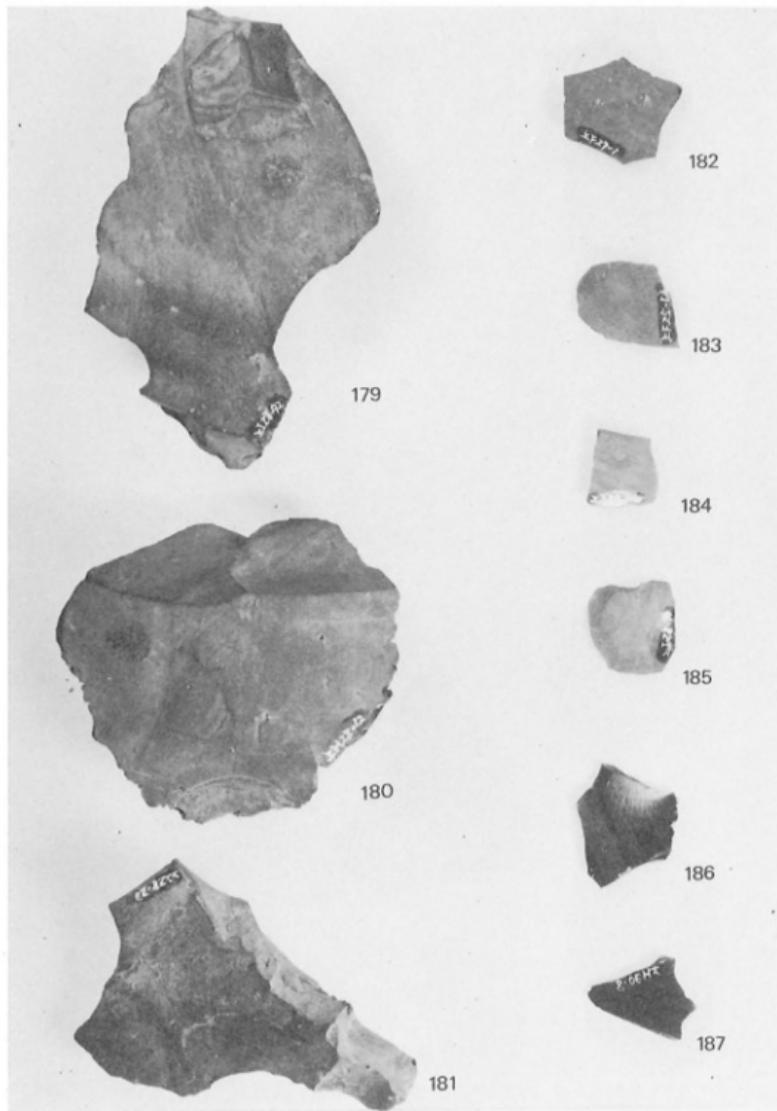


178

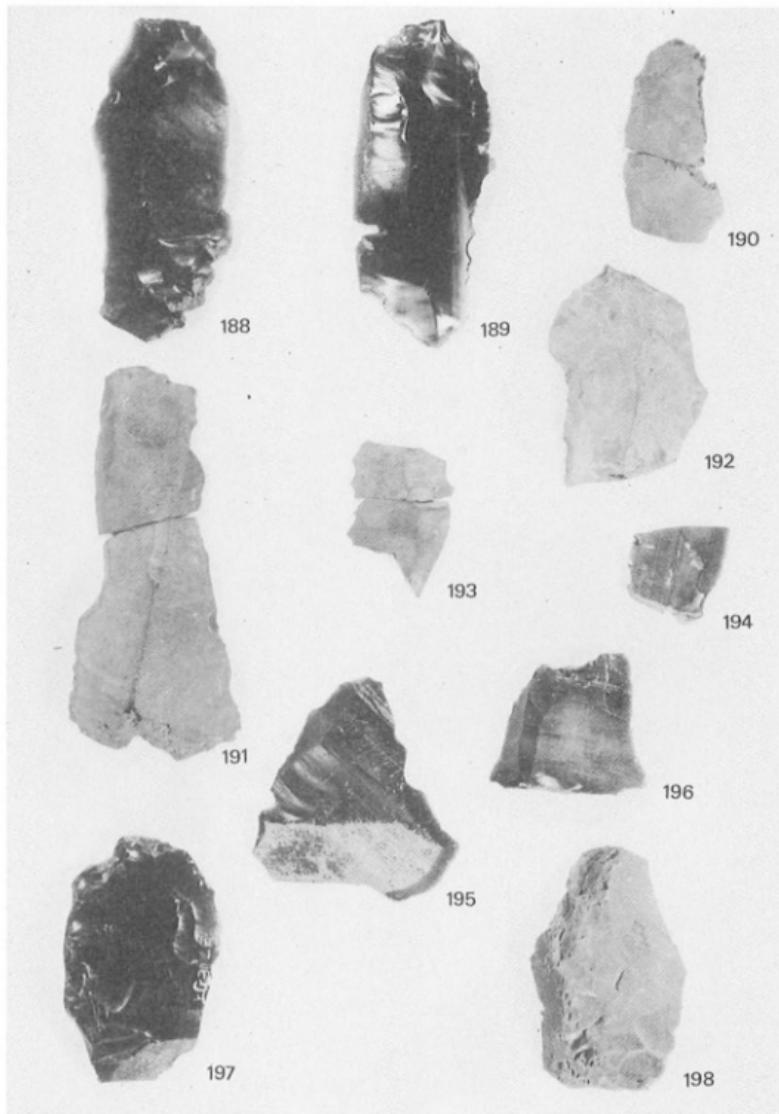
B 地点出土の石器（裏）



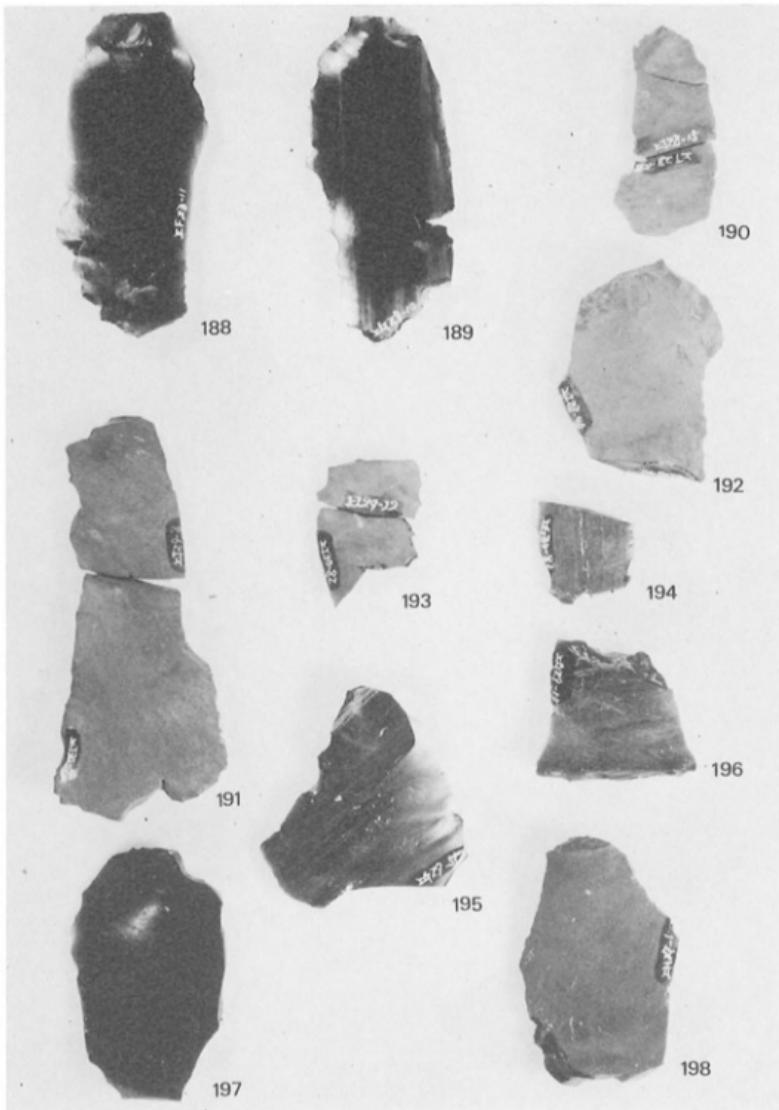
B 地点出土の石器（表）



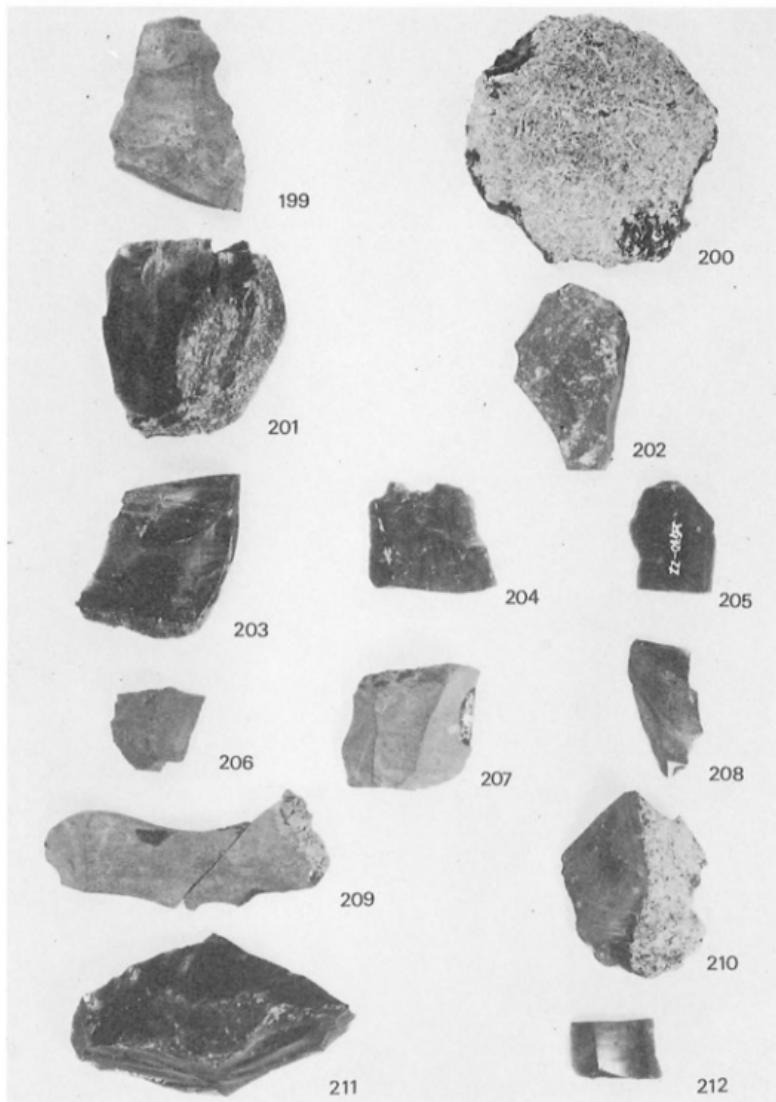
B 地点出土の石器（裏）



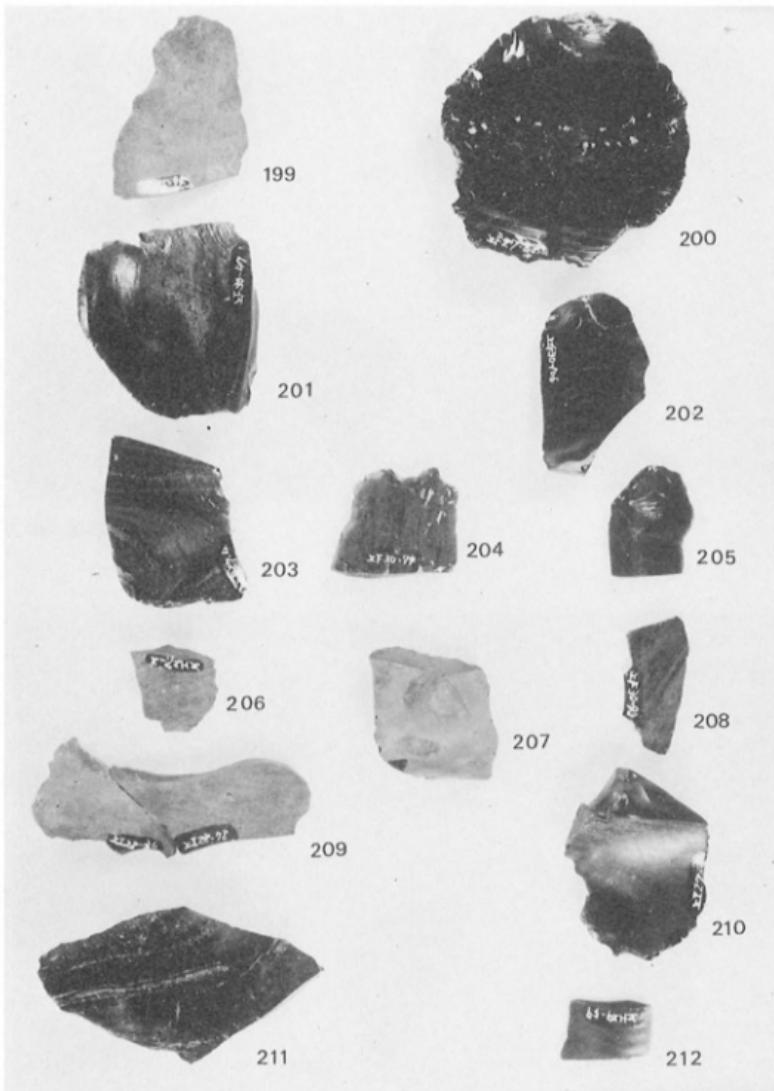
B 地点出土の石器 (表)



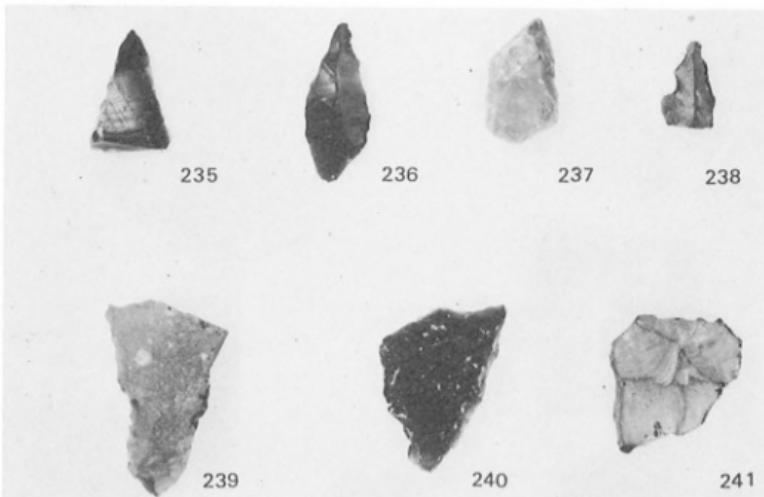
B 地点出土の石器（裏）



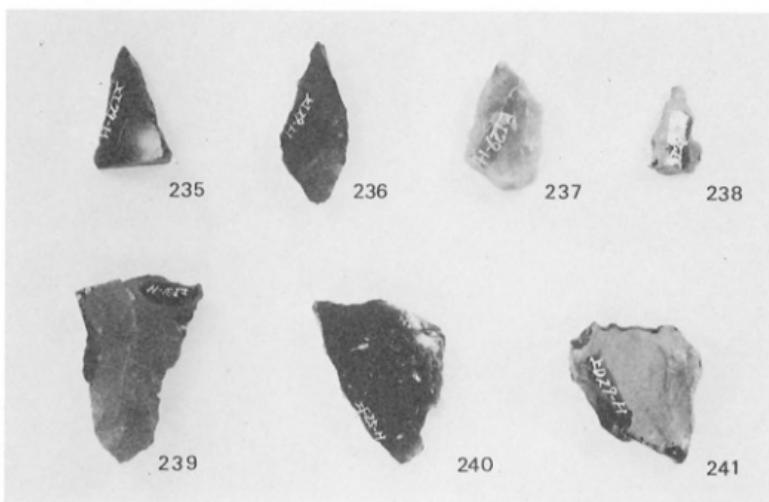
B 地点出土の石器（表）



B 地点出土の石器（裏）



B 地点表土出土の石器（表）



B 地点表土出土の石器（裏）

調查參加者



長崎県文化財調査報告書 第81集

上原遺跡

1986

発行所 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2-13

印刷所 三省堂印刷所
長崎市幸町4-28